

仙台市文化財調査報告書第315集

長町駅東遺跡第4次調査

—仙台市あすと長町土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ—

[第2分冊]

2007年3月

仙台市教育委員会

独立行政法人 都市再生機構

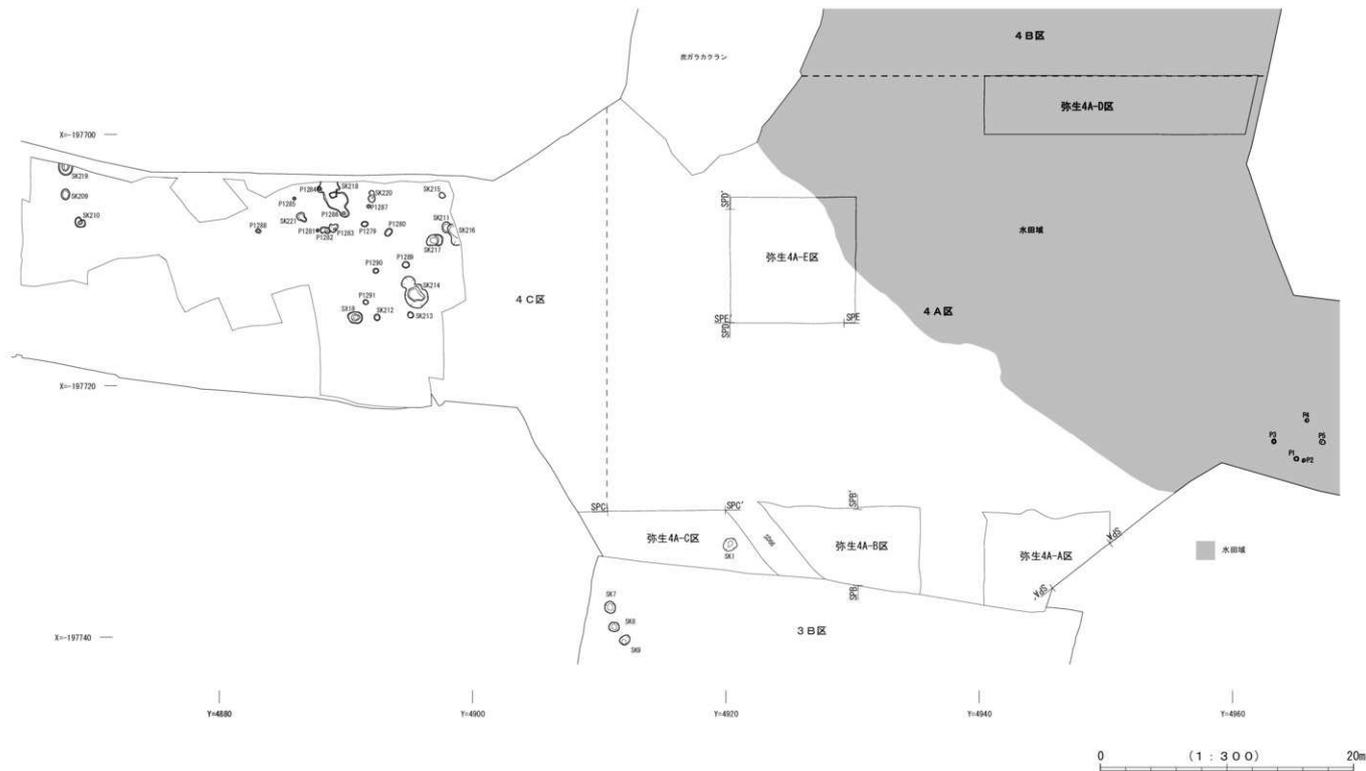
第2分冊

3. 弥生時代の遺構と遺物	375
(1) 土器埋設遺構	375
(2) 土墳墓	381
(3) 土坑・ピット・性格不明遺構	382
(4) IV・V層の出土遺物	387
(5) 水田跡	420
(6) 水田跡出土遺物	435
(7) その他の弥生時代出土遺物	442
(8) 下層調査(IV層～Ⅷ層)	444
第6章 自然科学分析	467
第7章 まとめ	481
写真図版	
報告書抄録	
付図	

第2分冊 挿図

第347図 弥生時代遺構全体図	373	第363図 IV・V層出土遺物(5)	397
第348図 弥生時代(先行調査)4A-A~E区基本層序	376	第364図 IV・V層出土遺物(6)	398
第349図 SK212・213土器埋設遺構	377	第365図 IV・V層出土遺物(7)	399
第350図 SK212埋設土器実測図	378	第366図 IV・V層出土遺物(8)	400
第351図 SK213埋設土器実測図・出土遺物	379	第367図 IV・V層出土遺物(9)	401
第352図 SK215土器埋設遺構	380	第368図 個別別資料1出土地点分布図	402
第353図 SK215埋設土器実測図	380	第369図 IV・V層出土遺物(10)	403
第354図 SK214土墳墓・出土遺物	381	第370図 IV・V層出土遺物(11)	404
第355図 SX18性格不明遺構	382	第371図 IV・V層出土遺物(12)	405
第356図 4A区土坑・ピット・性格不明遺構(弥生時代)	383	第372図 IV・V層出土遺物(13)	406
第357図 4C区土坑(弥生時代)	384	第373図 IV・V層出土遺物(14)	407
第358図 4C区ピット(弥生時代)	385	第374図 IV・V層出土遺物(15)	408
第359図 IV・V層出土遺物(1)	392	第375図 IV・V層出土遺物(16)	409
第360図 IV・V層出土遺物(2)	393	第376図 IV・V層出土遺物(17)	410
第361図 IV・V層出土遺物(3)	394	第377図 IV・V層出土遺物(18)	411
第362図 IV・V層出土遺物(4)	395	第378図 IV・V層出土遺物(19)	412

第379図	IV・V層出土遺物20	413	第417図	その他の弥生時代出土遺物18	462
第380図	IV・V層出土遺物21	414	第418図	その他の弥生時代出土遺物19	463
第381図	IV・V層出土遺物22	415	第419図	その他の弥生時代出土遺物20	464
第382図	IV・V層出土遺物23	416	第420図	その他の弥生時代出土遺物21	465
第383図	IV・V層出土遺物24	417	第421図	その他の弥生時代出土遺物22	466
第384図	4 A区石器出土地点分布図	418	第422図	プラント・オパール分析試料採取地点	468
第385図	4 A・B区石器出土地点分布図	419	第423図	(図1) 4 A区東壁地点における プラント・オパール分析結果	474
第386図	IV d層上面で検出された擬似畦畔A	421	第424図	(図2) 4 A区西壁地点における プラント・オパール分析結果	475
第387図	IV f層上面で検出された擬似畦畔A	423	第425図	(図3) 4 B区東壁地点における プラント・オパール分析結果	476
第388図	V a層水田跡	425	第426図	(図4) 4 B区中央地点における プラント・オパール分析結果	477
第389図	V b層水田跡	427	第427図	(図5) 4 B区西壁地点における プラント・オパール分析結果	478
第390図	水田跡断面図(1)	429	第428図	(図6) 4 B区河川跡地点における プラント・オパール分析結果	479
第391図	水田跡断面図(2)	431	第429図	区画施設西側(4 C区)遺構重複状況	482
第392図	水田跡断面図(3)	433	第430図	区画施設東側(4 A・4 B区)遺構重複状況	482
第393図	SD105溝跡(弥生時代)	434	第431図	竪穴住居跡カマド付設方向	485
第394図	水田跡出土遺物(1)	436	第432図	SD66各層からの出土遺物(1)	487
第395図	水田跡出土遺物(2)	437	第433図	SD66各層からの出土遺物(2)	489
第396図	水田跡出土遺物(3)	438	第434図	区画施設周辺遺構配置図	490
第397図	水田跡出土遺物(4)	439	第435図	区画施設西側1～IV群住居	492
第398図	水田跡出土遺物(5)	440	第436図	長町駅東遺跡4区遺構重複関係模式図	495
第399図	水田跡出土遺物(6)	441	第437図	各期竪穴住居跡出土土器(1)	498
第400図	その他の弥生時代出土遺物(1)	445	第438図	各期竪穴住居跡出土土器(2)	500
第401図	その他の弥生時代出土遺物(2)	446	第439図	各期竪穴住居跡出土土器(3)	502
第402図	その他の弥生時代出土遺物(3)	447	第440図	各期竪穴住居跡出土土器(4)	504
第403図	その他の弥生時代出土遺物(4)	448	第441図	各期竪穴住居跡出土土器(5)	506
第404図	その他の弥生時代出土遺物(5)	449	第442図	各期竪穴住居跡出土土器(6)	508
第405図	その他の弥生時代出土遺物(6)	450	第443図	各期竪穴住居跡出土土器(7)	510
第406図	その他の弥生時代出土遺物(7)	451	第444図	長町駅東遺跡全体図と郡山遺跡(1期官衙)	511
第407図	その他の弥生時代出土遺物(8)	452			
第408図	その他の弥生時代出土遺物(9)	453	付図1	長町駅東遺跡4区遺構全体図(1)	
第409図	その他の弥生時代出土遺物(10)	454	付図2	長町駅東遺跡4区遺構全体図(2)	
第410図	その他の弥生時代出土遺物11	455			
第411図	その他の弥生時代出土遺物12	456			
第412図	その他の弥生時代出土遺物13	457			
第413図	その他の弥生時代出土遺物14	458			
第414図	その他の弥生時代出土遺物15	459			
第415図	その他の弥生時代出土遺物16	460			
第416図	その他の弥生時代出土遺物17	461			



第347図 弥生時代遺構全体図

3. 弥生時代の遺構と遺物

前年度3B区調査で弥生時代の遺構・遺物が検出されたことを受け、3B区に隣接する4A区では古代面の調査に併行し、4A-A～E区を設定して先行調査を実施した(第347・348図)。この結果、下層において弥生時代の遺物包含層及び遺構面の存在が明らかとなり、古代面調査終了に引き続いて調査区全体での確認作業を行った。

検出された遺構面は東側が20～30cm程低くなっており、この低地全体が水田跡であることが確認された。また、西側の微高地上からは土器埋設遺構・土壌墓・土坑・ピット・性格不明遺構が検出されている。これらに伴う出土遺物は、弥生時代中期樹形甕式期に位置づけられる。層位・遺構の分布状況等から、微高地上の遺構群と水田跡が同時期に存在した可能性は高い。本調査区では居住域は確認されなかったものの、墓域と生産域が同時に確認できたことは、今次調査の大きな成果の一つと言える。

古代遺構の主要検出面であるIVc層を掘り下げると、水田跡が確認された調査区東側の低地では黒味が強いIVd層が広がっており、以下IVe・IVf層と互層状の堆積をみせる。IVf層の下には、黄味が強いIVg層を局部的に挟む形でV層(Va・Vbに細分可)が堆積しており、このV層が弥生時代中期の遺物包含層となっている。これに対して調査区西側の微高地では、IV層は互層にはならず、「IV層上半」「IV層下半」と大別された。土層観察結果から、「IV層上半」がIVc・IVd層に、「IV層下半」がIVe～IVg層に相当するものと考えられる。V層直下に広がるにぶい黄褐色のVI層上面にて多くの遺構が検出されたが、土器埋設遺構はその掘り込み面がVI層上面より上位と判断され、他の遺構も同様の可能性が高い。

(1) 土器埋設遺構

土器が埋設されていた遺構は3基検出された。うち2基にはやや大型の壺が正位に設置されており、これらの土器は土器棺墓として用いられたものと推定される。同様の土器埋設遺構は、前年度3B調査区でも3基(SK7～9)確認されており、今次分布域から30m程南東に離れた位置での検出である(第347図)。

SK212 土器埋設遺構(第349・350図)

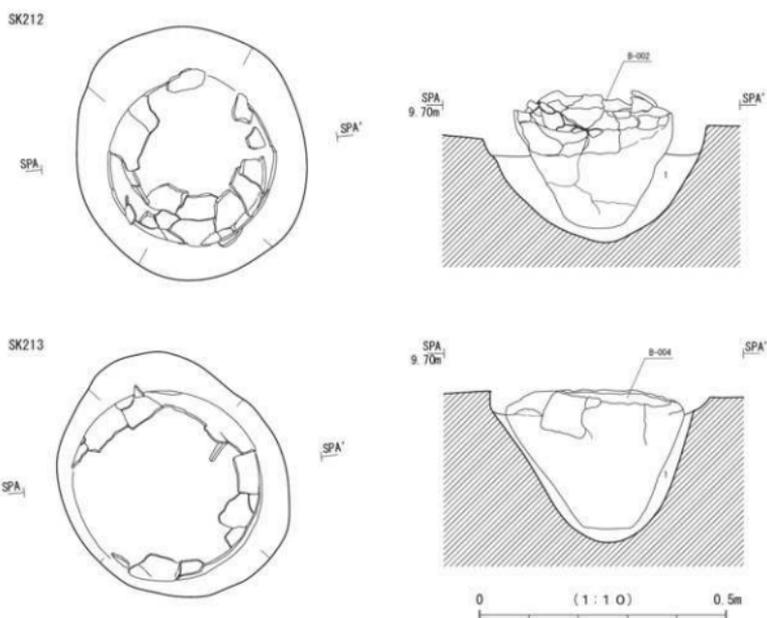
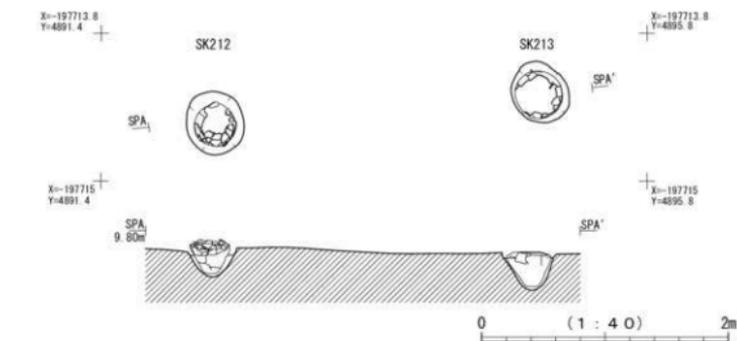
4C区西側、51グリッドに位置し、V層調査中に棺身土器を検出した。この棺身である壺の直上から、別個体の甕下半部(第350図-1)が出土しており、後者が蓋となって合口の状態であったと推定されるが、検出時には土器埋設遺構に伴うものと認定していなかったため、遺構実測図には反映されていない。土器内に被葬者の痕跡は認められず、副葬品も出土しなかった。

棺身の壺(第350図-2)は日用品からの転用と思われ、頸部以上を打ち欠き、底部に径3cm程の孔を穿つ。植物茎回転文を地文とし、肩部以上にはミガキ、底部から上約2cm幅にナデを施す。また、木葉痕の残る底部には、整形時にはみ出た粘土を被せ込んだ形跡もみられる。

SK213 土器埋設遺構(第349・351図)

SK212から約22m東方に位置する。検出状況はSK212と同様であり、棺身である壺の直上から蓋が出土しているため、この蓋で棺身を閉口していたことが推定される。土器内に被葬者の痕跡は認められなかったが、土器底面から凝灰質頁岩製の有茎石罫(第351図-3)が1点出土している。

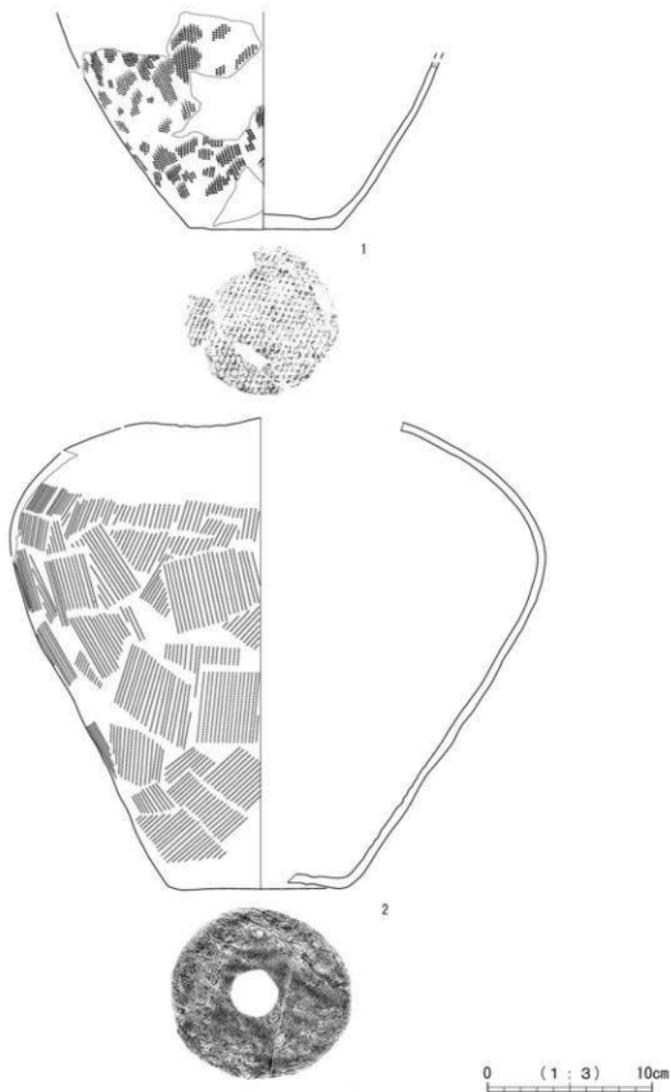
棺身土器(第351図-2)はSK212同様、頸部以上を打ち欠いているが、底部に穿孔されない。残存する器面全面にLR縄文を施しており、木葉痕の残る底部には、整形時にはみ出た粘土を被せ込んだ形跡が残る。蓋(第351図-1)は無文で、内面及び外面下端にはカーボンが吸着している。棺身土器同様、日用品を転用したものと思われる。



第349図 SK212・213土器埋設遺構

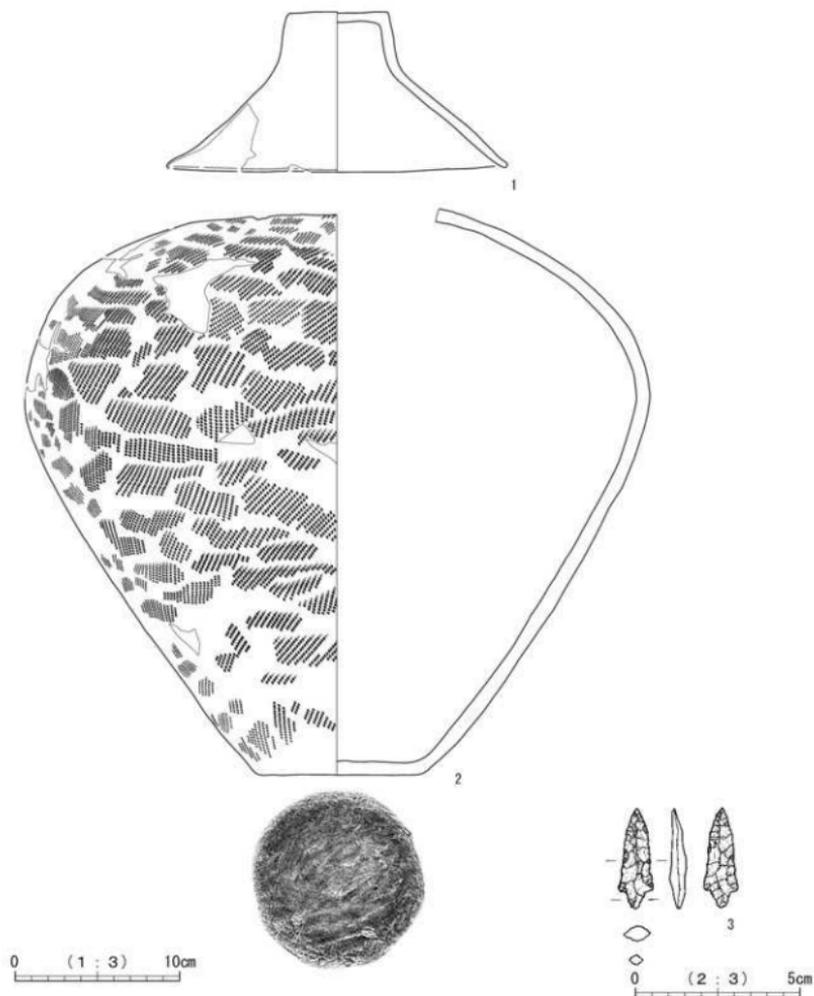
埋設土器遺構 埋土柱記表

遺構名	平面形	口径 (cm)	深さ (cm)	層位	土色	土性	備考
SK212	楕円形	54×46	35	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	掘り方
SK213	楕円形	56×42	30	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	掘り方



第350図 SK212埋設土器実測図

図版番号	登録番号	出土遺構	種別	器種	外面調整・文様	内面調整・文様	備考	写真図版
1	B-001	SK212	養生土器	甕	土肌陶文、底部直上ミ字キ		新代館、底面磨化既付着	152
2	B-002	SK212	養生土器	甕	ヘラ字キ→横筋条回転文→短部ミ字キ・底筋縁辺十字	ミ字キ(下位調査)	横筋付文、底面穿孔、本館着	152



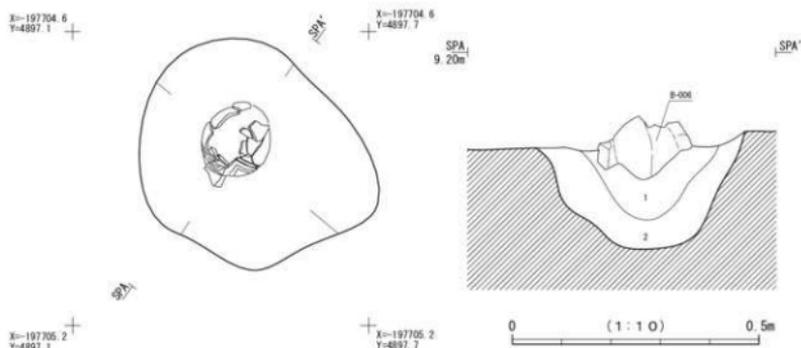
第351図 SK213埋設土器実測図・出土遺物

図版番号	登録番号	出土遺構	種別	器種	外面調整・文様	内面調整・文様	備考	写真 図版			
1	B-003	SK213	焼生土器	蓋	表面ナデ→ミガキ、口縁部磨理ミシ→磨ナデ、人中面ナデ	内面部分灰物吸着(焼成時)→ナデ→ミガキ	口縁縁面に灰化物付着	133			
2	B-004	SK213	焼生土器	甕	LR縄文(斜行)	転覆のミガキ(下部磨過)	口縁縁面に灰化物付着 底部打丸、本葉削	133			
図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	石材	備考	写真 図版
3	Ka-092	SK213	土器内	石器	石鏃	1A1	31×10×0.5	12	層状質頁岩	有茎、先端角45°、軸厚比0.50、裏材面残す	133

SK215 土器埋設遺構(第352・353図)

4 C区西側、81グリッドに位置し、V層調査中に完形の壺とそれを囲む不整形円形の土坑プランを検出した。土坑の規模は、上端51×42cm、検出面からの深さ24cmである。土器は高さ17.6cmと小型で、土坑底面から14cm程上位に横置されていた。SK212・213と異なり、小型の土器そのものを埋納した感があるが、底部に二次的な穿孔の痕跡が認められたため、葬制・祭祀に関わる遺構と思われる。

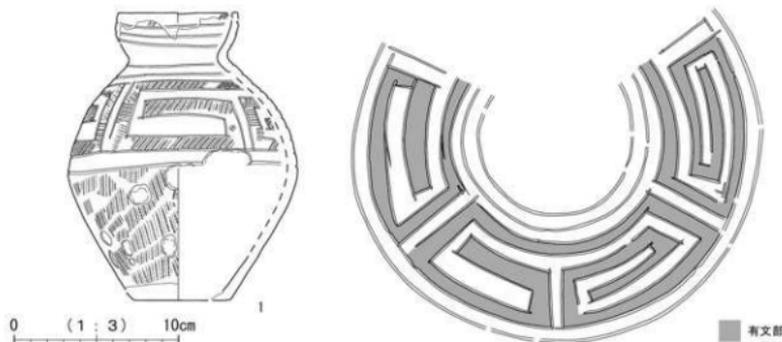
土器の口縁部は内湾しながら立ち上がり、受口状を呈する。最大径は胴部のほぼ中央にあり、この上に4分割した文様帯が展開する。細めの沈線で矩形の渦文を描き、充填文及びミガキにより、有文部・無文部を作出している。土器実測図とともに文様展開模式図を掲載したが、この模式図の中央で分割した左右の文様では、渦文の巻き方に



第352図 SK215土器埋設遺構

SK215埋設土器遺構 埋土坑記述

遺構名	平面形	規模 (cm)	深さ (cm)	層位	土色	土性	備考
SK215	円形	51×42	24	1	10YR4/1 褐色色	シルト	
				2	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	



第353図 SK215埋設土器実測図

図取番号	登録番号	出土遺構	種類	器種	外面調整・文様	内面調整・文様	備考	写真掲載
1	B-006	SK215	甕形土器	甕	上平部沈線→L線文・2線飾→L字文、下平部L線文・L線文	ナシ	底部穿孔、外面焼ハジケ?	154

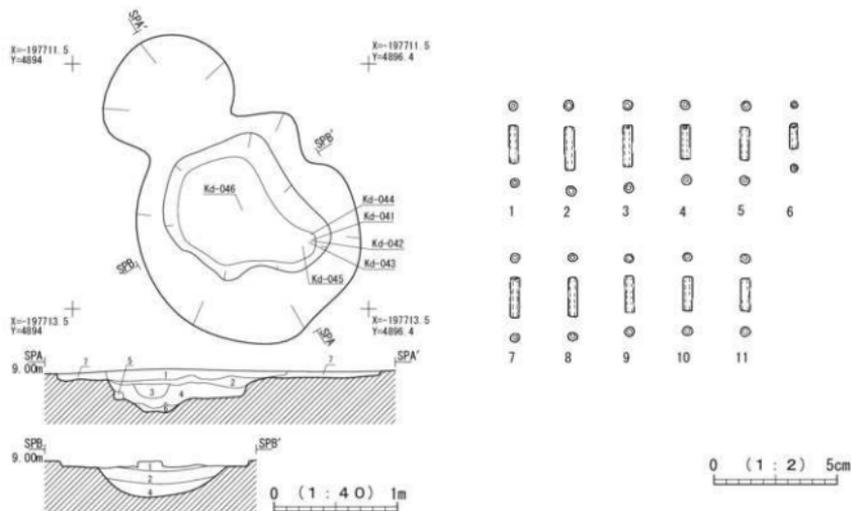
差異が認められる。またこの左右それぞれの文様中では、2つ渦文が更に左右対称になる。文様を構成する沈線の切り合いから施工順序を追うと、まず胴部最大径部分と頸部の横位文様区画線を引き、次いで縦に4分割する区画線で割り付ける。各渦文は、概ね横線を引いてから縦の短沈線を埋めて完成される。また、渦文の隅に粗雑な短沈線が認められる箇所があり、文様割付の目安とも考えられる。胴部下半には縦走する地文縄文が施される。

(2) 土墳墓

検出された土坑のうち、遺物出土状況から土墳墓と認定できたのは1基であるが、調査段階で性格不明遺構としたSX18についても、配置・規模・形状から同様の目的で構築された可能性が高いと判断し、本項で記述した。

SK214 土墳墓(第354図)

4C区西側、51グリッドに位置し、VI層上面で270×175cmの不整形プランを検出した。土塚外縁は深さ5cm程のテラス状を呈し、土塚中央に上端140×100cm、深さ38cmの窪みを持つ。堆積土は7層に分層した。埋土中から11点の碧玉製管玉が出土しており、土塚墓被葬者の着装品或いは副葬品と考えられる。この11点のうち出土原位置を特定できたのは6点で、1点は窪み部分の中央、それ以外は南東隅に集中する。土器埋設遺構群分布図の中に構築され、直近のSK213土器埋設遺構とは約40cmの距離に位置する。



第354図 SK214土墳墓・出土遺物

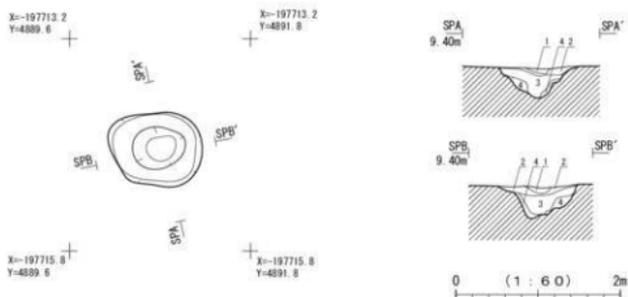
SK214土墳墓 埋土目録表

遺構名	平面形	縦長 (cm)	深さ (cm)	層位	土色	土性	備考
SK214	不整形	270×175	38	1	10YR5/4 12.5i・黄褐色	シルト	
				2	10YR5/3 12.5i・黄褐色	シルト	
				3	10RY3/1 靑灰色	シルト	
				4	10RY3/2 灰黄褐色	シルト	10YR4/6 褐色シルト少量含む
				5	10RY3/4 暗褐色	シルト	
				6	10YR6/3 12.5i・黄褐色	シルト	
				7	10YR3/2 黒褐色	シルト	テラス状部分

採取番号	登録番号	出土遺構	種別	器種	分類	長さ×直径(cm)	重量(g)	石材	備考	写真掲載
1	Kd-041	SK214	石製品	管玉	-	長さ16×直径0.3	0.3	碧玉	定形品、穿孔径0.2cm	154
2	Kd-042	SK214	石製品	管玉	-	長さ17×直径0.4	0.4	碧玉	定形品、穿孔径0.2cm	154
3	Kd-043	SK214	石製品	管玉	-	長さ17×直径0.4	0.4	碧玉	定形品、穿孔径0.2cm	154
4	Kd-044	SK214	石製品	管玉	-	長さ14×直径0.4	0.4	碧玉	定形品、穿孔径0.2cm	154
5	Kd-045	SK214	石製品	管玉	-	長さ13×直径0.4	0.3	碧玉	定形品、穿孔径0.2cm	154
6	Kd-046	SK214	石製品	管玉	-	長さ10×直径0.3	0.2	碧玉	折面残存表面を磨削、穿孔径0.2cm	154
7	Kd-047	SK214	石製品	管玉	-	長さ16×直径0.4	0.4	碧玉	定形品、穿孔径0.2cm	154
8	Kd-048	SK214	石製品	管玉	-	長さ15×直径0.9	0.3	碧玉	定形品、穿孔径0.2cm	154
9	Kd-049	SK214	石製品	管玉	-	長さ15×直径0.4	0.4	碧玉	定形品、穿孔径0.2cm	154
10	Kd-050	SK214	石製品	管玉	-	長さ14×直径0.4	0.3	碧玉	定形品、穿孔径0.2cm	154
11	Kd-051	SK214	石製品	管玉	-	長さ13×直径0.4	0.4	碧玉	定形品、穿孔径0.2cm	154

SX18 性格不明遺構(第355図)

4 C区西側、64グリッドに位置し、Ⅵ層上面で125×90cmの不整形プランを検出した。深さは約30cmで、埋土は4層に分層している。出土遺物もなく、形状からだけで構築目的を推定することは困難であるが、土壌の規模がSK214土壌墓の窪み部分と同程度であること、土器埋設遺構や土壌墓に近在することから、埋葬目的の遺構である可能性が高い。



第355図 SX18性格不明遺構

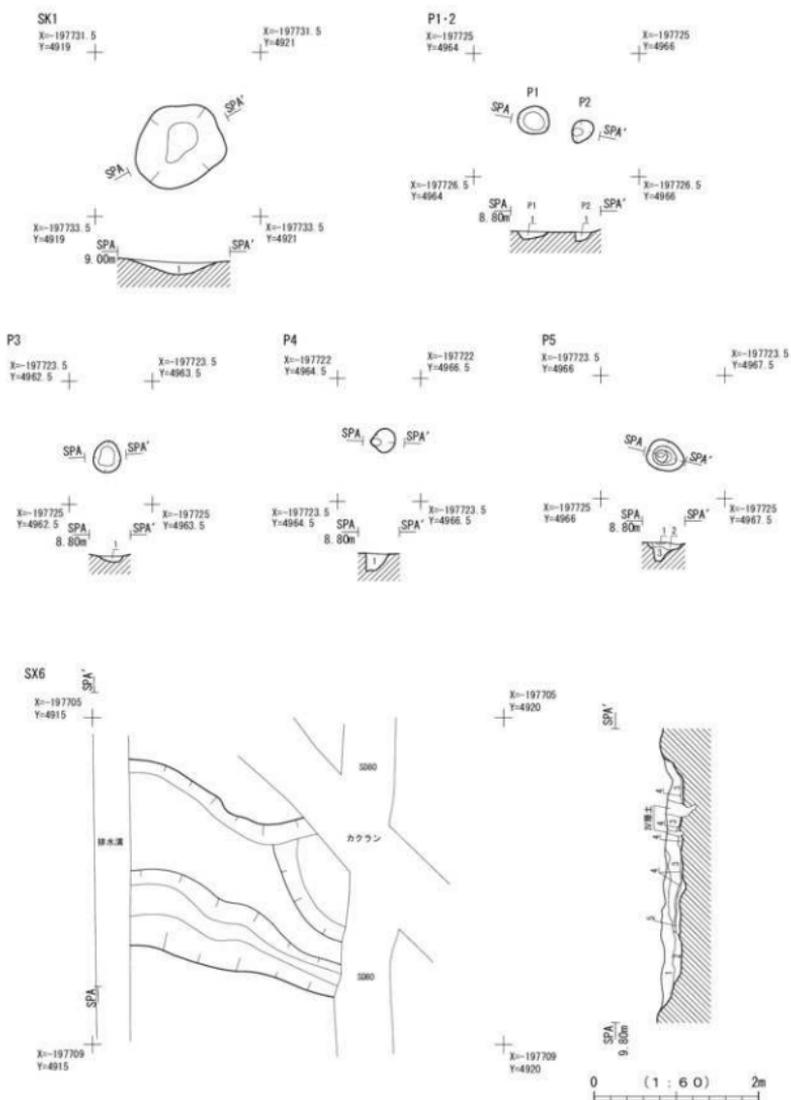
SX18性格不明遺構 埋土柱記表

遺構名	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	層別	土色	土性	備考
SX18	不整形	125×90	30	1	10YR6/2 灰黄褐色	砂質シルト	
				2	10YR7/1 灰白色	シルト	
				3	10YR8/3 浅黄褐色	シルト	
				4	10YR7/8 黄褐色	砂質シルト	

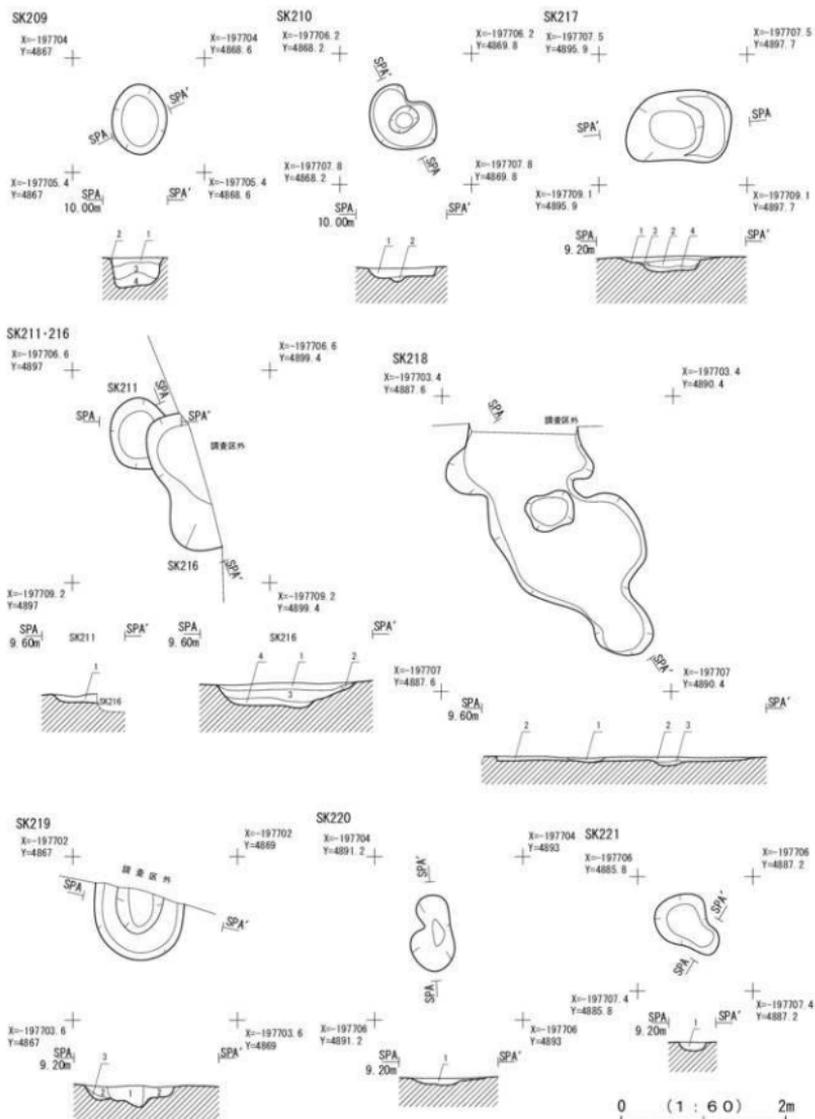
(3) 土坑・ピット・性格不明遺構(第356～358図)

その他弥生時代に帰属するものとして、土坑10基、ピット18基、性格不明遺構1基を検出した。SX6を除く全てをⅥ層上面で検出したが、土器埋設遺構の検出状況から考えると、実際の掘り込み面はⅤ層上面である可能性も残る。

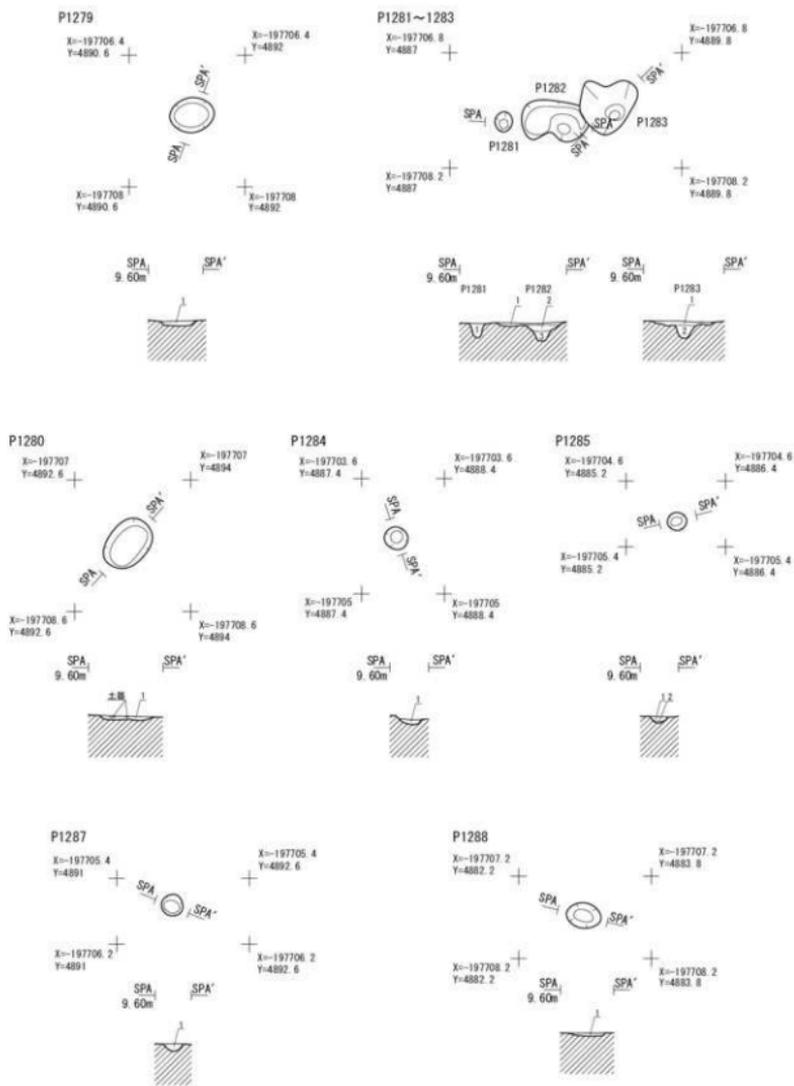
遺構番号は、4 A区の土坑・ピットについては古代面遺構番号と区別し、新たにSK1、PIから順に登録したのに対し、4 C区では古代面遺構番号を踏襲している。この遺構番号による混乱を避けるため、遺構図は遺構種別ごとではなく調査細分区ごとに掲載した。



第356図 4A区土坑・ピット・性格不明遺構(弥生時代)



第357図 4C区土坑(弥生時代)



第358図 4 C区ビット(弥生時代)

4 A区土坑-ビット 埋土記述書

遺構名	プロット	確認面	平面形	規模 (cm)	深さ (cm)	層位	土 色	土 性	備 考
SK1	5	瓦層	楕円形	185×96	15	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	白色砂多量、炭化物粒-粒少量含む
P1	17	瓦層	楕円形	38.5×35	10	1	7.5YR/1 暗灰色	粘土質シルト	瓦層土粒-炭化物粒少量含む
P2	17	瓦層	楕円形	30×22	11	1	7.5YR/1 暗灰色	粘土質シルト	瓦層土粒-炭化物粒少量含む
P3	28	瓦層	楕円形	39×32	7	1	7.5YR/1 暗灰色	粘土質シルト	瓦層土粒-炭化物粒少量含む
P4	28	瓦層	円形	30×30	20	1	7.5YR/1 暗灰色	粘土質シルト	瓦層土粒-炭化物粒少量含む
P5	28	瓦層	楕円形	44×36	22	1	7.5YR/2 暗暗褐色	シルト	瓦層土粒少量含む
						2	10YR5/4 に近い黄褐色	粘土質シルト	瓦層ブロック(径10~30mm)少量含む
						3	10YR4/1 暗灰色	粘土質シルト	に近い赤褐色粘土質シルトブロック多量に含む。草木根?

4 A区性格不明溝溝 埋土記述書

遺構名	プロット	確認面	平面形	規模 (cm)	深さ (cm)	層位	土 色	土 性	備 考
SX6	69	石+層	不整形	600×220	27	1	10YR4/3 に近い黄褐色	シルト	赤層下半土-炭化物粒微量含む
						2	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物-10YR5/4 に近い黄褐色土少量含む
						3	10YR3/3 暗褐色	シルト	10YR5/3 に近い黄褐色土-7.5YR4/4 褐色土少量含む
						4	10YR5/3 灰黄褐色	粘土	
						5	10YR3/3 暗褐色	砂	7.5YR4/4 褐色土微量含む

4 C区土坑 埋土記述書

遺構名	プロット	確認面	平面形	規模 (cm)	深さ (cm)	層位	土 色	土 性	備 考
SK200	78	瓦層	楕円形	85×65	49	1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	
						2	10YR7/1 灰白色	シルト	
						3	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	
						4	10YR5/1 暗灰色	シルト	
						1	10YR6/2 灰黄褐色	シルト	
SK210	64	瓦層	不整形	90×60	20	2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	
SK211	67	瓦層	楕円形	88×71	13	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	
SK216	67	瓦層 (不整形)	189×69	23	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト		
					2	10YR3/2 暗褐色	シルト		
					3	10YR5/4 に近い黄褐色	シルト		
					4	10YR5/3 に近い黄褐色	シルト		
					1	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト		
SK217	67	瓦層	不整形円形	126×84	14	2	10YR4/4 褐色	砂質シルト	
						3	10YR5/4 に近い黄褐色	砂質シルト	
						4	10YR6/8 暗黄褐色	砂質シルト	
SK218	80	瓦層	不整形	110×110	8	1	10YR5/3 に近い黄褐色	シルト	
						2	10YR5/4 に近い黄褐色	シルト	
						3	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	
SK219	78	瓦層 (楕円形)	110×60	30	1	10YR6/2 灰黄褐色	シルト		
					2	10YR4/4 褐色	シルト		
					3	10YR3/2 暗褐色	シルト		
SK220	67-81	瓦層	不整形	95×53	11	1	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	
SK221	66	瓦層	不整形	90×40	16	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	

4 C区ビット 埋土記述書

遺構名	プロット	確認面	平面形	規模 (cm)	深さ (cm)	層位	土 色	土 性	備 考
P1279	67	瓦層	楕円形	67×45	11	1	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	
P1280	67	瓦層	楕円形	54×39	12	1	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	
P1281	66	瓦層	円形	23×23	17	1	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	
P1282	66	瓦層	不整形	84×42	21	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	
						2	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	
						3	10YR5/3 に近い黄褐色	砂質シルト	
P1283	66	瓦層	楕円形	70×59	18	1	10YR5/4 に近い黄褐色	砂質シルト	
						2	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	
P1284	80	瓦層	円形	29×27	31	1	10YR5/3 に近い黄褐色	砂質シルト	
P1285	80	瓦層	円形	23×22	12	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	
P1286	66	瓦層	楕円形	29×24	9	-	-	灰黄褐色	断面図なし
P1287	67	瓦層	円形	28×28	16	1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	
P1288	66	瓦層	楕円形	45×22	2	1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	
P1289	51	瓦層	楕円形	56×34	3	-	-	に近い黄褐色	砂質シルト 断面図なし
P1290	51	瓦層	楕円形	42×39	6	-	-	に近い黄褐色	砂質シルト 断面図なし
P1291	51	瓦層	楕円形	42×37	4	-	-	に近い黄褐色	砂質シルト 断面図なし

(4) IV・V層の出土遺物

土器埋設遺構・土塚墓・土坑・ピット・性格不明遺構を検出した微高地においては、弥生時代の遺物包含層である基本土層IV・V層が堆積している。本項では、これらの層位から出土した遺物を中心に、a.土器、b.石器・石製品に分けて記述する。

a. 土器(第359-360図)

弥生土器の整理にあたっては、器種分類基準や部位・文様等の呼称について、「中在家南遺跡他」(1996)を参考・準用し、後出する「(5)水田跡出土遺物」「(6)その他の弥生時代遺物」の項においても同様に適用される。特に甕形土器の分類・呼称については、以下の通りである。

①甕Ⅰ類

胴部最大径の位置は胴上部にある。胴部と口縁部の境にくびれをもち、口縁部は短く、外反する。

②甕Ⅱ類

口縁部は甕Ⅰ類に比べ長めで、内湾しながら立ち上がるものを基本とする。胴部最大径の位置は胴上部にある。

また、文様の表現においては、頂部-谷部-頂部を1単位とする「波形式」のうち、谷部の沈線が途切れてV字形を呈するものを「V字波形式」、谷部が途切れずにU字形を呈するものを「U字波形式」、と設定された呼称をそのまま用いている。

30点の資料を図示した。基本土層V層からのものが主であるが、IV層からも少なからず出土している。

甕・壺類

第359図-1・4・5は、甕Ⅰ類の口縁部資料である。胴部まで残存する第359図-1には地文として植物莖回転文が施されており、頸部の屈曲部分には横位に展開する連続刺突がみられる。1単位の刺突は右→左という方向で行われている。第359図-4の連続刺突は、頸部屈曲部分より下方に施されている。

第359図-2・3・6・7は甕Ⅱ類の土器群で、口縁部には3~5条の平行沈線が施されている。比較的残りの良い第359図-2には、地文としてLR斜縄文が施される。頸部直下には口縁部同様、3条の横位平行沈線がみられる。他の3点に比べると、沈線やミガキが非常に粗雑である。

第359図8~15は壺の頸~胴部破片で、このうち前4者は同一個体資料とみられる。胴部最大径には文様を区画する有文帯があり、胴部上半に左右対称の渦文が描かれている。充填縄文の中には、僅かながら赤色顔料の付着が認められた。沈線はやや太めで、無文部のミガキは丁寧である。第359図-12は胴部の屈曲が強く、この屈曲部以下に地文が施される。第359図-13には重山形文が描かれ、無文部に充填縄文の消し残しが認められる。第359図-15は胴部最大径より上位に文様区画帯を持ち、僅かではあるが赤色顔料の付着が認められる。

第359図-16~18、第360図-1~3は甕或いは壺の底部資料で、いずれの資料も内面にはミガキ調整がされている。第359図-17・18は底部縁辺が外方に張り出している。この6点の底部資料については、底面に木葉痕を残すものが4点、網代痕を残すものが2点であった。

鉢

第360図-4~8は鉢で、第360図-6以外にはU字波形式が描かれる。波形式の頂部及び谷部には垂下する短沈線が認められるものはなく、頂部における沈線は完全には連結していない。第360図-5・8には孔が穿たれ、前者の口縁部内面には1条の沈線が施される。この第360図-5の残存は全体の2/3程であるが、1列の波形式は5単位程と推察された。第360図-4・7は同程度の法量を持つものと思われるが、前者の地文には反摺りの縄文原体が用いられている。今回出土した弥生土器資料の地文縄文の殆どがLR縄文を施す中で、珍しい資料と言える。第360図-6には連続山形文が施文されるが、他の鉢形土器と比較すると、有文部・無文部の関係が逆転している。またこれらの資料は、

内外面ともにミガキが非常に粗雑である、口縁部が肥厚する、地文原体が粗い、等といった他との相違点が認められる。

高坏

第360図-9～11は高坏の口縁部破片資料である。第360図-9・11には、断面形がV字に近い細めの沈線が波形式で描かれる。鉢同様、垂線は認められず、波形式頂部の沈線同士が完全には連結していない。また第360図-9は、口縁部内面に沈線によって区切られた有文部を持つ。第360図-10には角の緩い四角文が描かれ、植物某回転文が充填される。破片中央には孔が認められ、外面から内面に穿たれている。

蓋

第360図-12は蓋の天井部破片資料である。天端部を指で斜め上方につまみ出して作り出されており、その指頭痕跡が放射状に残っている。

b. 石器・石製品(第360～385図)

石器・石製品については、①打製石器、②磨製石器、③礫石器、④石製品と大別し、更にこれを各器種で細別した。各器種の記述の冒頭においては、今次調査区出土石器についての分類基準を記し、この分類は「(5)水田跡出土遺物」「(6)その他の弥生時代遺物」の項においても同様に適用される。また、遺物観察表における観察内容表記の仕方については、「相ノ原・大貝中・川添東遺跡」(仙台市教委 1997)を参考・準用した。

微高地の基本層Ⅳ層とⅤ層から出土した石器のうち、22点が接合して7個体となった。更にこのうちの剥片剥離作業に関わる5個体については、新たに個別別資料1～5として掲載した。個別別資料1～3については、実測図・遺物観察表の他に、模式図及び剥片剥離工程表を記載している。49点33個体の資料を図示した。

①打製石器

石鏃

有茎式石鏃のⅠ類、アメリカ式石鏃のⅡ類に大別した。これらは身の長さから、A種：1.8cm以上、B種：1.5cm未満に、また幅厚比(厚さ÷幅)から、1種：幅厚比0.40以上、2種：幅厚比0.40未満に分けられる。Ⅳ層とⅤ層からは、Ⅰ類1点、Ⅱ類2点の計3点が出土した(第360図-1～3)。

第360図-13はⅠ類A2種である。両面を平坦剥離で整形されており、a面中央には素材剥片の剥離面を残す。a-b面中央の稜は直線的で、断面形は中間部・基部共に薄い菱形を呈する。石材は凝灰質頁岩である。第360図-14はⅡ類A2種である。先端部を折損後、再加工を施している。平坦剥離で整形され、基部は調整剥離が行われる。側縁の調整加工は両面から交互に剥離している。断面形は薄い菱形を呈する。石材は黒曜石である。第360図-15はⅡ類B2種である。細かな平坦剥離で調整している。先端部の折損は、衝撃剥離によって生じた可能性がある。挟りはa面側が左右いずれも最後に剥離されている。断面形は薄い菱形を呈する。石材は珪質頁岩である。

板状石器(大型直縁刃石器Ⅰ類)

「中在家南遺跡他」(仙台市教委1996)で大型直刃縁石器Ⅰ類とされているもののうち、板状節理を有する安山岩を素材とした板状石器については、更に詳細な分類が行われている。本項においても同様の分類を試みたが、全体形が不明な資料が多いため、ここでは、Ⅰ類：刃部の残っているもの、Ⅱ類：刃部の残っていないもの、と分類するととどめた。Ⅳ層とⅤ層からは、Ⅰ類2点、Ⅱ類4点の計6点が出土し、これらに古代遺構出土の2点を加えて接合した結果、Ⅰ類3点、Ⅱ類1点となった(第361～363図)。属性の観察は、刃部長・刃角・各側縁の状態・微細剥離の有無について行っている。

第361図-1、第362図-1・2はⅠ類である。第362図-2は刃部を2箇所有しており、新旧関係は表面左側縁の刃部が古

く、下縁の刃部が新しい。第363図-1はⅡ類である。

折断調整石器

1点が出土した。第364図-1は(阿子島1979)「折断調整石器」[聖山]のa-I類に相当する。三角形を呈する片側折断で、全周に加工が施される。石材は流紋岩である。

二次加工のある剥片

二次加工が施される箇所の違いから、Ⅰ類：背面に加工があるもの、Ⅱ類：腹面に加工があるもの、Ⅲ類：背面と腹面に加工があるもの、と分類した。Ⅳ層とⅤ層からは、Ⅰ類3点、Ⅲ類2点の計5点が出土した(第364図-2～5、第372図-1)。Ⅰ類のうち1点は他の資料と接合したため、個別別資料1の剥片として掲載した。石材はいずれも流紋岩である。

微細剥離のある剥片

1点が出土しており、他の資料と接合したため、個別別資料1の剥片として掲載した(第370図-1)。

剥片

14点出土しており(第365図-1～3、第370図-2・3、第371図-1・2、第372図-2、第374図-1、第375図-2、第376図-1・2、第377図-1・2)、石材はいずれも流紋岩である。

石核

素材の違いから、Ⅰ類：礫素材のもの、Ⅱ類：剥片素材のもの、Ⅲ類：剥片剥離作業が進行し素材が特定できないもの、と分類した。Ⅳ層とⅤ層からは、Ⅰ類6点、Ⅱ類2点の計8点が出土した(第365図-4、第366図-1・2、第367図-1・2、第373図-1、第374図-1、第375図-1)。剥片剥離作業時の打面転移の有無・素材・自然面の有無について観察・計測を行っている。

個別別資料1

石核1点、二次加工のある剥片1点、微細剥離のある剥片2点、剥片5点の計9点(第369～373図)。石材は流紋岩である。出土地点座標を記録した6点については、4A-B区内の東西2.6m、南北3.4mの範囲内から出しており、各剥片の出土地点分布図を作成した(第368図)。また、出土地点座標の記録はないものの、残骸である第373図-1(Ka-056)も、4A-B区内の一括取り上げ遺物に含まれていた。剥片剥離工程において最も早い段階で剥離された第369図-1(Ka-012)は、古代～中世の遺構である小溝状遺構群の埋土中出土であり、原位置を留めていないと考えられる。確認される打面及び剥離は、以下の順序で行われている。

[打面①] 打面はe面(剥離面)、作業面はa面で、剥片1～4を剥離している。

[打面②] 90°の打面転移が行われる。打面はb面(不明)、作業面はd面で、剥片5を剥離している。

[打面③] 90°の打面転移が行われる。打面はd面(剥離面)、作業面はa面で、剥片6～8を剥離している。第369図-1(Ka-012)は剥片8で、一側縁に微細剥離が観察できる。

[打面④] 90°の打面転移が行われる。打面はa面(剥離面)、作業面はd面で、剥片9～12を剥離している。第370図-1(Ka-036)及び2(Ka-015)は剥片9で、剥片剥離時に同時割れを起こしている。第370図-1には一側縁に微細剥離が観察できる。第370図-3(Ka-009)は剥片12である。

[打面⑤] 180°の打面転移が行われる。打面はc面(自然面)、作業面はd面で、剥片13～16を剥離している。第371図-1(Ka-006)は剥片14、第371図-2(Ka-005)は剥片15である。

[打面⑥] 180°の打面転移が行われる。打面はa面(剥離面)、作業面はd面で、剥片17～18を剥離している。

第372図-1は剥片17、第372図-2(Ka-020)は剥片18である。

個体別資料2

石核1点と剥片1点が接合した(第374図)。石材は流紋岩で、いずれも4A-B区から出土した。確認される打面及び剥離は以下の順序で行われる。

[打面①] 打面はb・c面、作業面はe面で、剥片1を剥離している。

[打面②] 90°の打面転移が行われる。打面はe面(剥離面)、作業面はb面で、剥片2を剥離している。

[打面③] 90°の打面転移が行われる。打面はe面(剥離面)、作業面はa面で、剥片3~5を剥離している。剥片4・5はどちらが先行する剥離かは不明である。

[打面④] 90°の打面転移が行われる。打面はd面(剥離面)、作業面はa面で、剥片6を剥離している。

[打面⑤] 90°の打面転移が行われる。打面はa面(剥離面)、作業面はc・d面で剥片7を剥離している。

[打面⑥] 90°の打面転移が行われる。打面はe面(剥離面)、作業面はb面で、剥片8を剥離している。第374図-1(Ka-013)は剥片8である。

[打面⑦] 90°の打面転移が行われる。打面はc面、作業面はe面で、剥片9を剥離している。

個体別資料3

石核1点と二次加工のある剥片1点が接合した(第375図)。石材は流紋岩である。確認された打面及び剥離は以下の順序で行われる。

[打面①] 打面はd面上端部(自然面)、作業面はc面で剥片1・2を剥離している。

[打面②] 90°の打面転移が行われる。打面はa・d面(剥離面+自然面)、作業面はb面で、剥片3~8を剥離している。

第375図-1(Ka-088)は剥片3で、作業面d面から剥離されたものであり、背面に二次加工を施している。

[打面③] 90°の打面転移が行われる。打面はb面(剥離面+自然面)、作業面はa・c・d面で、剥片9~16を剥離している。

個体別資料4

剥片2点が接合した(第376図)。石材は流紋岩である。単設打面の石核から剥離されており、少なくとも5回の剥片剥離が行われている。第376図-1(Ka-089)は4番目、第376図-2(Ka-087)は5番目に剥離されたものである。

個体別資料5

剥片2点が接合した(第377図)。石材は流紋岩である。第377図-1・2(Ka-052・053)は、求心状に剥離された石核の一端から剥離された剥片で、背面右上には自然面を残す。

②磨製石器

扁平片刃石斧

V層から1点が出土した(第380図-1)。平面形は器体中位に変曲点をもち、下部は平行気味となる。断面形は前主面が弧状を、後主面も僅かに弧状を呈する。両面はほぼ全域にわたり研磨されている。また、両面の剥離痕は整形加工時のもので、その後の敲打整形も観察される。後主面側の刃部には、刃縁に直交するように線状痕が認められた。石材は硬質の砂岩である。

独鈷石

4A-B区V層から1点が出土した(第378図-1)。頭部は両端を欠損しているが、残存箇所から弧状に反るものと思われる。中央部は片側が括れており、もう一方は舌状に突き出している。また、中央にある一対の隆起した節は断面台形を呈する。敲打で整形し、研磨で仕上げられており、中央部の隆起した節の内側に強い敲打痕が残る。また中央部に煤が良く付着しており、その範囲を別図にて表現した(第379図)。石材は安山岩である。

③礫石器

磨・凹・敲打

使用痕跡には磨痕・凹痕・敲打痕の3種があり、単独やこれらを組み合わせたものもある。凹痕の中には痕跡が僅かで、敲打痕との区別が困難なものも含まれていた。従って便宜上の判別基準として、凹面を形成しているものを凹痕、素材の形状を残し凸面であるものを敲打痕とした。これら磨痕・凹痕・敲打痕の組み合わせから、Ⅰ類：磨痕のみのもの、Ⅱ類：凹痕のみのもの、Ⅲ類：敲打痕のみのもの、Ⅳ類：磨痕と凹痕がみられるもの、Ⅴ類：磨痕と敲打痕がみられるもの、Ⅵ類：凹痕と敲打痕がみられるもの、Ⅶ類：全てがみられるもの、と分類した。また、使用痕跡はその範囲・部位・数・程度について以下のように観察し、計測を行っている。

磨面数：面数と磨面の形状を示し、形状には凹面、凸面、平坦面がある。

凹面数：凹痕のみられる面の数。

凹形態：各面に一つのまとまりをもった凹痕が単独で存在するものを「単」、複数存在するものを「複」とし、2面にみられる場合は「+」で連結している。

凹深さ：凹痕の深さを「深」「浅」「微」で表し、二面にみられる場合は「+」で連結している。

敲打箇所：礫形状の長軸側の側面を「先」、短軸側の側面を「側」で表し、数字は箇所数を示している。

敲打程度：全体を通して見た敲打による破損の程度を「激」「強」「弱」で表している。

V層からⅡ類1点、Ⅲ類1点の計2点が出土した(第380図-2、第381図-1)。

第381図-1 (Ke-001)はⅡ類で、表裏及び側面の3面に凹面を持っている。石材は凝灰岩である。第380図-2はⅢ類で、凹礫の先端・側縁に敲打痕が認められる。石材は石英安山岩である。

石皿

素材の形状から、Ⅰ類：凹礫素材のもの、Ⅱ類：板状素材のもの、と分類した。属性の観察は、素材の形状「凹礫」・「板状」、周縁の有無について観察・計測を行っている。V層からは、Ⅱ類1点が出土しており(第383図-1)、石材は石英安山岩製である。

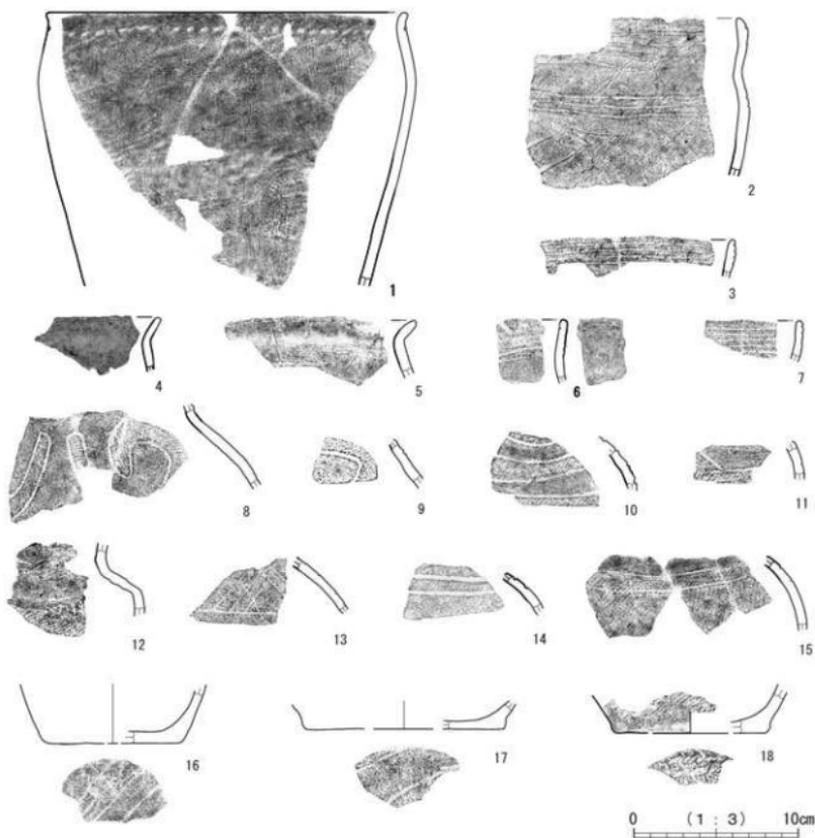
④石製品

有孔石製品

1点が出土した(第383図-2)。棒状礫の端部に穿孔を施すが、孔は貫通していない。石材は凝灰岩である。

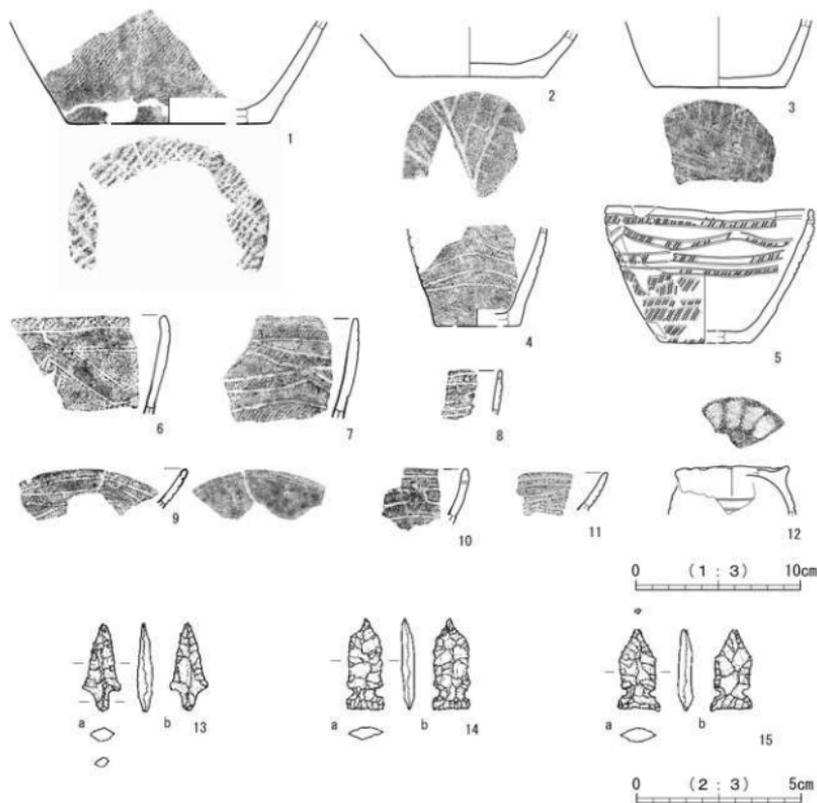
弥生時代の石器は、第384・385図のように、4A・B区からの出土が多く、集中した傾向を示している。

掲載資料のうち、4A・B区出土石器の数量は、板状石器4点、折断調整石器1点、二次加工のある剥片2点、剥片3点、石核3点、個別別資料5点(二次加工のある剥片1点、微細剝離のある剥片1点、剥片7点、石核2点)、独鈷石1点、扁平片刃石斧1点、礫石器3点、砥石2点である。



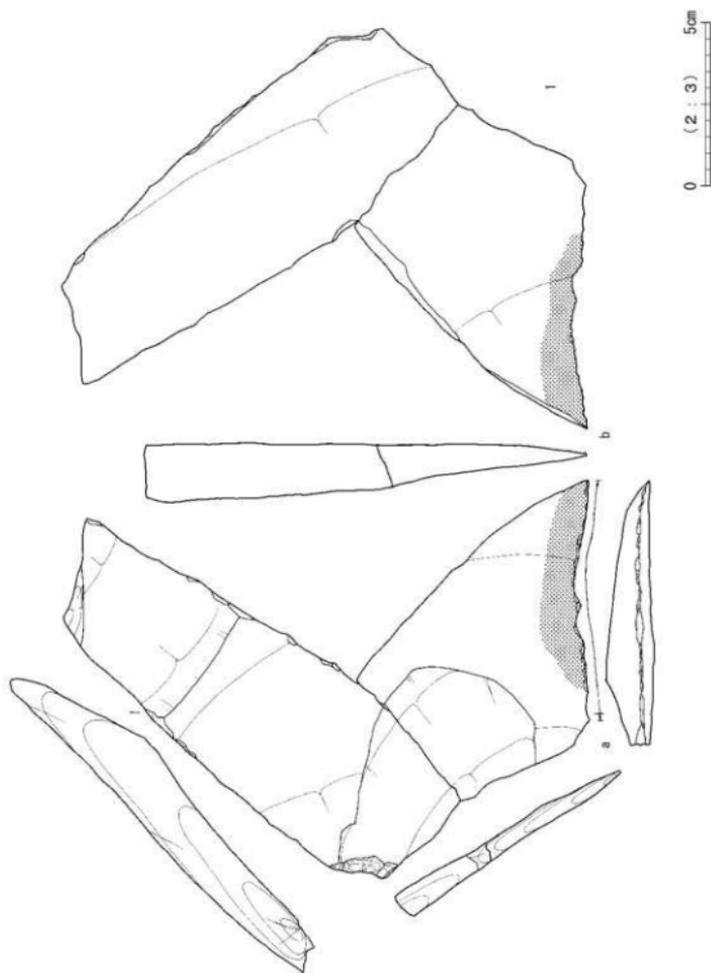
第359図 IV-V層出土遺物(1)

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種類	器種	外面調整・文様	内面調整・文様	備考	写真 図版
1	B-049	50グリッド	V層	弥生土器	甕	植物葉回転文・刺突(右→左)	ナデ		154
2	B-043	8C区	V層	弥生土器	甕	1.R織文(斜行)、沈瀬→肩部以上ミガキ	ミガキ	沈瀬は非常に粗雑	154
3	B-041	69グリッド	V層	弥生土器	甕	沈瀬、ミガキ	ミガキ		154
4	B-033	4A-B1C	IV-V層	弥生土器	甕	刺突	ミガキ		154
5	B-029	4A-A1C	IV-V層	弥生土器	甕	ミガキ	ミガキ		154
6	B-031	4A-B1C	IV-V層	弥生土器	甕	沈瀬、ミガキ	沈瀬・ミガキ		154
7	B-045	25グリッド	V層	弥生土器	甕	沈瀬	ナデ		154
8	B-056	67グリッド	V層	弥生土器	甕	沈瀬→1.R織文(左側)→両沈瀬→ミガキ、肩中に赤色顔料付着	ナデ	B-005-030-051と同一体	154
9	B-065	SK215	雑土	弥生土器	甕	沈瀬→1.R織文(左側)→両沈瀬→ミガキ、肩中に赤色顔料付着	ナデ		154
10	B-051	67グリッド	V層	弥生土器	甕	沈瀬→1.R織文(左側)→両沈瀬→ミガキ、肩中に赤色顔料付着	ナデ(溝縁狭い)		154
11	B-050	50グリッド	V層	弥生土器	甕	沈瀬→1.R織文(左側)→両沈瀬→ミガキ、肩中に赤色顔料付着	ナデ		154
12	B-042	23グリッド	V層	弥生土器	甕	1.R織文(斜行)、肩部以上ミガキ	ミガキ(溝縁あり)		154
13	B-023	37グリッド	IV層下	弥生土器	甕	1.R織文(斜行)→沈瀬	ナデ		154
14	B-028	4A-A1C	IV-V層	弥生土器	甕	1.R織文(斜行)→沈瀬	ナデ	外面灰化付着	154
15	B-111	4A-B1C	IV-V層	弥生土器	甕	1.R織文(斜行)、肩中に赤色顔料付着	ミガキ		154
16	B-046	51グリッド	V層	弥生土器	甕 or 甕	1.R織文(斜行)	ミガキ	木炭痕	154
17	B-036	4A-B1C	IV-V層	弥生土器	甕 or 甕	ミガキ	ミガキ	木炭痕	154
18	B-030	4A-A1C	IV-V層	弥生土器	甕 or 甕	1.R織文(斜行)	ミガキ	刺突痕	154



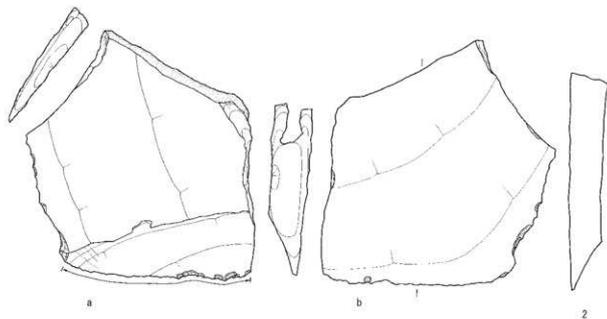
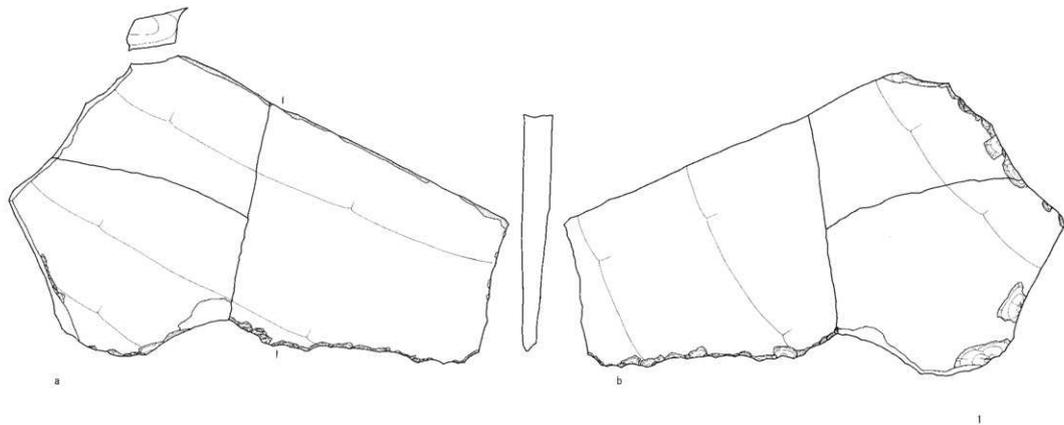
第360図 IV・V層出土遺物(2)

採取番号	登録番号	出土地点	層位	種別	図種	外面調整・文様	内面調整・文様	備考	写真掲載		
1	B-027	4A・A区	B・V層	弥生土器	甕or壺	L.R縄文(斜行), 底部直上ミガキ	ミガキ	胴体直	154		
2	B-054	21グロッド	V層	弥生土器	甕or壺	L.R縄文(斜行)	ミガキ	木蓋付	154		
3	B-053	22グロッド	V層	弥生土器	甕or壺	植物葉回転文→底部直上ミガキ	ミガキ	木蓋付(蓋5番目)	154		
4	B-044	25グロッド	V層	弥生土器	鉢	L.R縄文(斜行)→沈線・磨消	ミガキ		150		
5	B-052	67グロッド	V層	弥生土器	鉢	ヘリナド→沈線→L.R縄文(0.8倍)長→沈線→磨消(穿孔内)	沈線, ミガキ	底部ヘラで直	150		
6	B-048	51グロッド	V層	弥生土器	鉢	L.R縄文(斜行)→沈線→磨消(粗雑なミガキ)	粗雑なミガキ	B-101・102と同一体	150		
7	B-032	4A・B区	B・V層	弥生土器	鉢	沈線→L.R縄文光州	ミガキ		150		
8	B-030	33グロッド	V層	弥生土器	鉢?	L.R縄文→穿孔・沈線・ミガキ	ナデ		150		
9	B-038	33グロッド	V層	弥生土器	高坏	沈線→L.R縄文光州, ミガキ	沈線・L.R縄文, ミガキ	内面面灰化物付着	155		
10	B-035	51グロッド	V層	弥生土器	高坏	植物葉回転文→沈線・ミガキ・穿孔(内)	ミガキ		155		
11	B-036	33グロッド	B層下	弥生土器	高坏	沈線→L.R縄文光州→西沈線・ミガキ	ミガキ		155		
12	B-047	51グロッド	V層	弥生土器	蓋	魚鱗ヨコナデ→沈線, 内面面灰化物によるツツミ出し	ナデ		155		
採取番号	登録番号	出土地点	層位	種別	図種	分類	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	石材	備考	写真掲載
13	Ka-023	4A・E区	V層	石器	石鏃	I A2	27×11×0.4	1.0	凝灰質頁岩	有溝, 先端内凹, 軸厚比0.36, 裏材面残す	155
14	Ka-058	4 A区	B層上	石器	石鏃	B 11	2.8×1.1×0.4	1.1	黒曜石	アメリカ式石鏃, 先端内凹, 軸厚比0.36	155
15	Ka-024	4A・E区	V層	石器	石鏃	B 12	2.8×1.3×0.4	1.1	凝灰質頁岩	アメリカ式石鏃, 軸厚比0.37, 先端内凹, 裏材面残す	155



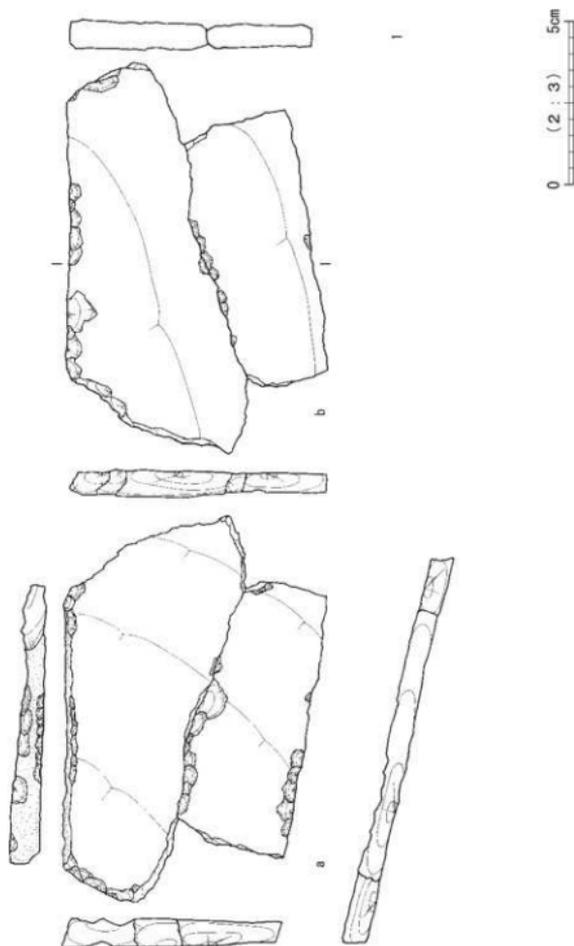
第361図 IV・V層出土遺物(3)

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真図版
I	Ka-027	4A-B区	V層	石器	板状石器	II	52×143×15	1876	安山岩	γ面緑苔孔、α面左側緑苔孔+加工、α面右側緑苔孔、上側緑苔孔	
	Ka-028	4A-B区	V層	石器	板状石器	I	7.5×6.4×1.5	737	安山岩	刃部長7.2cm、刃角65-70°、α面左側緑苔孔、α面右側緑苔孔、上側緑苔孔、微細刻痕あり、光沢あり	155



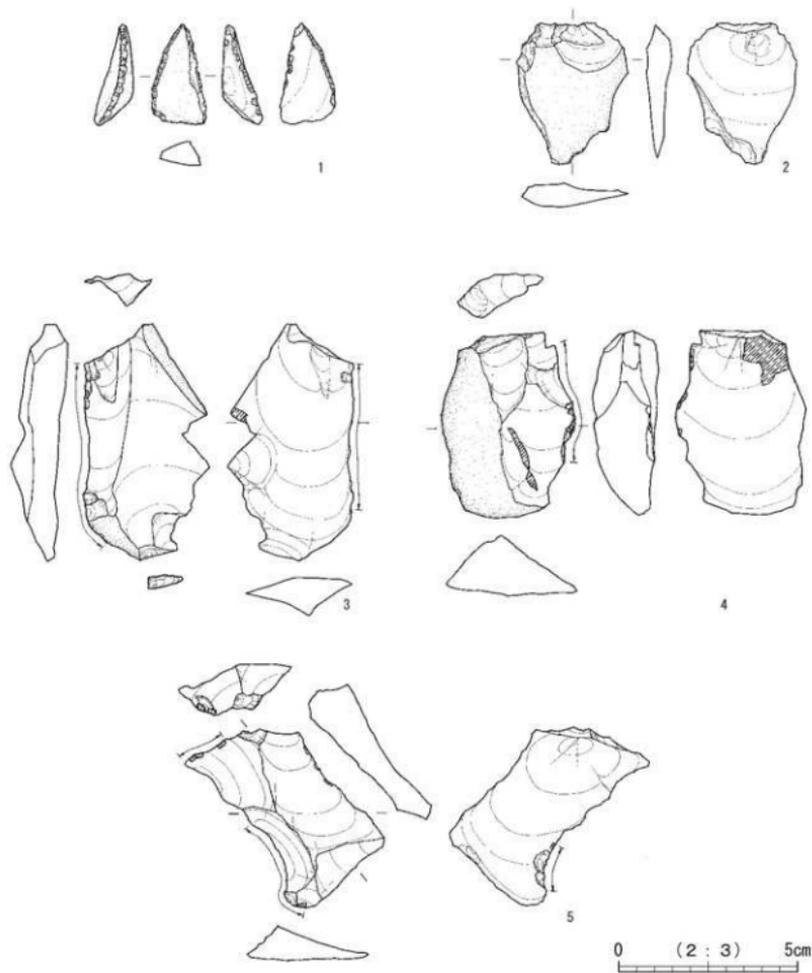
編號 器號	登錄號	出土遺跡	層位	類別	器種	分期	長×寬×厚 ³ (cm)	重量 (g)	石材	備考	資料 附號
1	Ka-032	4A-B區	V層	石器	板狀石器	II	5.1×7.6×1.3	880	崑山岩	下側緣折片。a面左側緣折片。a面右側緣折片。	
1	Ka-041	5S305	埋土	石器	板狀石器	I	9.5×10.6×1.1	1408	崑山岩	刃部長約9cm。刃角約60°。下側緣加工。a面左側緣折片。a面右側緣折片。	156
	Ka-051	5S305	埋土	石器	板狀石器	I	7.8×9.9×1.1	106	崑山岩	刃部長約5cm。刃角約60°。下側緣加工。a面左側緣折片。a面右側緣折片。上側緣折片。	
2	Ka-001	4A-B區	V層	石器	板狀石器	I	9.9×8.8×1.5	1427	崑山岩	刃部長約5.5cm。刃角約48°-49°-45°。a面左側緣折片。a面右側緣折片。微磨刻磨痕。光澤良好。	156

第362圖 IV·V層出土遺物(4)



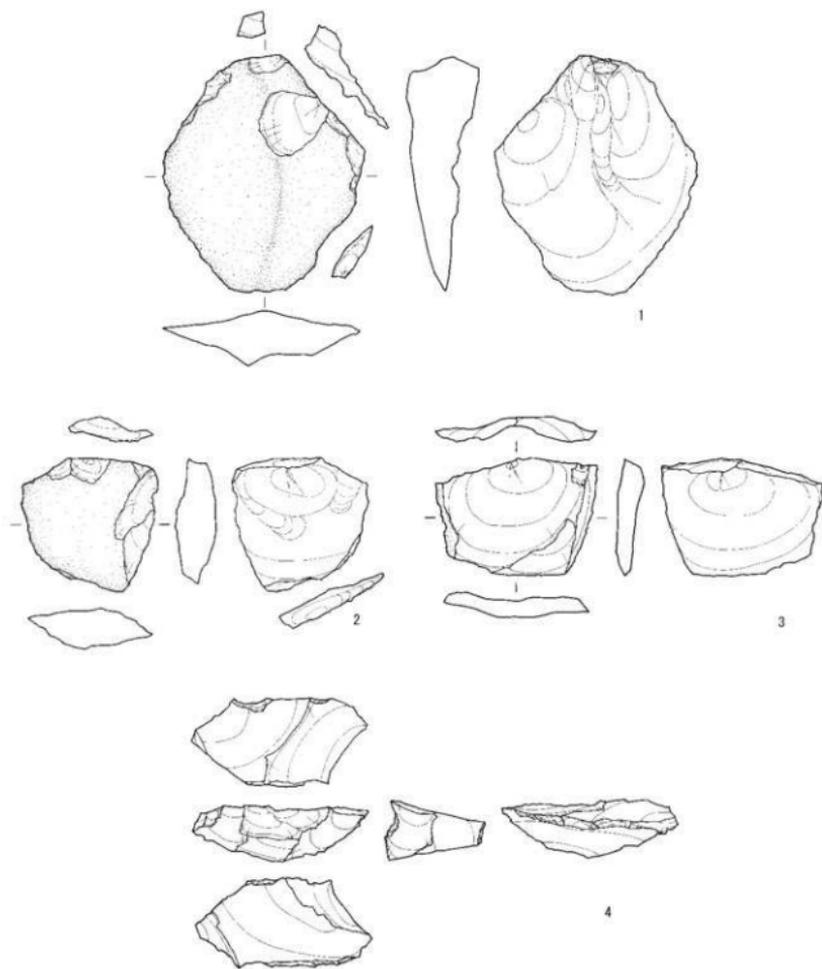
第363圖 IV・V層出土遺物5)

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種類	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真図版
1	Ka-014	4A・B区	V層	石器	板状石器	II	3.5×8.1×0.7	407	安山岩	下側縁磨石+加工, a面左側縁磨石, a面右側縁磨石, 上側縁磨石+加工	136
	Ka-021	4A・B区	V層	石器	板状石器	II	5.4×11.1×0.9	427	安山岩	下側縁磨石+加工, a面左側縁磨石+加工, a面右側縁磨石+加工, 上側縁加工	



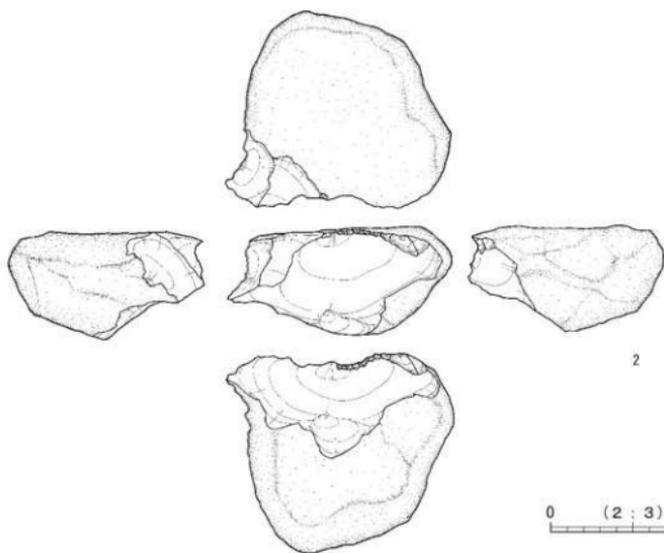
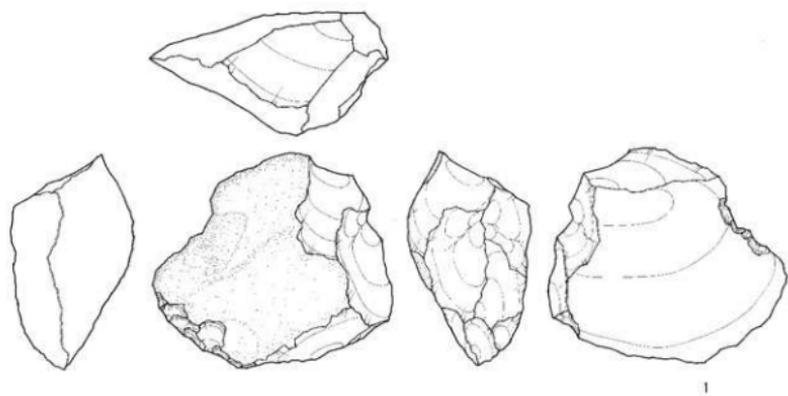
第364図 IV・V層出土遺物(6)

採取番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真図版	
	1	Ka-111	4A-B区	V層	石器	片断調整石器	-	3.0×1.7×0.9	3.7	流紋岩	全面加工。調整角88~104°。自然面残す	157
	2	Ka-007	4A-B区	V層	石器	二次加工のある器	I	4.3×3.3×0.9	11.3	凝灰質頁岩	調整角142°。平頭打面。背面に二次加工。端部折れ。自然面残す	157
	3	Ka-001	4C区	IV層	石器	二次加工のある器	I	7.2×3.7×1.2	23.7	流紋岩	背面加工。同一個縁に微細刻痕あり。末端部折れ。自然面残す	157
	4	Ka-009	4A区	V-V層	石器	二次加工のある器	Ⅲ	5.6×4.1×1.9	38.0	流紋岩	背面+腹面加工。同一個縁に微細刻痕あり。自然面残す	157
	5	Ka-019	4A-B区	V層	石器	二次加工のある器	Ⅲ	5.7×3.5×1.5	22.6	流紋岩	背面+腹面加工。同一個縁に2つ並べられた微細刻痕あり	157



第365圖 IV・V層出土遺物(7)

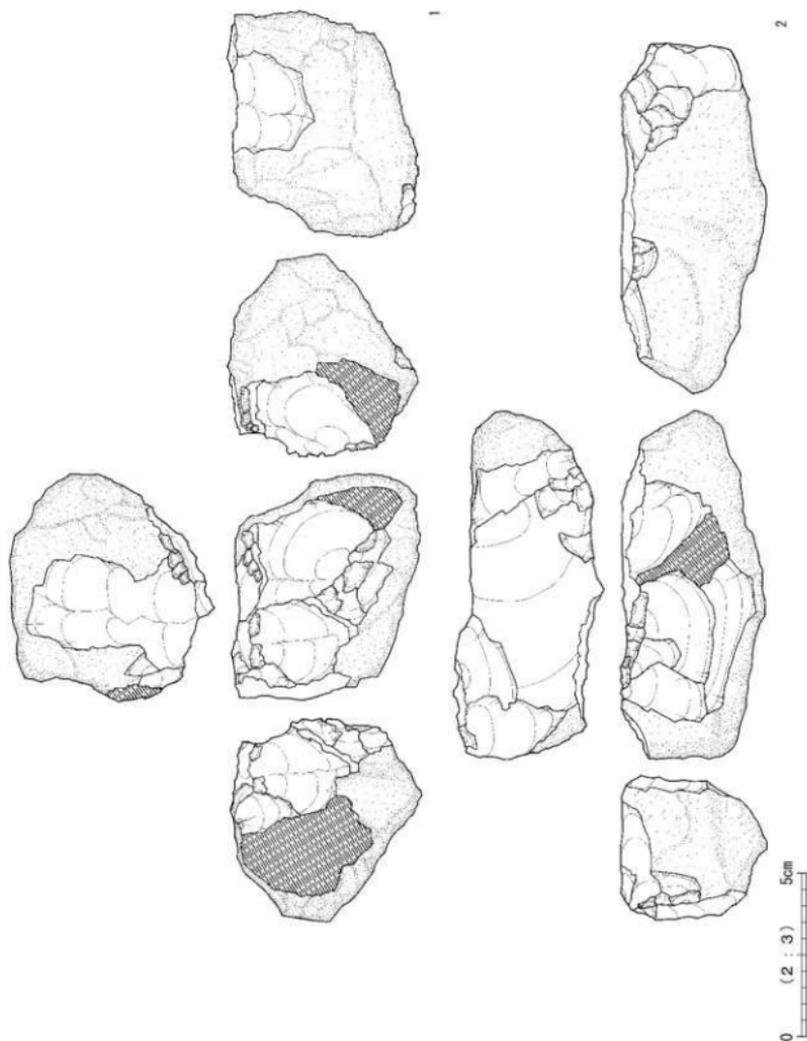
採取番号	登録番号	出土地点	層位	種類	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真掲載
1	Ka-008	4A-B区	V層	石器	刮片	-	7.2×6.0×2.3	62.7	流紋岩	斜磨角121°，平凹打面，自然面残寸	137
2	Ka-008	4A-B区	V層	石器	刮片	-	4.2×4.0×1.3	16.8	流紋岩	斜磨角108°，平凹打面，左端部折欠，自然面残寸	137
3	Ka-029	4A-B区	V層	石器	刮片	-	3.6×4.9×0.8	14.6	流紋岩	斜磨角121°，平凹打面，自然面残寸	137
4	Ka-030	4A-B区	V層	石器	石核	II	2.6×5.4×1.9	19.5	流紋岩	打面斜磨角0°，刮片素材	136



0 (2 : 3) 5cm

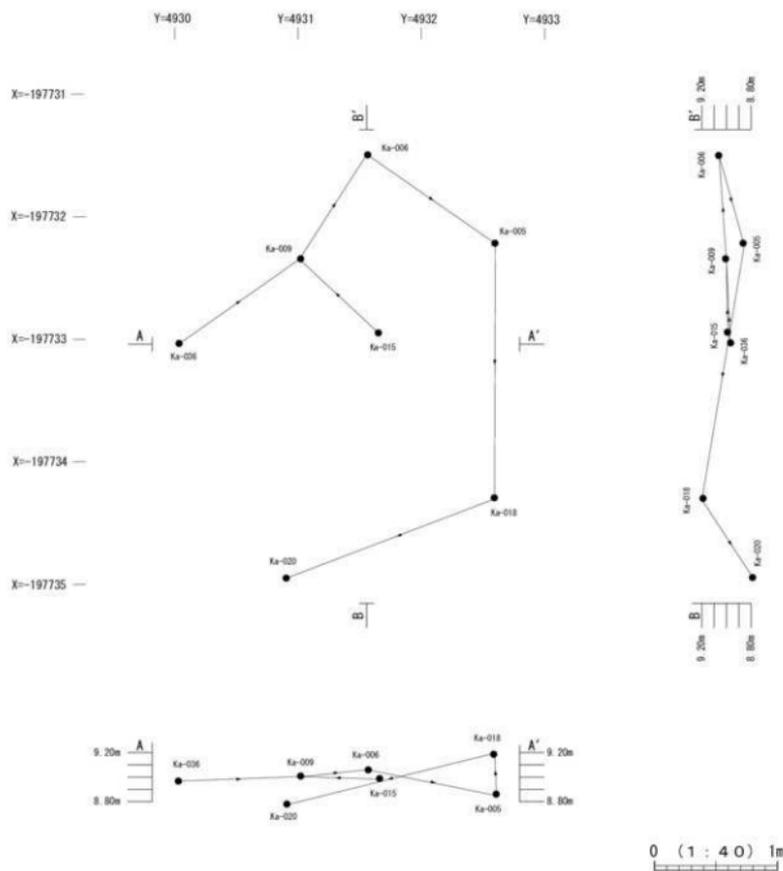
第366圖 IV・V層出土遺物(8)

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種類	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真 図版
1	Ka-039	4A区	Ⅲ層	石器	石核	I	6.6×7.4×3.5	1432	流紋岩	打面転移あり。割片素材，自然面残存	158
2	Ka-054	4A区	Ⅲ・Ⅳ層	石器	石核	II	5.8×6.9×3.2	1327	流紋岩	打面転移あり。燧石材，自然面残存	158

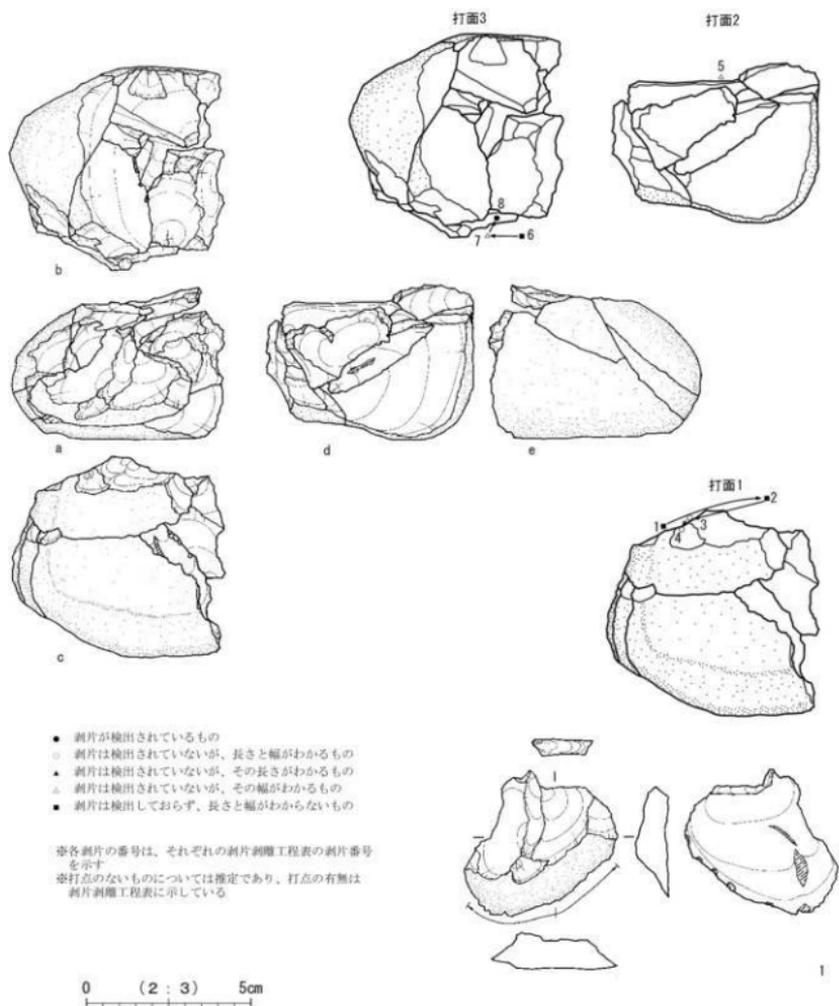


第367図 IV・V層出土遺物(9)

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種類	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真 図版
1	Ka-025	4A-B区	V層	石器	石核	1	5.4×6.4×6.0	266.4	流紋岩	打面転移あり、礫素材、自然面残存	130
2	Ka-003	4A-B区	V層	石器	石核	1	4.4×10.6×4.3	275.2	凝灰質頁岩	打面転移あり、礫素材、自然面残存	131



第368図 個体別資料1出土地点分布図

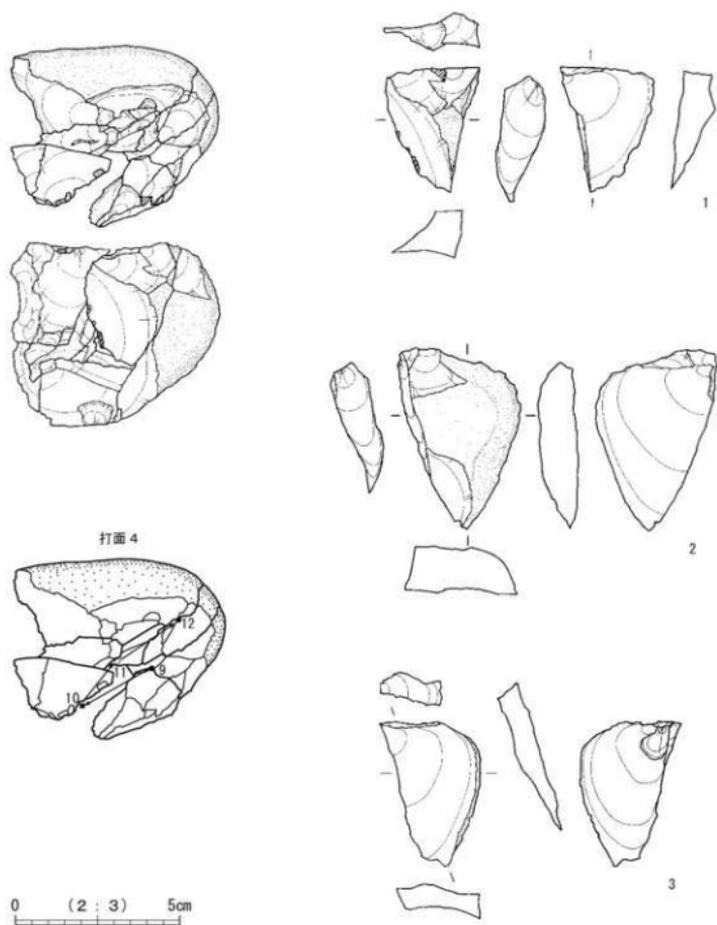


- 剥片が検出されているもの
- 剥片は検出されていないが、長さや幅がわかるもの
- ▲ 剥片は検出されていないが、その長さがわかるもの
- △ 剥片は検出されていないが、その幅がわかるもの
- 剥片は検出しておらず、長さや幅がわからないもの

※各剥片の番号は、それぞれの剥片剥離工程表の剥片番号を示す
 ※打点のないものについては推定であり、打点の有無は剥片剥離工程表に示している

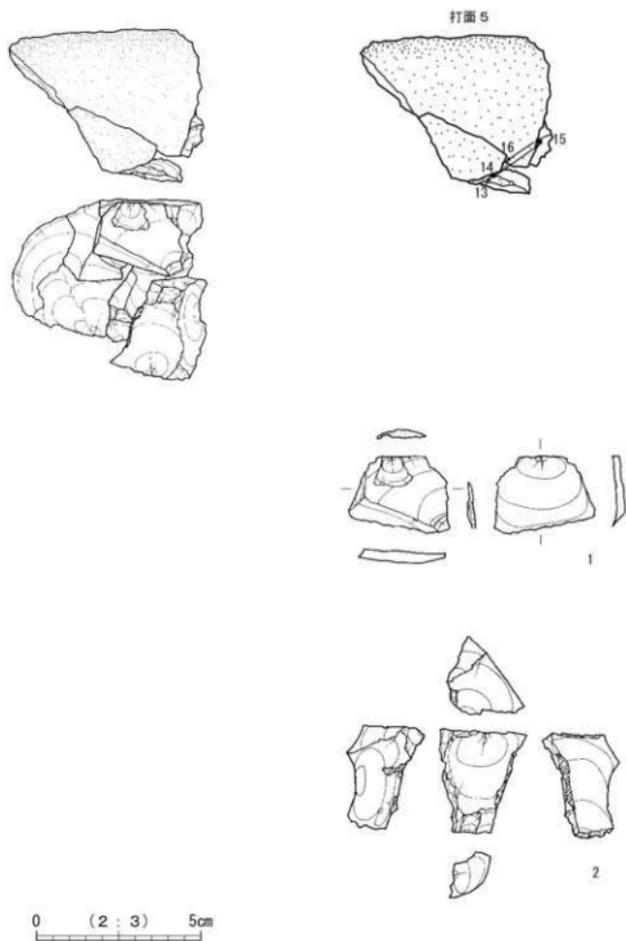
第369図 IV・V層出土遺物(10)

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種類	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真図版
1	Ka-012	SMB5	Ⅳ上	石器	剥離片の 剥離片	-	4.2×4.1×0.9	17.9	流紋岩	剥離片資料1、打面部分欠損、微細凹痕あり、自然面残す	139



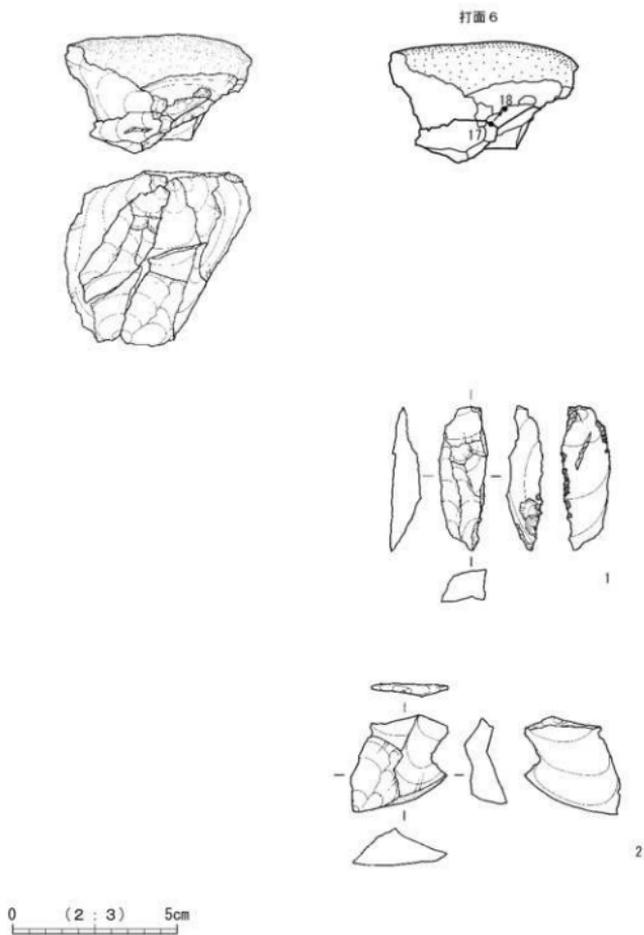
第370図 IV・V層出土遺物(1)

図録番号	登録番号	出土地点	層位	種類	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真 掲載
1	Ka-036	4A-B区	V層	石器	遺跡跡の ある割片	-	3.8×2.9×1.4	11.2	流紋岩	割体別資料1，割磨角134°，平坦打面。Ka-015と同時期石。磨 細程度あり	160
2	Ka-015	4A-B区	V層	石器	割片	-	5.1×3.4×1.1	26.3	流紋岩	割体別資料1，割磨角134°，平坦打面。Ka-036と同時期石。	160
3	Ka-000	4A-B区	V層	石器	割片	-	4.2×2.8×0.7	11.2	流紋岩	割体別資料1，平坦打面。割磨角122°，自然面残存	160



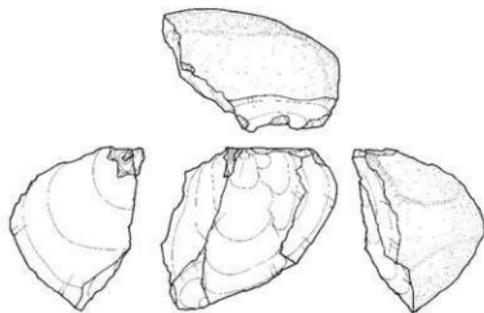
第371图 IV·V層出土遺物¹²⁾

採取番号	登録番号	出土地点	層位	種類	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真 掲載
1	Ka-006	4A・B区	V層	石器	刮片	-	2.3×3.0×0.3	2.9	流紋岩	割体別資料1。礫打面、割離角10°、自然面残す	100
2	Ka-005	4A・B区	V層	石器	刮片	-	3.1×2.5×2.0	12.3	流紋岩	割体別資料1。打面部欠面	100



第372図 IV・V層出土遺物(13)

採取番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真 掲載
1	Ka-018	4A-B区	V層	石器	一次加工の 基本型片	1	4.4×1.4×0.9	5.8	流紋岩	製体別資料1。鈍磨角116°、平打面、背面加工。第一側縁に 微細刻線あり	160
2	Ka-020	4A-B区	V層	石器	製片	-	2.6×2.8×1.4	6.3	流紋岩	製体別資料1。打面部欠損。自然面残存	160



1

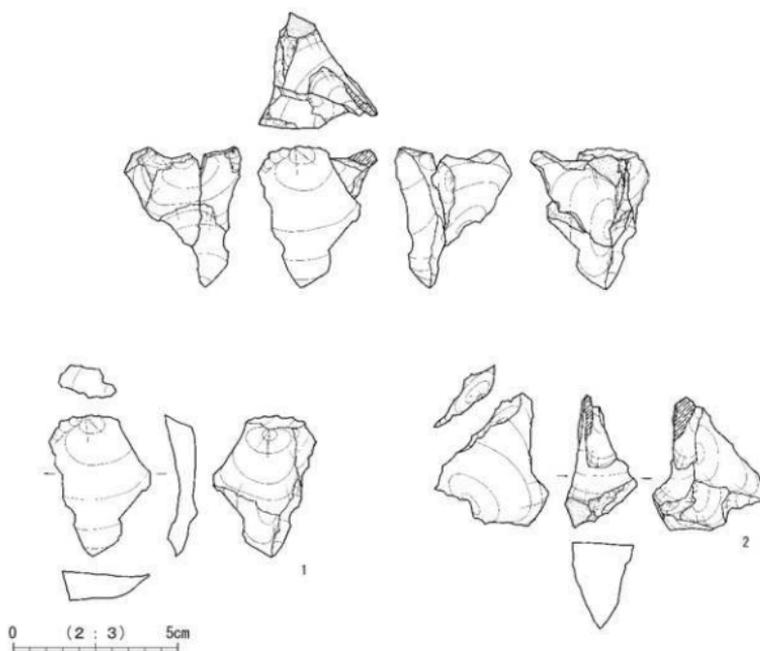
0 (2 : 3) 5cm

第373図 IV・V層出土遺物(14)

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種類	分類	器種	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真図版
1	Ka-056	4A・B区	V層	石器	1	石核	4.6×4.8×3.6	719	成軟岩	獣体別資料1, 打面転移あり, 雑素材, 自然面残す	160

個体別資料：削片剥離工程表

打面	作業面 (cm)	剥離番号	登録番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	剥離角	打面の位置	自然面の位置	備考
① a面:剥離面 90°	a面(自然面) 高さ3.0 幅4.0	剥片11	-	0.3	0.2	-	-	×	○	
		剥片12	-	0.2	0.2	-	-	×	○	
		剥片13	-	2.2	2.0	-	-	○	○	
		剥片14	-	1.1	1.2	-	-	○	○	
② b面:不明 90°	d面(自然面)+剥離面 高さ3.9 幅4.8	剥片15	-	0.9	0.8	-	-	×	○	
		剥片16	-	0.1	0.1	-	-	×	○	
③ c面:剥離面 90°	a面:剥離面 高さ3.8 幅4.8	剥片17	-	2.5	2.6	-	-	×	○	
		剥片8	Ka-012	4.2	4.1	0.9	-	×	○	打面欠損, 微細剥離あり
		剥片9	Ka-015-016	5.7	5.6	3.6	134°	○	○	同時剥れ, 微細剥離あり
④ a面:剥離面 180°	d面:自然面+剥離面 高さ5.3 幅6.3	剥片10	-	0.1	0.0	1.2	-	○	×	
		剥片11	-	3.7	2.4	1.1	-	○	×	
		剥片12	Ka-009	4.2	2.8	0.7	122°	○	○	
		剥片13	-	0.9	1.0	-	-	○	○	
⑤ c面:自然面 180°	d面:剥離面 高さ5.3 幅6.3	剥片14	Ka-006	2.3	3.0	0.3	108°	○	○	
		剥片15	Ka-005	3.1	2.5	2.0	-	×	×	打面欠損
		剥片16	-	3.3	2.3	0.4	-	○	○	
⑥ a面:剥離面 残	d面:剥離面 高さ5.3 幅3.6	剥片17	Ka-018	4.4	1.4	0.9	116°	○	×	微細剥離あり
		剥片18	Ka-020	2.6	2.8	1.4	-	×	○	打面欠損
残	残	剥片19	Ka-056	-	-	-	-	-	-	

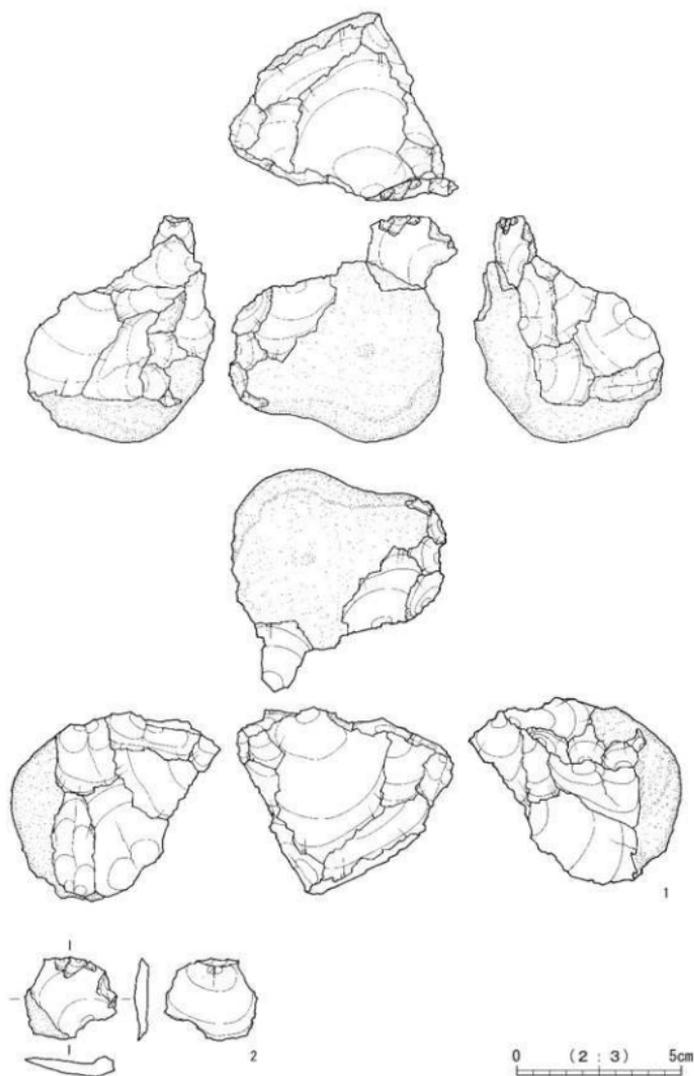


第374図 IV・V層出土遺物(15)

採収番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真掲載
1	Ka-017	4A-3区	V層	石器	刮片	-	4.4×2.7×1.1	109	流紋岩	割体別資料2, 平坦打面, 割縁角120°	160
2	Ka-013	4A-3区	V層	石器	石核	II	4.0×3.4×2.0	179	流紋岩	割体別資料2, 打面転移あり, 割片素材, 自然面残存	160

個体別資料2 刮片割離工程表

打面	作業面 (cm)	割離番号	登録番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	割縁角	打凸の有無	自然面の有無	備考
b・c面:割離面 90°	a面:自然面 高さ0.39 幅0.39	割片1	-	0.09	0.27	-	-	×	×	
	b面:割離面 高さ0.08 幅0.31	割片2	-	0.46	0.27	-	-	○	×	
a面:割離面 90°	a面:自然面+割離面 高さ0.69 幅0.33	割片3	-	0.46	0.27	-	-	×	○	
		割片4	-	0.8	1.4	-	-	○	×	割片3と前後関係不明
		割片5	-	0.7	0.3	-	-	○	×	
d面:割離面 90°	a面:割離面 高さ0.39 幅0.39	割片6	-	0.59	0.4	-	-	○	○	
a面:割離面 90°	c・d面:割離面 高さ0.49 幅0.44	割片7	-	0.6	0.39	-	-	○	×	
e面:割離面 90°	b面:割離面 高さ0.39 幅0.39	割片8	Ka-017	4.4	2.7	1.1	-	○	×	
c面:割離面	e面:割離面 高さ0.39 幅0.19	割片9	-	0.4	0.09	-	-	×	×	
残	核		Ka-013							

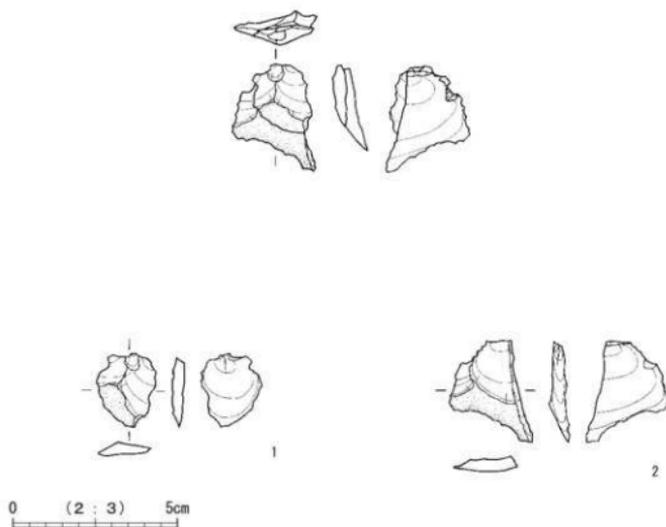


第375図 IV・V層出土遺物(16)

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種類	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真 図版
1	Ka-090	4C区	V層	石器	石核	1	6.4×6.4×5.3	169.4	流紋岩	胴体別資料3, 打面転縁未定, 微差材, 自然面残存	161
2	Ka-088	4C区	V層	石器	刮片	-	2.5×2.8×0.6	3.6	流紋岩	胴体別資料3, 剝離角1家, 平面打面, 自然面残存	162

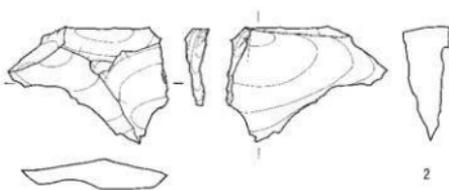
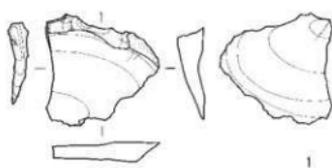
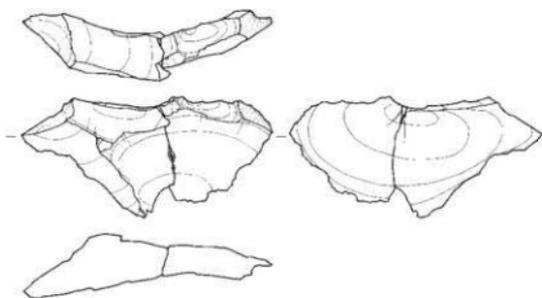
個体別資料3 削片剥離工程表

打面	作業面 (cm)	剥離番号	登録番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	剥離角	打点の有無	自然面の有無	備考		
①	d面:自然面 90°	c面:自然面 高さ43.5h 幅45.8h	削片1	-	(2.1)	(2.0)	-	-	○	○		
			削片2	-	(2.2)	1.0	-	-	○	○		
②	a・d面:剥離面 +自然面 90°	b面:剥離面+自然面 高さ45.8h 幅46.5h	削片3	Ka-088	2.5	2.8	0.6	138°	○	○	背面に二次加工あり	
			削片4	-	2.3	(1.9)	-	-	○	○		
			削片5	-	0.9	(1.9)	-	-	○	○		
			削片6	-	0.9	(1.2)	-	-	○	○		
			削片7	-	0.5	(1.1)	-	-	○	○		
			削片8	-	0.3	0.8	-	-	○	○		
			削片9	-	(3.2)	(3.4)	-	-	×	×		
			削片10	-	(1.8)	(1.9)	-	-	×	×		
③	b面:剥離面 +自然面 90°	a・c・d面:剥離面 +自然面 高さ45.8h 幅47.63-4.0h	削片11	-	(1.6)	(1.8)	-	-	○	○		
			削片12	-	1.0	2.6	-	-	○	○		
			削片13	-	1.3	(1.1)	-	-	×	×		
			削片14	-	1.9	(1.0)	-	-	×	×		
			削片15	-	1.3	2.9	-	-	○	×		
			削片16	-	4.8	3.4	-	-	○	○		
			残核		Ka-090							



第376図 IV・V層出土遺物(17)

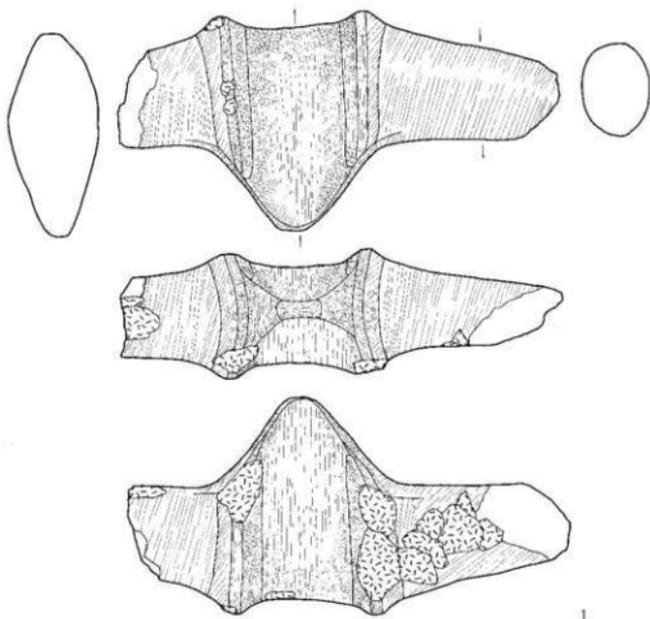
個体番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真 図版
1	Ka-089	4C区	V層	石器	削片	-	2.2×1.8×0.4	1.4	流紋岩	個体別資料4、剥離角115°、点打面、自然面残寸	160
2	Ka-087	4C区	V層	石器	削片	-	3.1×2.5×0.5	2.6	流紋岩	個体別資料4、剥離角134°、平頭打面、微縁折れ、自然面残寸	160



0 (2 : 3) 5cm

第377圖 IV·V層出土遺物(16)

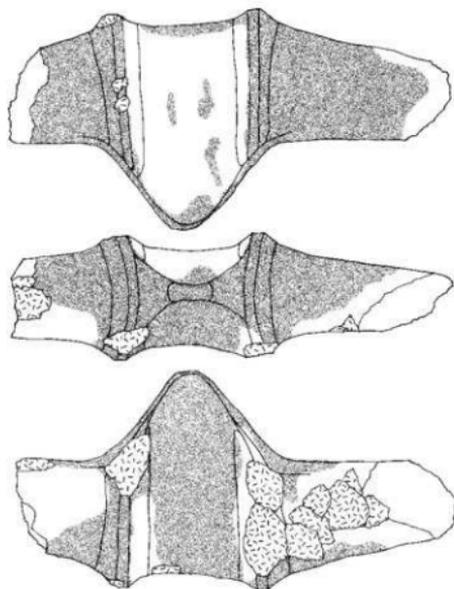
圖版 番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石 材	備 考	写真 図版
1	Ka-052	4A区	S-V層	石器	刮片	-	3.3×3.4×1.0	9.1	流紋岩	體形別資料5、剝離角115°、平面打面、同略折石、自然面残寸	161
2	Ka-053	4A区	S-V層	石器	刮片	-	3.6×4.6×1.5	17.6	流紋岩	體形別資料5、剝離角115°、平面打面、同略折石	161



第378圖 IV・V層出土遺物(19)

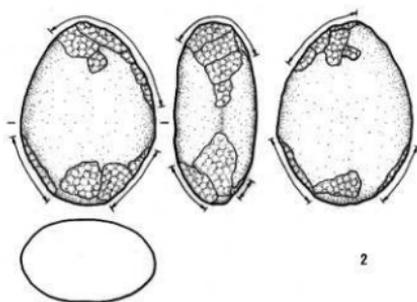
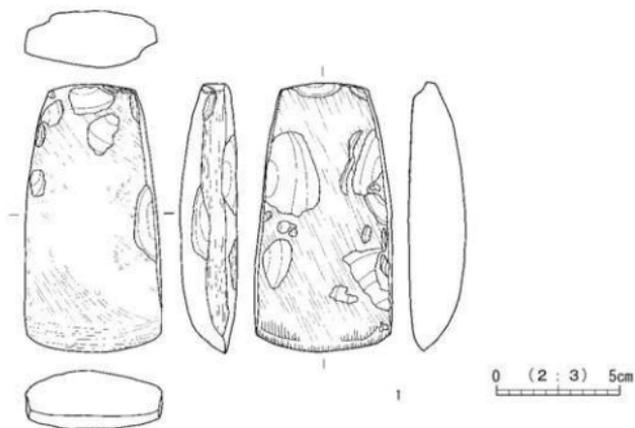
図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真掲載
1	Kd-002	4A-Ⅱ区	V層	石器	撥弦石	—	13.2×6.2×3.7	2.07	安山岩	両端全欠損、復元者	162

独結石 (Kd-002) 煤付着範圍



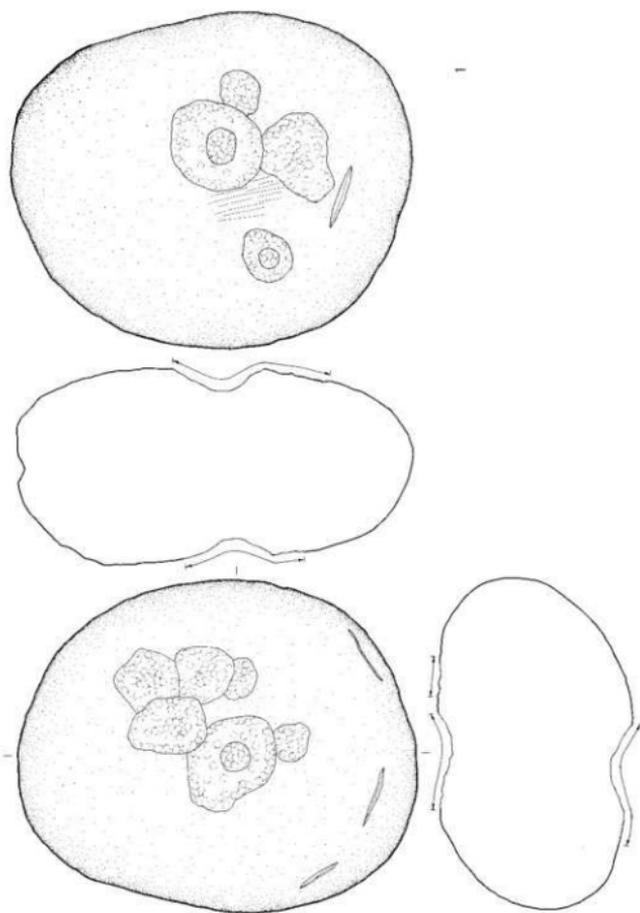
0 (2 : 3) 5cm

第379図 IV・V層出土遺物20



第380図 IV・V層出土遺物(2)

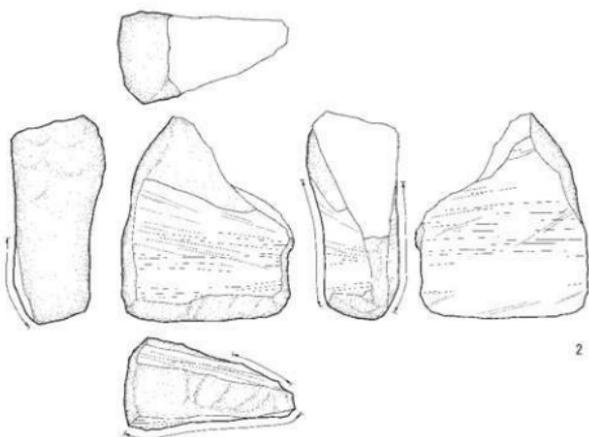
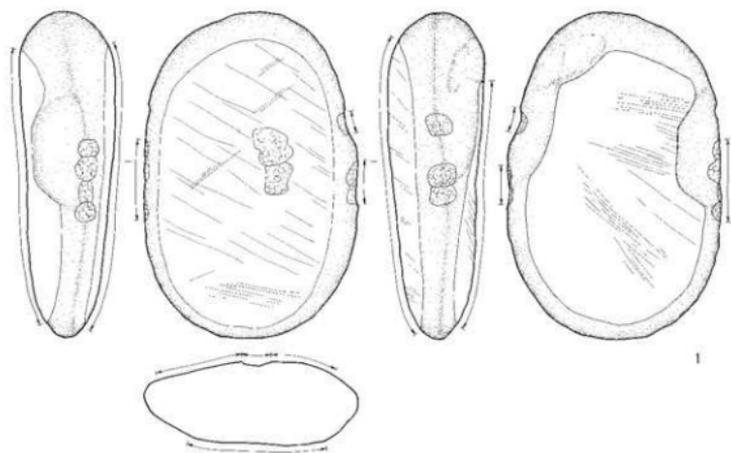
図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真 図版
1	Kb-01	4A-B区	V層	石器	扁平片岩 石斧	-	8.2×4.1×1.8	52.4	網貫の砂岩	刃角95~100°	162
2	Kc-002	4A-B区	V層	石器	磨石	重	7.3×5.4×3.3	181.7	石炭山山岩	最(北)側向・傾5鈍角)程度(重)	162



0 (1, 2) 5cm

第381图 IV-V层出土遗物22

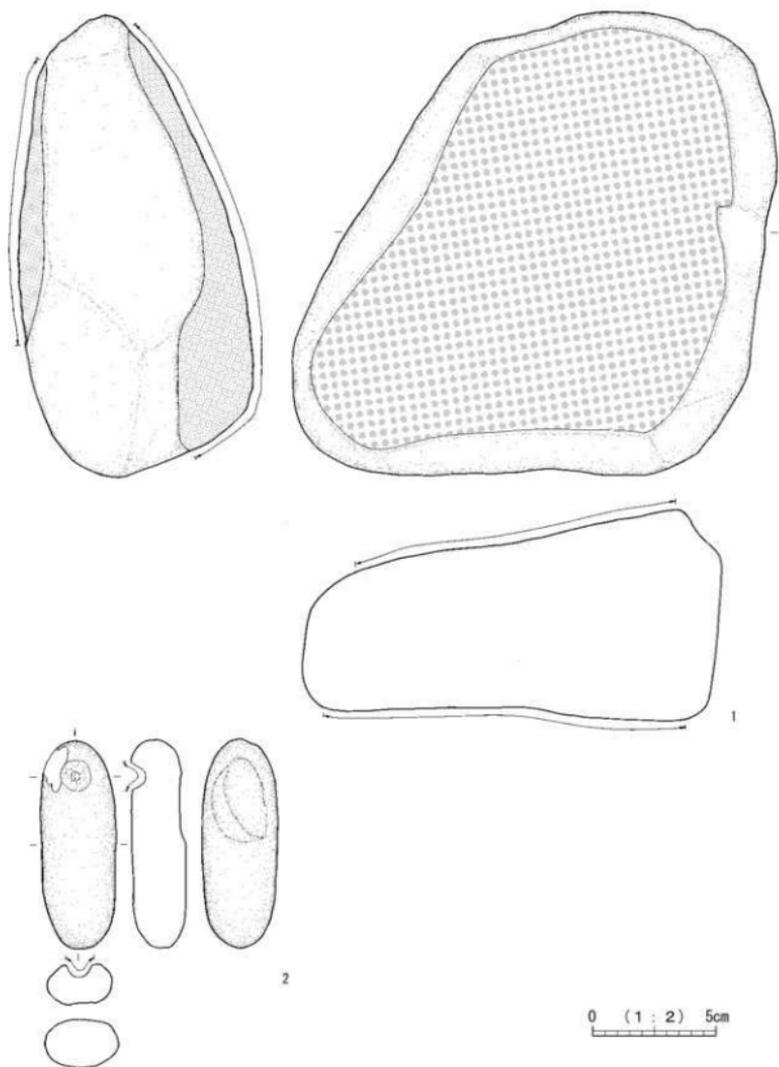
图版 序号	登錄番号	出土地点	层位	类别	分期	器种	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真 位置
1	Kc-001	4A-Ⅱ区	V层	石器	Ⅱ	陶石	16.1×13.7×0.9	1331.6	凝灰岩	西二面(縦×幅×厚)深全(深)	122



0 (1:2) 5cm

第382図 IV・V層出土遺物23

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種類	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真 図版
1	K3-003	4A-B1C	V層	石製品	砥石	-	13.3×8.8×3.4	286.5	凝灰岩	自然、板状、最(横)2箇所・北2箇所、溝状痕あり	163
2	K3-004	4A-B1C	V層	石製品	砥石	-	7.3×7.0×3.7	196.9	砂岩	面取り、板状、欠損品	163

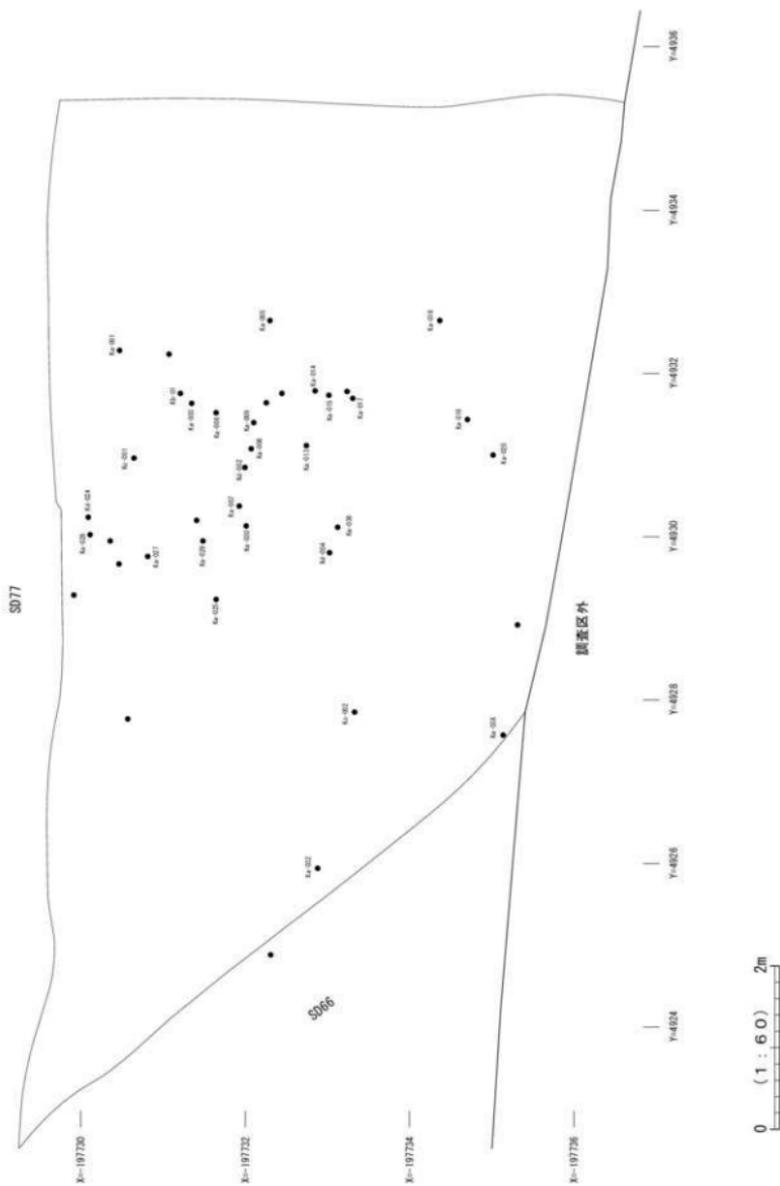


第383図 IV・V層出土遺物24

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真掲載
1	K6-024	4A・B区	V層	石器	石垂	-	18.9×18.3×9.1	4863.5	石英安山岩	板状、縦線なし	103
2	K6-023	4A区	IV・V層	石器品	板石製品	-	8.6×3.0×2.2	50.0	凝灰岩	棒状	103



第384図 4A区石器出土地点分布図



第385图 4A-B区石器出土点分布图

(5) 水田跡

4 A区での弥生面先行調査の中で、IV層が互層状に堆積しており細分されることがわかった。4 A-D区の調査中に畦畔状の高まりを検出し、この堆積が水田耕作によるものであることが想定されたことから、周辺に比べて標高が低くなる4 A・4 B区について、水田畦畔の検出作業を行った。その結果、IV d層・IV f層・V a層・V b層の各層上面において、水田畦畔とみられる畦状の高まりを検出した。

畦畔は各層を通じてほぼ同じところから検出されており、IV層よりV層のほうが遺物の出土量も多く、検出される畦畔も明瞭になる傾向がある。また、IV a層～IV f層は層厚・分布域がほぼ一緒であり、水田土壌にみられる層の乱れもあまり見られない。このことから、IV層は互層状の自然堆積であり、下層のV層水田跡の疑似畦畔の可能性が高いと考えられる。

IV d層上面で検出された疑似畦畔A(第386・390～392図)

土質はIV c層よりややしまりがなく、軟質で粘性がある。黒褐色・暗褐色～灰黄褐色の色調を呈し、南西方向に向かうほど層厚が薄くなる。

4 A区において6条の疑似畦畔Aを検出し、確認できた最長のもので24.9m、幅は1.7～2.8mを測る。各々は概ねN-40°-W、N-50°-Eの方向に直線的に伸び、交差する。

IV d層からの遺物出土は非常に少なく、掲載遺物はない。

IV f層上面で検出された疑似畦畔A(第387・390～392図)

色調及び土質はIV d層に非常に近似しており、堆積過程・条件が類似していたものと思われる。4 A区南西側では土質と色調の差異が認められ、これは水田域の西限を示しているものと判断した。

疑似畦畔Aは13条検出した。4 A区ではIV d層で検出した3条の疑似畦畔Aとは同位置にて確認できた。4 B区北側においては、南側畦畔が持つ方向からかなりの変化が認められ、水田区の形状が方形を維持しなくなる。

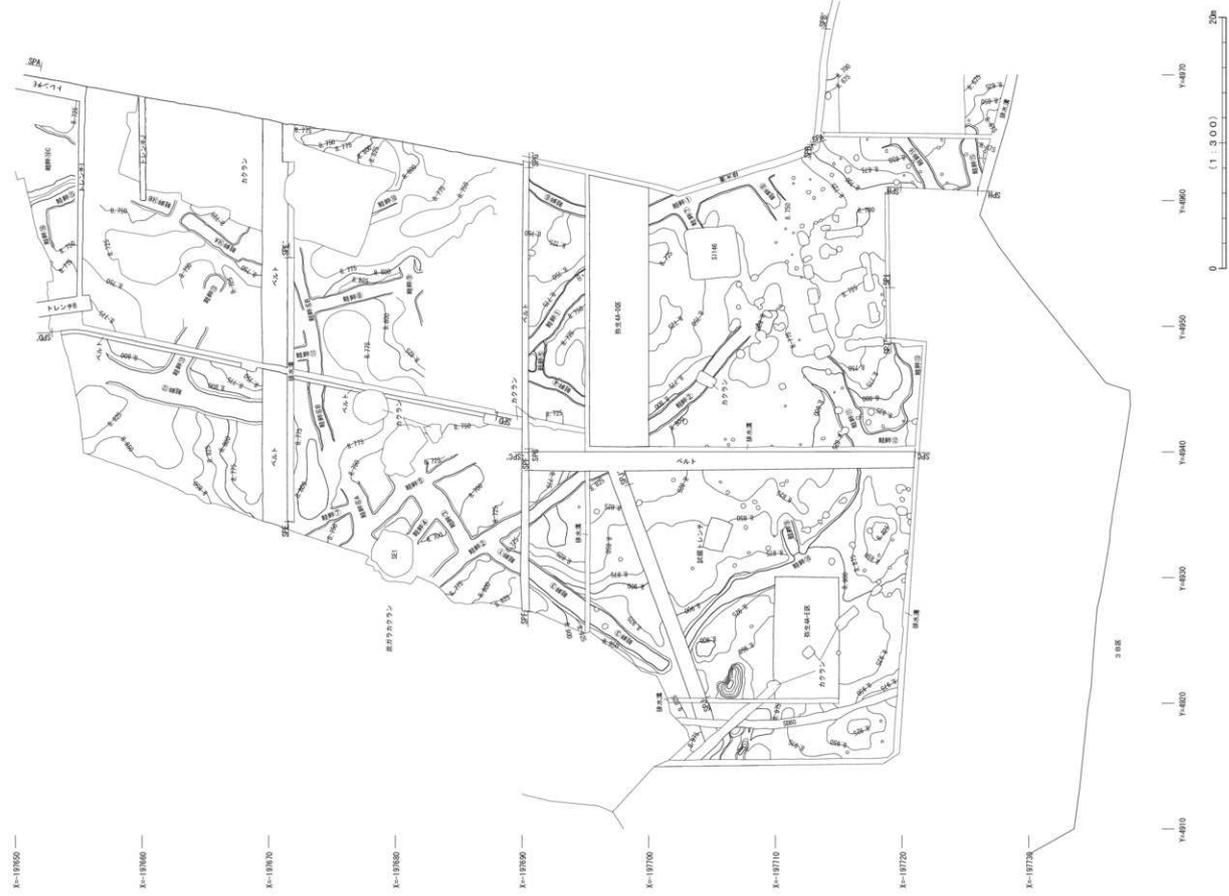
当初、同標高で水田外に堆積する「IV層下半」を母材層とし、水田域において点在してしかみられないIV g層はその耕作攪乱の痕跡であると考えた。しかし、J～J'断面の観察の結果、「IV層下半」はIV f層の直上層であるIV e層に相当しているため、IV f層は調査区の低地にのみ堆積していると言える。このIV f層中からは櫛形開式期の壘破片が出土し、V a層出土の土器片と接合した(第394図-1)。

V a層水田跡(第388・390～392図)

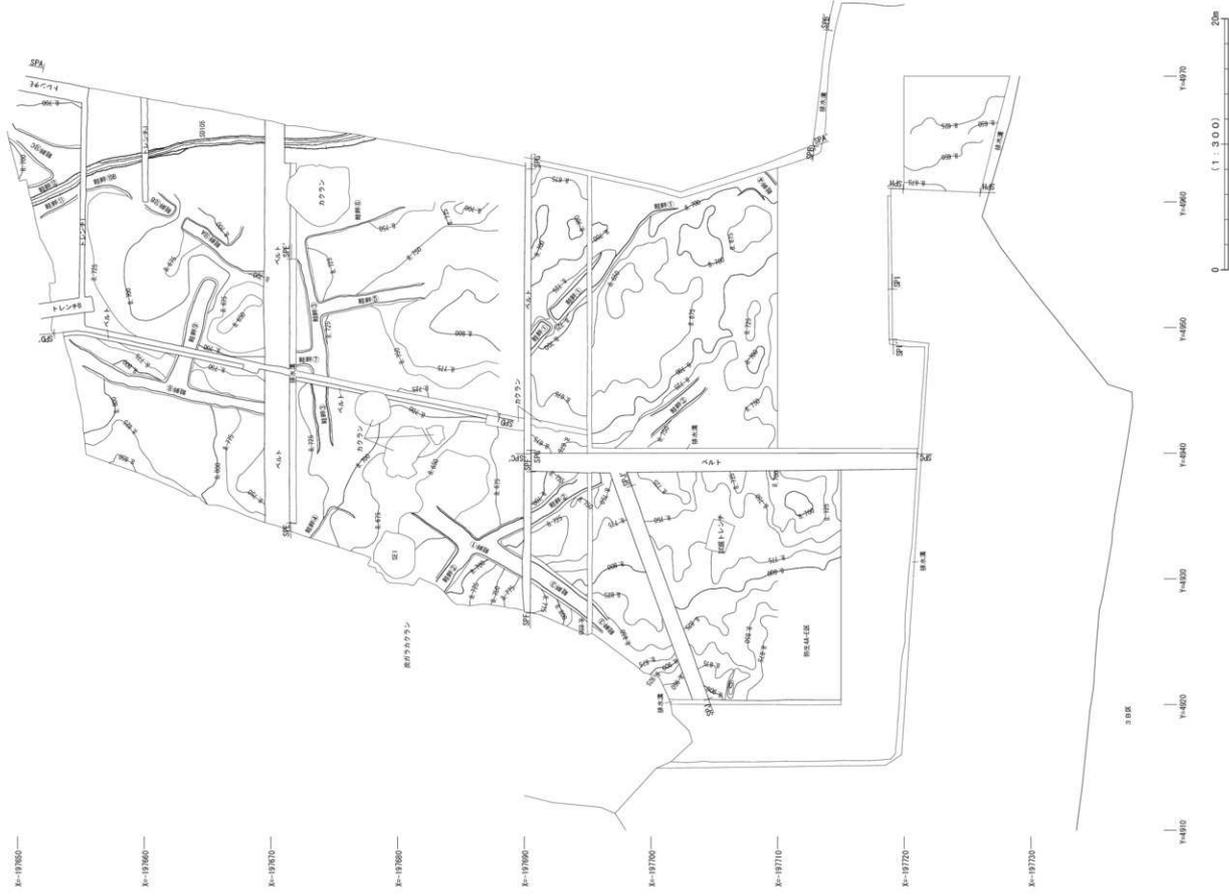
耕作土は黒褐色の粘土質シルト層で、微高地に近い西側では粘性が低く、砂質に漸移する。4 A区西側で確認された畦畔⑩及び南端で確認された畦畔⑪は、色調もやや明るくなり、位置や土性から水田域の境界畦畔である可能性が高い。これより南西の位置に遺構群が検出されていることも、この畦畔が境界であることの1つの傍証になるであろう。その他に検出された畦畔は、IV f層で検出した畦畔と同位置である他、新たに小規模なものも多数検出された。

V a層は互層状に堆積するIV層各細分層に比べて、若干の厚みと層離面の起伏を持つ。土質・土色等を併せて考えると、V a層は各水田土壌推定層の中では、水田土壌である可能性或いは耕作頻度が最も高いと思われる。

水田土壌からは土器片の他、石鎌2点・磨製片刃石斧1点を含む石器類が出土している。



第385図 V a 露木田跡



X=197650—

X=197660—

X=197670—

X=197680—

X=197690—

X=197700—

X=197710—

X=197720—

X=197730—

3 0 0 0

Y=4990

Y=4800

Y=4820

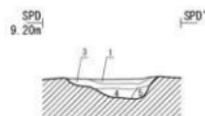
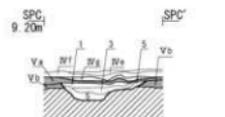
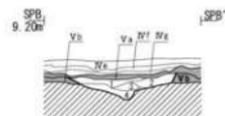
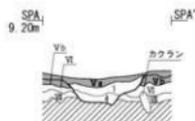
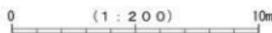
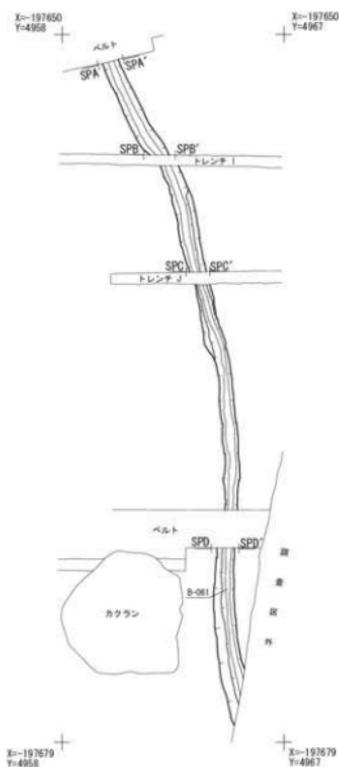
Y=4840

Y=4860

Y=4900

Y=4870

0 (1 : 3 0 0 0) 20m



第393図 SD105溝跡(弥生時代)

遺構名	グリッド	方向	堀削 (cm)			層位		土色		備考	
			長さ	上幅	下幅	深さ	土性	土性			
SD105	III-117-143-149-155	N-1'-W N-21'-W	(2645)	68-80	14-32	27	1	10YR3-3	暗褐色	シルト	陶灰色土含む、礫化鉄多量含む
							2	10YR4-1	陶灰色	シルト	黄褐色土粒・礫化鉄含む
							3	10YR2-3	黒褐色	粘土質シルト	陶灰色土含む、黄褐色土粒・炭化物少量含む
							4	10YR4-1	陶灰色	シルト	礫化鉄多量含む
							5	10YR5-1	陶灰色	シルト	黄褐色土粒・礫化鉄含む

(6) 水田跡出土遺物

a. 土器(第394・395図)

水田跡から出土した土器のうち、17点を図示した。主にVa・Vb層からの出土で、いずれも破片資料である。

甕・壺類

第394図-1～7は甕I類に分類される資料である。頸部付近の連続刺突はやや横長になるものが多く、頸部屈曲部分に施されるものと屈曲部分より下位に施されるものがある。第394図-3-6の口唇部には胴部同様にLR縄文が施されている。第394図-2～4は同一個体で、底部破片第394図-4には木葉痕とともに初圧痕も認められた。頸部屈曲の緩やかな第394図-7には連続刺突がみられず、外面には炭化物が付着している。

第394図-8は甕II類の資料である。口縁部には5条の平行沈線が巡っており、内外面ともに磨耗が顕著である。

第394図-9は小型の壺である。細めの沈線で鐘形文が描かれ、不明瞭ではあるが植物茎回転文の充填が認められた。他の出土資料に比べて、胎土への粗い砂粒の混入が非常に多く、色調も灰色がかった黒色と差異が認められた。内面上方には、接合・成形時の指頭による圧痕が顕著であった。

第394図-10、第395図-1・2は、甕或いは壺の底部周辺資料である。第394図-10には地文としてLR縄文がやや縦走気味に施されている。この地文は局所的にはあるが、1条おきに深く現れていることが看取され、施文本体が条の太さの異なる2本の粗紐で構成されていることがわかる。底面には網代痕を残しており、内面は底に近い器器面の剥落が進んでいる。第395図-1は底部外面に木葉痕が認められる資料で、胴部には結節回転文らしき上下互い違いの圧痕が横位に展開する。第395図-2の底部外面にも木葉痕が残っており、その上に成形時にはみ出た粘土塊が圧着している。

高坏

第395図-3は高坏の脚部で、着底部は摩滅している。3列の波形成文が描かれ、植物茎回転文が充填される。充填文との切り合いから、地文充填後に再沈線が施されていることがわかる。無文部のミガキは非常に丁寧であるが、器面の剥落も進んでいる。

鉢

第395図-4～7は鉢である。第395図-4には波形成文が描かれ、口縁部内面に1条の横位沈線が施される。第395図-5～7は同一個体で、鉢としてはやや大型の個体である。文様は三角文が横位に連続するが、頂部が上を向く有文の三角形と、頂部が下を向く無文の三角形が交互に現れる。外面の無文帯及び内面のミガキは比較的丁寧で、沈線は断面V字状に近い。

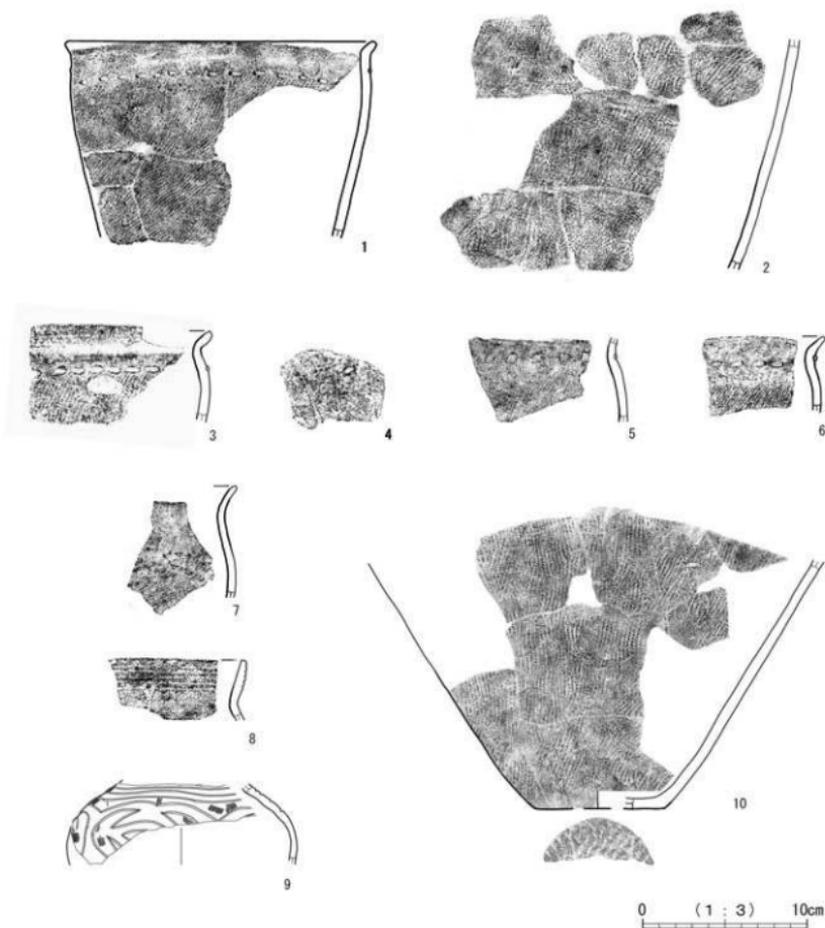
b. 石器(第395～399図)

水田耕作土から出土した石器のうち、15点を図示した。Va層が8点、Vb層7点である。

①打製石器

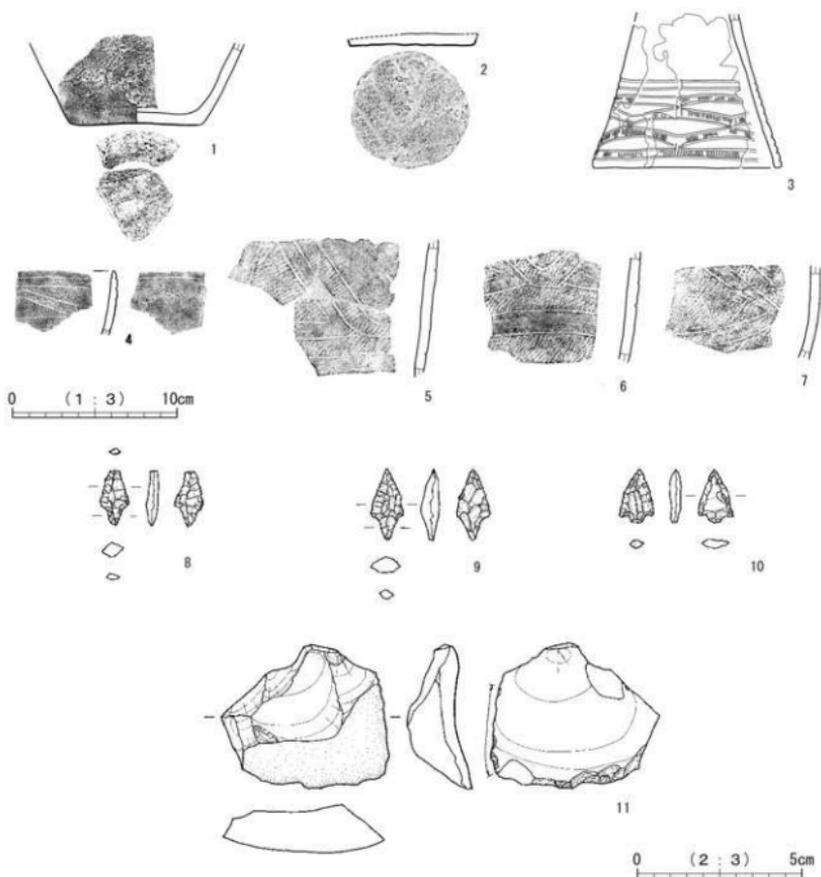
石鏃

I類3点が出土した(第395図-8～10)。第395図-8はI類B1種で、先端部を折損している。両面を平坦剥離で整形され、先端部に調整を施す。基部の剥離加工の順序は左右異なり、両面の中央の稜は直線的でない。断面形は中間部・基部共に菱形を呈する。石材は玉髄である。第395図-9はI類B1種である。先端部は比較的厚いが、基部は薄い。先端部の調整はa面左側縁からの調整が、基部の調整は左右共にa面が最後である。断面形は、先端部のa面では菱形であるが、先端部のb面では稜の形成は弱い。石材は凝灰質頁岩である。第395図-10はI類B2種である。b面側からの折れで基部が欠損している。素材面を残して、周縁を剥離整形している。基部の部分は左右いずれもb面



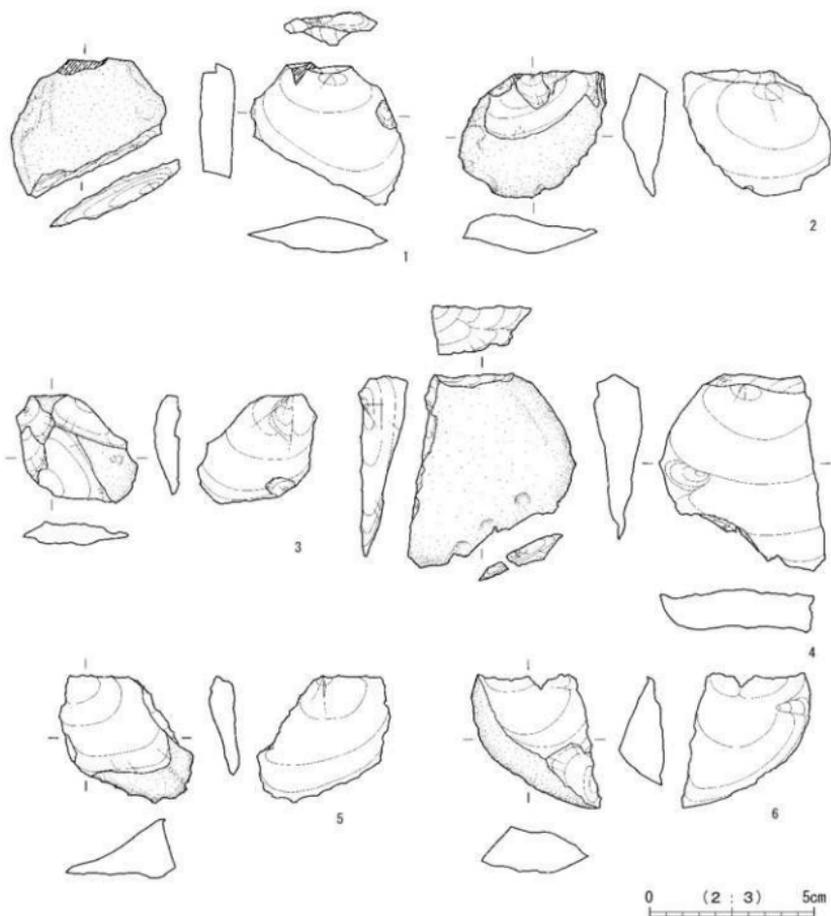
第394図 水田跡出土遺物(1)

複製番号	登録番号	出土地点	種別	器種	外面調整・文様	内面調整・文様	備考	写真掲載
1	B-008	智ノ懸水田跡	弥生土器	甕	L.R織文(斜行)→刺突(右→左)	ミ字半		164
2	B-016	Vノ懸水田跡	弥生土器	甕	L.R織文(斜行)	ミ字半	B-015-021と同一個体	164
3	B-015	Vノ懸水田跡	弥生土器	甕	L.R織文(斜行)→刺突(左→右), 口縁面L.R織文	ミ字半		164
4	B-021	Vノ懸水田跡	弥生土器	甕			本業根, 柳庄痕	164
5	B-011	Vノ懸水田跡	弥生土器	甕	L.R織文(斜行)→刺突	ミ字半		164
6	B-013	Vノ懸水田跡	弥生土器	甕	L.R織文(斜行)→刺突(左→右), 口縁面L.R織文	ミ字半		164
7	B-010	Vノ懸水田跡	弥生土器	甕	L.R織文(斜行, 3本筋)	ナ字	外面似化物付着	164
8	B-009	Vノ懸水田跡	弥生土器	甕	沈線	ナ字		164
9	B-014	Vノ懸水田跡	弥生土器	甕	沈線→植物系回転文光景	柳頭匠痕・ナ字	器面の摩滅がしい	164
10	B-022	Vノ懸水田跡	弥生土器	甕	ヘラナ字→L.R織文2本筋, 縦走・斜行	ミ字半(底部調整)	新代痕	164



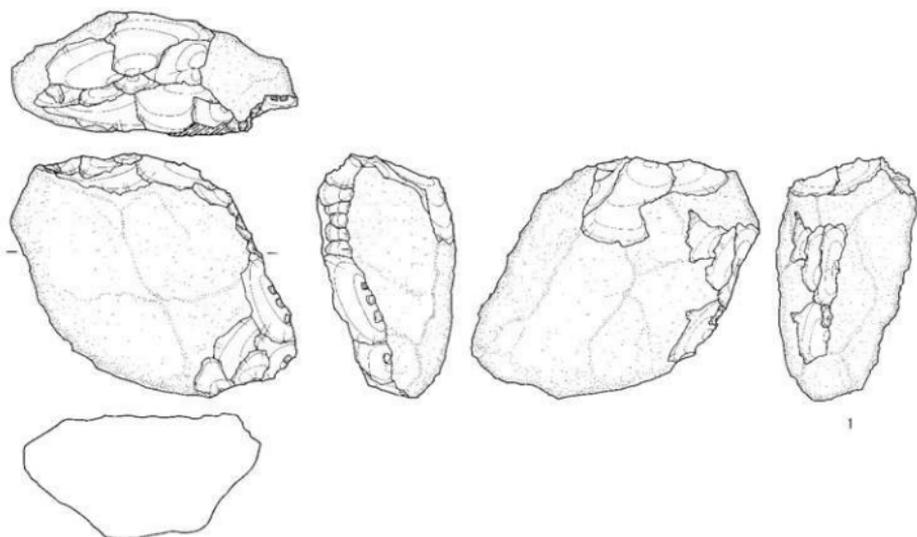
第395図 水田跡出土遺物(2)

図版番号	登録番号	出土地点	類別	器種	外面調整・文様	内面調整・文様	備考	写真 図版		
1	B-018	Vb層水田跡	弥生土器	甕or甕	1.8縄文(斜行)→船頭回転文?(横位)、底部直上1ギキ	1ギキ	木蓋痕	161		
2	B-012	Va層水田跡	弥生土器	甕or甕			木蓋痕	161		
3	B-019	Vb層水田跡	弥生土器	高坏	沈線→植物葉回転文(光面)→再沈線・2ギキ	ハラナデー指ナデ	無文部遺痕あり	161		
4	B-110	Vb層水田跡	弥生土器	鉢	1.8縄文→沈線	沈線		161		
5	B-061	SD10区	弥生土器	鉢	1.8縄文(斜行)→沈線→滑漉	1ギキ		B-017-020と同一器体		
6	B-020	Vb層水田跡	弥生土器	鉢	1.8縄文(斜行)→沈線→滑漉	1ギキ		161		
7	B-017	Vb層水田跡	弥生土器	鉢	1.8縄文(斜行)→沈線→滑漉	1ギキ		161		
図版番号	登録番号	出土地点	類別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真 図版
8	Ka-060	Va層水田跡	石器	石鏃	1B1	17×0.9×0.4	0.5	玉髓	有茎、幅厚比0.44、先端部欠損	165
9	Ka-068	Va層水田跡	石器	石鏃	1B1	22×1.0×0.5	0.8	凝灰質頁岩	有茎、先端角50°、幅厚比0.50	165
10	Ka-080	Vb層水田跡	石器	石鏃	1B2	1.6×1.0×0.3	0.5	凝灰質頁岩	有茎、先端角55°、幅厚比0.30、基部欠損、茎材面残寸	165
11	Ka-071	Vb層水田跡	石器	"清灰石(カス石)"	II	4.4×5.0×1.3	27.6	凝灰質頁岩	微細加工、後一横線に微細刻痕あり、自然面残寸	165

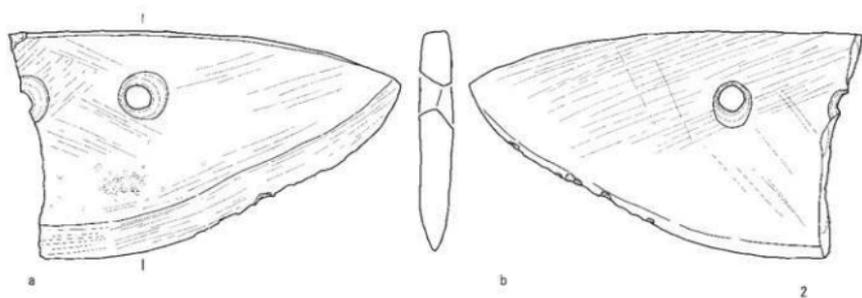


第396図 水田跡出土遺物(3)

図版番号	登録番号	出土地点	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真図版
1	Ka-061	Va層水田跡	石器	二次加工の 水田耕片	Ⅱ	3.4×5.0×1.1	194	流紋岩	割断角116°、切子打面、腹面に二次加工あり、末端部折れ、自然面残す	165
2	Ka-062	Va層水田跡	石器	耕片	-	3.6×5.0×1.3	210	流紋岩	割断角121°、平削打面、自然面残す	165
3	Ka-064	Va層水田跡	石器	耕片	-	3.2×3.3×0.8	82	流紋岩	割断角116°、磨打面、自然面残す	165
4	Ka-009	Va層水田跡	石器	耕片	-	5.6×4.6×1.5	417	流紋岩	割断角120°、平削打面、側縁一部折れ、自然面残す	165
5	Ka-072	Vb層水田跡	石器	耕片	-	3.1×5.0×1.5	172	流紋岩	割断角116°、磨打面、自然面残す	165
6	Ka-073	Vb層水田跡	石器	耕片	-	5.4×3.4×1.6	180	流紋岩	打面欠面、自然面残す	165



1



a

1

b

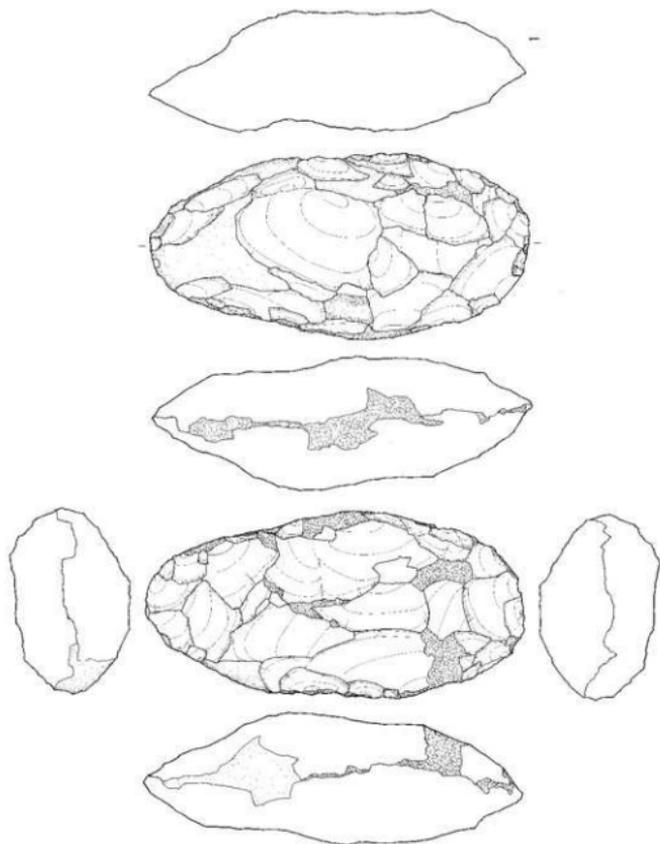
2

0 (2:3) 5cm

第397図 水田跡出土遺物(4)

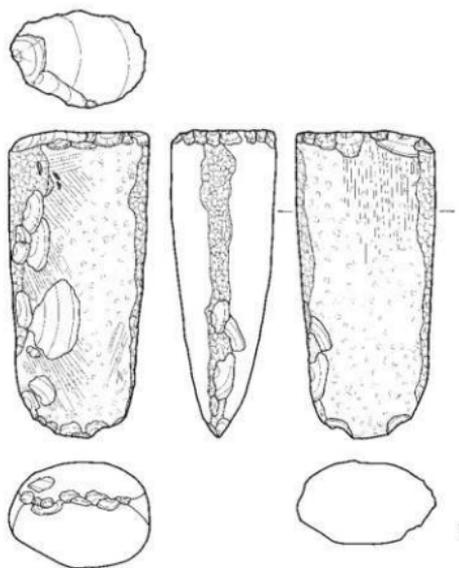
国庫番号	登録番号	出土地点	種別	器種	分期	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真国庫
1	Ka-074	V b層水田跡	石器	石核	1	7.0×7.7×3.9	243.2	凝灰岩	打面転移あり。礫素材。自然面残存	106
2	Kb-03	V b層水田跡	石器	石筈丁	-	6.7×11.3×1.0	107.7	片岩	刃角84-87°。刃部両生あり。微細割痕あり	105

0 (1 : 3) 10cm

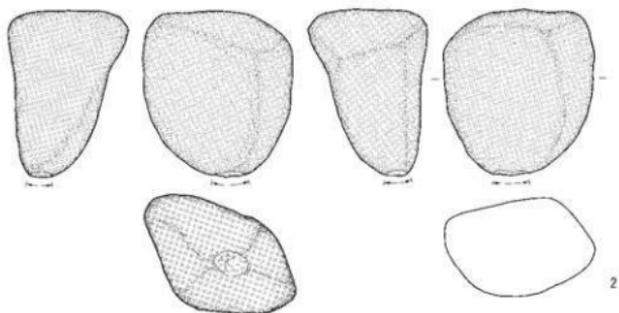


第398図 水田跡出土遺物(5)

採取番号	登録番号	出土地点	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真掲載
1	Ka-05	Va水田跡	石器	丸型輪切石斧	-	23.3×11.4×7.8	2567.2	安山岩	未製品、製器加工後の最終調整段階。黒線はシタザダ、自然面残す	166



0 (2 : 3) 5cm



0 (1 : 2) 5cm

第399図 水田跡出土遺物(6)

図版番号	登録番号	出土地点	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真図版
1	Kb-02	V a層水田跡	石器	磨石	磨	9.3×4.4×3.1	182.5	安山岩	磨(先1箇所・側2箇所)程度(磨)；右側転用	106
2	Kc-025	V b層水田跡	石器	磨-皿	V	6.7×5.9×4.7	255.1	右葉安山岩	磨全面(凸)；磨(先1箇所)程度(磨)	106

から最後に剥離が行われている。断面形は扁平な六角形状である。石材は流紋岩である。

二次加工のある剥片

Ⅱ類2点が出土した(第395図-11、第396図-1)。第395図-11は、長軸辺一辺に腹面からの連続的な剥離がみられる。石材は凝灰質頁岩である。第396図-1の石材は流紋岩である。

剥片

5点が出土しており(第396図-2~6)、石材は全て流紋岩である。

石核

I類1点が出土しており(第397図-1)、打面の転移が認められた。石材は流紋岩である。

②磨製石器

大型蛤刃石斧

未製品が1点出土した(第398図-1)。大型の礫をある程度の形に剥離整形後、敲打整形によって稜を潰しているが、敲打整形の範囲は少なく、大半は剥離面を残している。石材は安山岩である。

石庖丁

1点が出土した(第397図-2)。折損品である。敲打ののち両面を研磨しており、粗孔は2箇所にある。外湾刃であるが、a面の刃部右側縁が僅かに内湾しており、刃縁の折損後に研ぎ直しを行った可能性がある。なお、刃縁には微細剥離が観察できる。刃面はa面が1.7cmと深く、b面0.7cmと浅い。石材は片岩である。

③礫石器

磨・凹・敲石

Ⅲ類1点、Ⅳ類1点が出土した(第399図-1・2)。ともに石材は石英安山岩である。第399図-1はⅢ類で、石斧を転用している。第399図-2はⅣ類で、磨面は器面全面にわたる。

(7) その他の弥生時代出土遺物

古代の遺構が検出された基本土層Ⅳ層は、細分層であるⅣa～Ⅳg層を全て加えても、層厚50cmに満たない箇所が大半であるため、古代遺構を構築する際には弥生時代の包含層・水田面を盛んに攪乱していた。よって古代遺構の調査においても、その埋土中から弥生時代の遺物が多く出土している。本項では、下位の弥生時代層に起因するものの、原位置不明と言わざるを得ない出土遺物を一括し報告する。

a. 土器(第400・401図)

古代遺構の中でも堅穴住居跡や溝跡のような、規模が大きく掘り込みの深い遺構からの出土が多いが、古代遺構による下層の攪乱が少なかった4B区からは出土していない。39点を図示した。

甕・壺類

第400図-1～10は甕Ⅰ類に分類される。頸部の屈曲具合や胴部の張りにはバラつきがみられるものの、連続刺突の施文箇所については、刺突の施されない第400図-9を除いて、概ね頸部屈曲部直下である。地文LR斜縄文が多いが、第400図-7・9には植物茎回転文が施され、この2者には口唇部にも同様の施文がなされている。地文施文後に連続刺突が行われており、1単位の刺突は左→右という方向で行われるものが目立つ。第400図-10の頸部下の施文は、一見短沈線状であるが、刺突底面右方に刺突具先端の筋状の痕跡が確認できた。このことから本資料の施文は、左→右方向へのやや押し気味の刺突であると考えられる。これら甕Ⅰ類資料は、総じて土器内面がミガキ調整され、そのミガキが丁寧なものほど皮膜状となり、器面の剥落が進んでいる。

第400図-11は甕或いは壺の胴部破片で、地文はLR縄文が縦走・斜行している。内面にはミガキが施されるが、

器面の剥落が著しい。甕・壺類については、底部に近くなるほど剥落が進む例が多く見受けられるため、本資料も底部に近い破片であることが考えられる。

第400図-12～15は甕Ⅱ類と考えられる資料である。第400図-12の口縁部には5条の平行沈線がみられ、下方にいく程沈線の間隔が広がる。沈線断面はV字に近く、沈線幅は細い。非常に丁寧な作りで、鉢形土器である可能性も考えられる。第400図-13・14は同一個体の頸部下破片資料で、地文には植物茎回転文が施される。頸部屈曲部直下に複雑な2条の平行沈線が引かれるが、3条に枝分かれする箇所や3本目の沈線が途切れる箇所が認められた。しかし、内面のミガキ調整や焼成は良好であり、実用的なものであったという印象を受ける。第400図-15も頸部下の破片資料である。地文の植物茎回転文を施した後、2条の平行沈線で地文帯を区画している。

第400図-16～18は壺である。第400図-17には重三角文が描かれ、有文部・無文部が繰り返されている。第400図-18はやや大型の個体の胴部上半資料と思われ、縦走気味の地文が施されている。外面は灰褐色、内面及び破片断面は黒褐色を呈しており、焼成は非常に堅緻である。

高坏

第400図-19～23、第401図-1～4は高坏で、波形文が描かれるものが多く認められた。第400図-21は、口唇面を細かく刻むことで鋸歯状の口縁部を作り出しており、V字波形文が描かれている。第400図-22・23は同一資料であるが、破片が持つ色調はかなり異なっている。波形文に植物茎回転文が充填されており、口縁部内面には2条の平行沈線が施される。第401図-1は小突起が認められる個体である。外面の小突起直下には横位の短沈線状のものがみられるが、意図されたものであるか判断しづらい。口縁部内面には1条の沈線で区画された有文帯があり、口唇面にまで地文が施されている。また小突起直下には垂下する短沈線が認められた。第401図-4には、波形文ではなく3条の平行沈線が施される。器面の状態が悪く、無文帯があるのか不明である。

鉢

第401図-5～10は鉢で、第401図-6・9・10には波形文が描かれている。第401図-6は小型の鉢で、地文に反撚の縄文原体が用いられている。沈線は浅く粗雑に引かれているが、内面の仕上げは丁寧に行われており、焼成も堅緻である。第401図-9の地文には植物茎回転文が用いられている。

蓋

第401図-11～16は蓋で、程度の差はあるものの、いずれも着底部に摩滅が認められた。第401図-12は橙褐色を呈する破片で、反撚の縄文原体が充填される。第401図-13は体部破片で、LR斜縄文を地文としている。この地文は天井に近いところでは施されていない。下方には沈線の痕跡が認められるため、口縁部に有文帯を持つことが分かる。第401図-15・16は同一個体で、蓋部全体にLR斜縄文が施される。内外面ともに炭化物の付着が顕著で、内面の付着範囲は帯状になっている。これは使用時の状況を如実に物語るものであろう。

b. 石器・石製品(第401～421図)

①打製石器

板状石器(大型直線刃石器Ⅰ類)

Ⅱ類3点が出土した(第401図-17、第402図-1・2)。いずれも石材は安山岩である。また、この他に珪質凝灰岩製の大型直線刃石器Ⅰ類が1点出土した(第403図-1)。

ピエス・エスキュー

1点が出土した(第404図-1)。上下左右に微細刻離がみられる。石材は凝灰質頁岩である。

二次加工のある剥片

Ⅰ類1点、Ⅱ類3点、Ⅲ類1点が出土した(第404図-2～6)。石材は流紋岩が3点、黒色頁岩・珪質頁岩が1点ずつであ

る。いずれも自然面を残している。

剥片

1点出土した(第405図-1)。石材は流紋岩である。

石核

I類1点、II類1点が出土した(第405-2・3)。第405図-3には打面の転移が認められた。石材は玉髄である。

原石

第406図-1は、4C区から出土した流紋岩の原石である。

③ 礫石器

磨・凹・敲石

I類2点、II類6点、III類3点、IV類3点、V類3点、VI類2点、VII類3点の計22点が出土した(第407～418図)。磨痕・凹痕は、円礫の表か裏面或いは両面に認められる。敲打痕は主に円礫の側面、長軸側の先端部、短軸側の先端部にみられる。

石皿

I類4点が出土しており(第418図-2、第419図-1、第420図-2、第421図-1)、石材はいずれも凝灰岩である。第419図-1には溝状痕が認められた。

台石

1点が出土した(第420図-1)。石材は石英安山岩である。

④ 石製品

有孔石製品

2点が出土した(第421図-2・3)。第421図-2は玉と考えられるが、大きく欠損している。石材は玉髄である。第421図-3は、楕円礫の両面を研磨している。石材は凝灰岩である。

丸玉

1点が出土した(第421図-4)。断面形は楕円形を呈し、石材は滑石である。

管玉

粗割り段階の未製品と考えられるものが1点出土した(第421図-5)。石材は碧玉である。

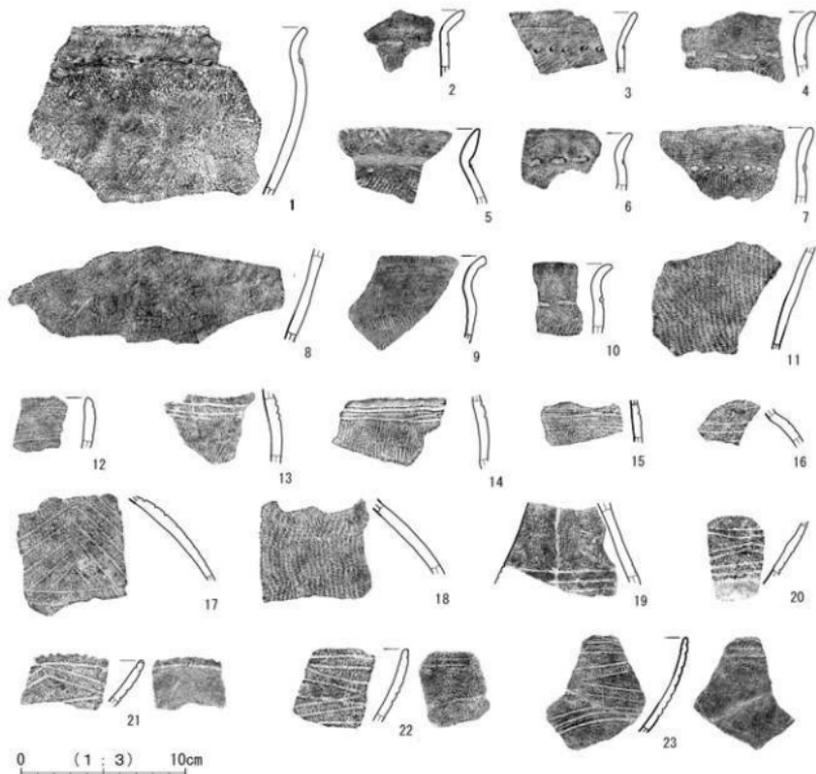
器種不明の石製品

2点が出土した(第421図-6・7)。ともに石材は凝灰岩である。第421図-6は、棒状の礫の半分を全周にわたって削っている。

(8) 下層調査(Ⅵ層～Ⅷ層)

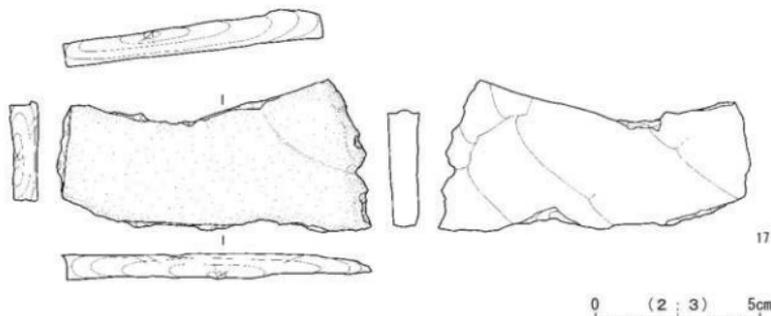
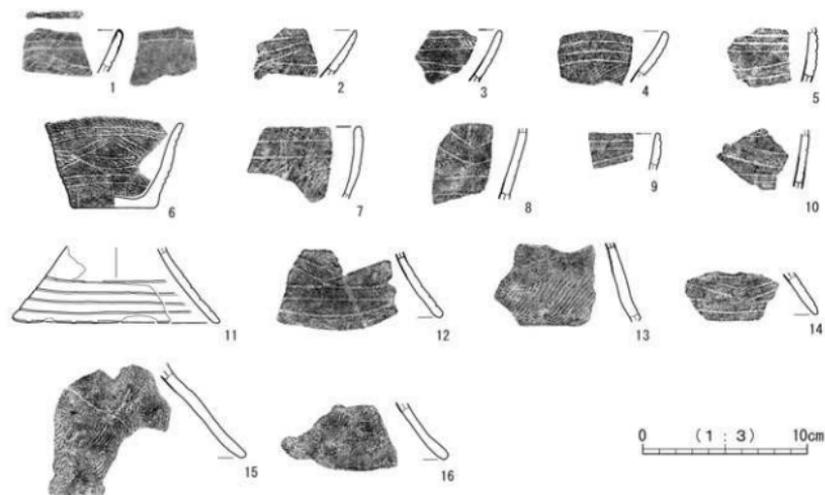
水田調査区の下層調査としては、4A区西側で1箇所(54-55-70-71グリッド)、東側で2箇所(86-87-97-98グリッドと17-28グリッド)においてトレンチを設定し、実施した。Ⅵ層は暗色で粘性を帯びるため、水田跡を想定して調査を進めたが、畦畔等の水田関連遺構は検出されず、顕著な傾斜や起伏もみられなかった。遺物も全く出土しておらず、以下は自然堆積の無遺物層であることを確認し、調査を終了した。

微高地にあたる4C区西側でも土器埋設遺構調査後3箇所のトレンチを設定し、層ごとに掘削を行ったが、遺構・遺物ともに確認できず、同じく自然堆積の無遺物層であることを確認し、調査を終了した。



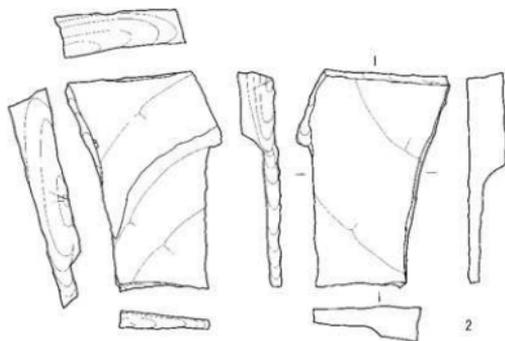
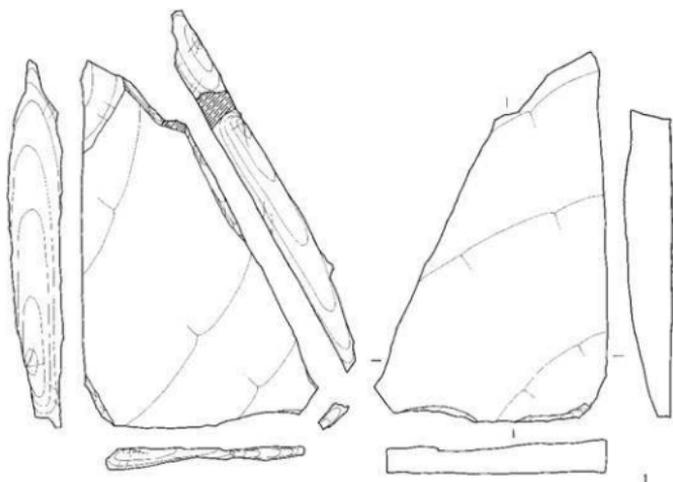
第400図 その他の弥生時代出土遺物(1)

種別番号	登録番号	出土地点	種別	器種	外面調整・文様	内面調整・文様	備考	写真図版
1	B-103	SE248	弥生土器	甕	上段縄文(網突(左→右))	ミガキ	B-100と同一個体	166
2	B-071	SD77	弥生土器	甕	上段縄文(斜行)→網突(左→右)			166
3	B-076	SD77	弥生土器	甕	上段縄文(斜行)→網突(右→左)	ミガキ		166
4	B-092	SE137	弥生土器	甕	上段縄文(網突(左→右))	ミガキ	外面炭化物付着	166
5	B-062	SD124	弥生土器	甕	上段縄文(網突)	ミガキ		166
6	B-073	SD77	弥生土器	甕	植物葉回転文(網突(左→右))	ミガキ		166
7	B-087	SE135	弥生土器	甕	植物葉回転文(網突(左→右))、口縁面にも施文	ミガキ(溝痕あり)	内外面炭化物付着	166
8	B-100	SE248	弥生土器	甕	上段縄文(斜行・縦走)	ミガキ		166
9	B-060	4 AK P513	弥生土器	甕	植物葉回転文(施文・口縁面)	ミガキ(溝痕強い)		167
10	B-080	SE137	弥生土器	甕	ナデ(縦・斜)→上段縄文(網突(左→右))	ミガキ		167
11	B-066	SD66	弥生土器	甕or甕	上段縄文(縦走)	ミガキ(溝痕強い)	内面炭化物付着	167
12	B-082	SE135	弥生土器	甕or鉢	沈線・ミガキ	ミガキ	器蓋付下の最大径が窄	167
13	B-077	SD77	弥生土器	甕	植物葉回転文→沈線	ミガキ	B-108と同一個体	167
14	B-108	4 AK P799	弥生土器	甕	植物葉回転文→沈線	ミガキ		167
15	B-106	4 C区精査	弥生土器	甕	植物葉回転文→沈線	ミガキ		167
16	B-096	SE221	弥生土器	甕	沈線	ミガキ		167
17	B-080	SD66	弥生土器	甕	沈線→上段縄文(施文)ミガキ	ミガキ?		167
18	B-059	4 C区 P120	弥生土器	甕	上段縄文(斜行・縦走)	ミガキ		167
19	B-063	SD125	弥生土器	高坏	沈線、ナデ			167
20	B-038	4 AK P215	弥生土器	高坏	沈線→ミガキ	ミガキ	施文は不明瞭	167
21	B-105	SK36	弥生土器	高坏	沈線、口縁面のみ	沈線、ミガキ		167
22	B-084	SE135	弥生土器	高坏	沈線→植物葉回転文(施文)ミガキ	沈線(2条)	B-085と同一個体	167
23	B-085	SE135	弥生土器	高坏	沈線→植物葉回転文(施文)ミガキ	沈線(2条)		167



第401図 その他の弥生時代出土遺物2)

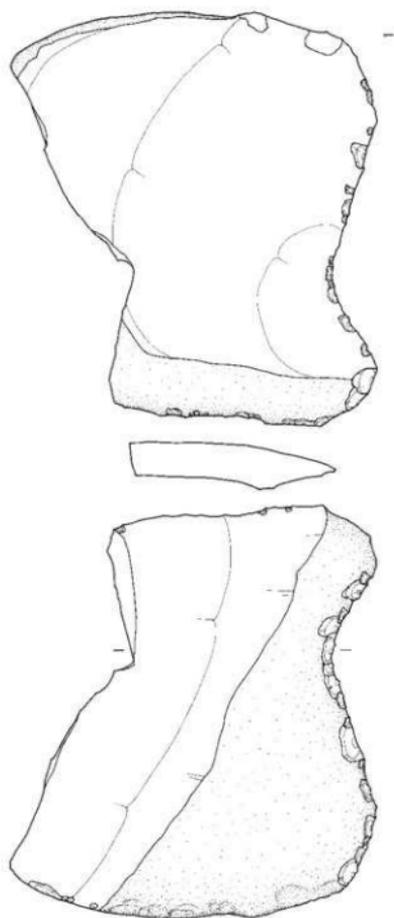
掲載番号	登録番号	出土地点	類別	器種	外面調整・文様	内面調整・文様	備考	写真掲載		
1	B-065	SD42	弥生土器	高坏	沈澱→L.R織文(縦走)→L.R織文(斜行)	L.R織文→沈澱(ミガキ)	小突起下に縦筋状沈澱	167		
2	B-079	SD80	弥生土器	高坏	沈澱→L.R織文(縦走)	沈澱		167		
3	B-088	SD35	弥生土器	高坏	L.R織文→沈澱(縦走)→ミガキ	ミガキ?		167		
4	B-075	SD77	弥生土器	高坏	L.R織文(斜行・縦走)→沈澱	ミガキ?		167		
5	B-067	SD66	弥生土器	鉢	植物系刷文→沈澱→磨消	ミガキ?		167		
6	B-098	SD21	弥生土器	鉢	L.R織文(斜行)→沈澱	ミガキ		167		
7	B-101	SD48	弥生土器	鉢	L.R織文(斜行)→沈澱→磨消(粗雑なミガキ)	粗雑なミガキ		167		
8	B-102	SD48	弥生土器	鉢	L.R織文(斜行)→沈澱→磨消(粗雑なミガキ)	粗雑なミガキ	B-048-102と同一製体	167		
9	B-083	SD35	弥生土器	鉢	植物系刷文→沈澱			167		
10	B-091	SD37	弥生土器	鉢	刷文→沈澱→ミガキ			167		
11	B-081	SD80	弥生土器	蓋	沈澱→ミガキ	ミガキ		167		
12	B-090	SD37	弥生土器	蓋	沈澱→L.R織文(縦走)→内沈澱	ミガキ		167		
13	B-104	SD49	弥生土器	蓋	L.R織文(斜行)・ミガキ	ミガキ		167		
14	B-072	SD77	弥生土器	蓋	沈澱→L.R織文(3条筋)光面→内沈澱	ミガキ		167		
15	B-097	SD21	弥生土器	蓋	L.R織文(斜行)	ミガキ		167		
16	B-099	SD21	弥生土器	蓋	L.R織文(斜行)	ミガキ		167		
掲載番号	登録番号	出土地点	類別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真掲載
17	Ka-096	4 C区跡倉	石器	板状石器	Ⅱ	46×9.4×1.0	57.1	安山岩	下側緑研削、右面左側緑研削、右面右側緑加工、上側研削、自然面残す	168



0 (2 : 3) 5cm

第402図 その他の弥生時代出土遺物(3)

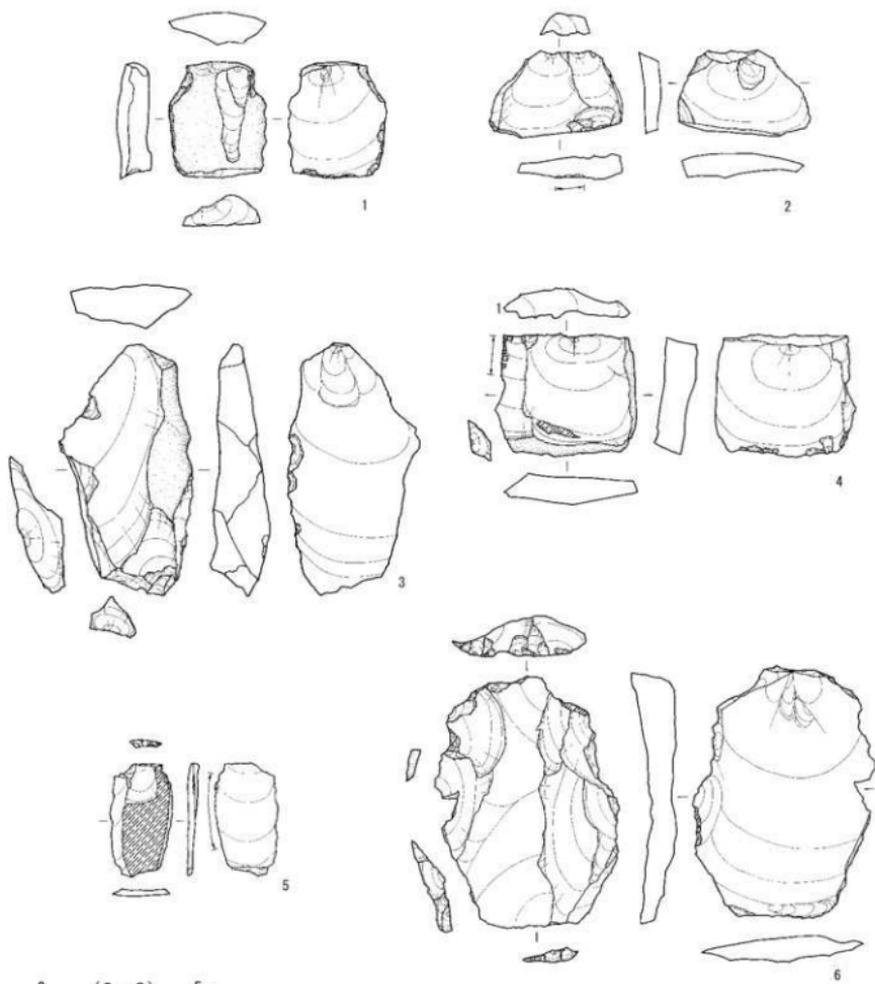
図版番号	登録番号	出土地点	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真掲載
1	Ka-039	SI34	石部	板状石器	Ⅱ	6.4×12.5×1.7	138.1	安山岩	下側縁折れ、a面左側縁折れ、a面右側縁折れ、上側縁折れ	108
2	Ka-124	SI07	石部	板状石器	Ⅱ	3.9×6.7×1.2	43.5	安山岩	下側縁折れ、a面左側縁折れ、a面右側縁折れ、上側縁折れ	108



0 (2 : 3) 5cm

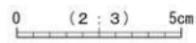
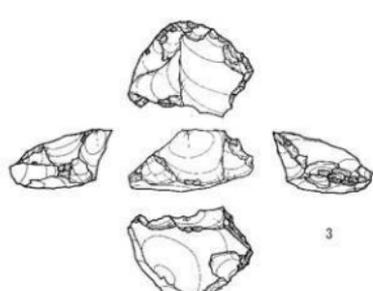
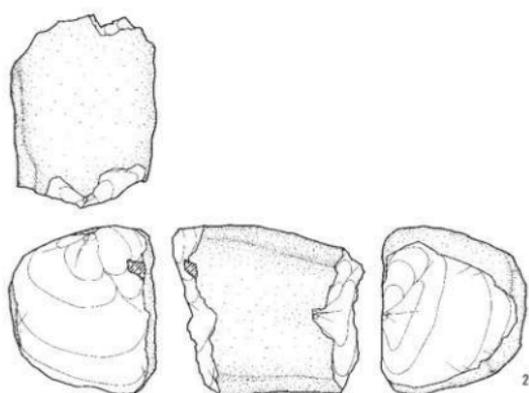
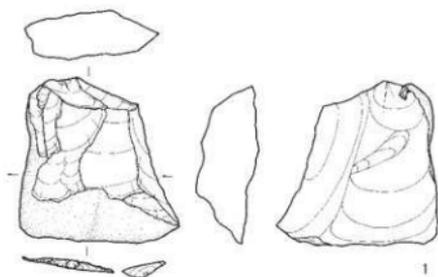
第403図 その他の弥生時代出土遺物4)

図版番号	登録番号	出土地点	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真図版
1	Ka-082	SI230	石器	大形片断状石器1點	-	10.8×13.0×2.7	282.8	柱状凝灰岩	刃部長10.2+6.6cm、刃角71~86°+84~91°、下側縁加工、a面左側縁加工、a面右側縁加工、上側縁欠損、自然面残す	168



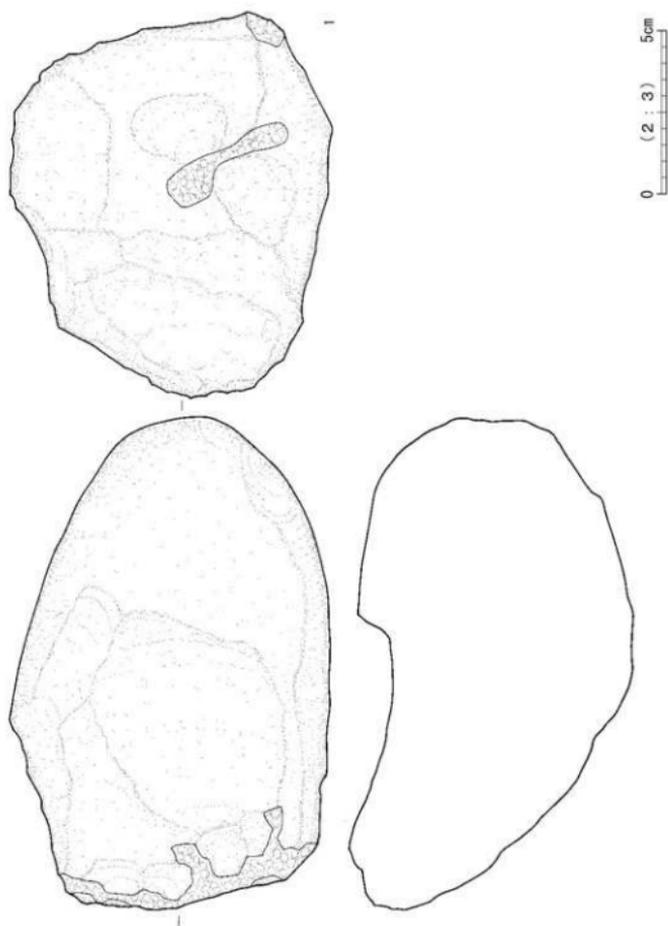
第404図 その他の弥生時代出土遺物(5)

図版番号	登録番号	出土地点	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(m)	重量(g)	石材	備考	写真図版
1	Ka-100	SD66	石器	ヒキス ムネノムス	Ⅱ	3.6×3.0×1.0	12.6	湖底頁岩	1輪縁上に両輪割磨あり、他一輪縁に二次加工あり、末端部折れ、自然面残す	109
2	Ka-104	SD66	石器	二次加工の ある削片	Ⅰ	2.6×4.3×0.8	10.6	結晶頁岩	背面加工、他一輪縁に微細割磨あり、自然面残す	109
3	Ka-108	SI131	石器	二次加工の ある削片	Ⅰ	7.7×4.0×1.6	142.4	流紋岩	後面加工、他一輪縁に二次加工あり、末端部折れ、自然面残す	109
4	Ka-085	4 C区精査	石器	二次加工の ある削片	Ⅰ	3.8×4.3×1.2	23.6	流紋岩	後面加工、他一輪縁に微細割磨あり、端部折れ、自然面残す	109
5	Ka-095	SD80	石器	二次加工の ある削片	-	3.4×1.9×0.3	2.1	棕色頁岩	後面加工、他一輪縁に微細割磨あり、末端部折れ、自然面残す	109
6	Ka-048	4 A区精査	石器	二次加工の ある削片	-	7.7×5.4×1.3	45.0	流紋岩	背面→後面加工、自然面残す、端部折れ	109



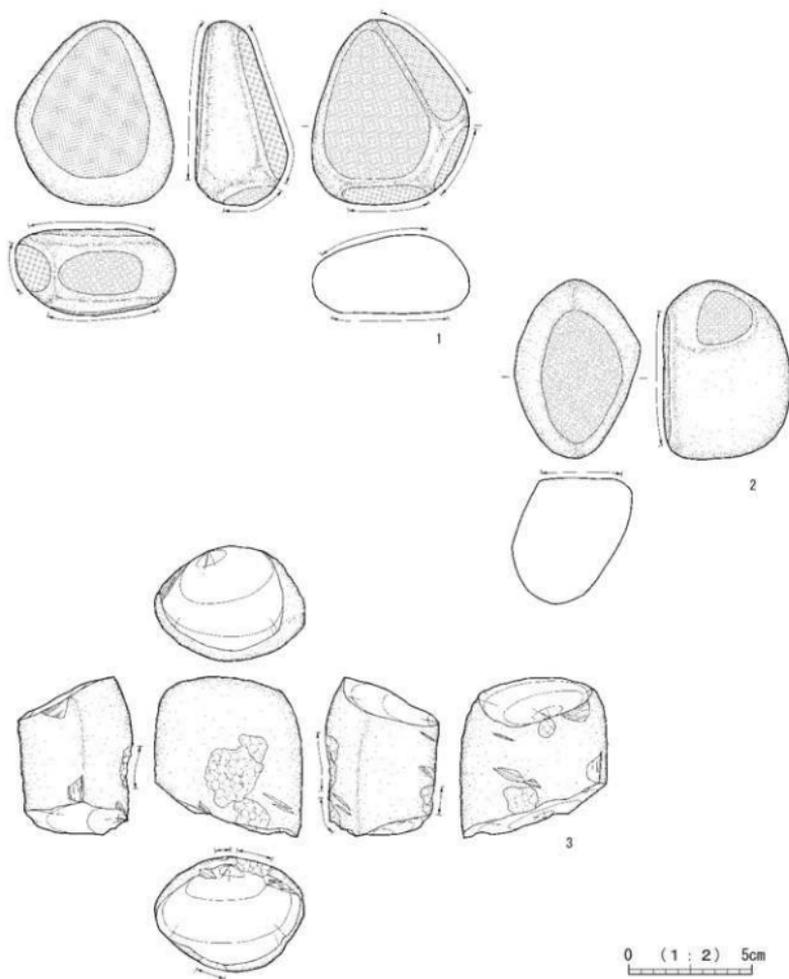
第405図 その他の弥生時代出土遺物6)

図版番号	登録番号	出土地点	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真 図版
1	Ka-062	SD80	石器	刮片	Ⅱ	5.0×4.9×1.7	44.5	流紋岩	割断内112°、点打面、底部折れ、自然面残す	170
2	Ka-065	SD80	石器	石核	1	5.2×5.5×4.4	158.3	流紋岩	打面転移なし、稜素材、自然面残す	170
3	Ka-118	SD253	石器	石核	Ⅱ	2.7×3.7×1.8	16.8	玉髓	打面転移あり、刮片素材	170



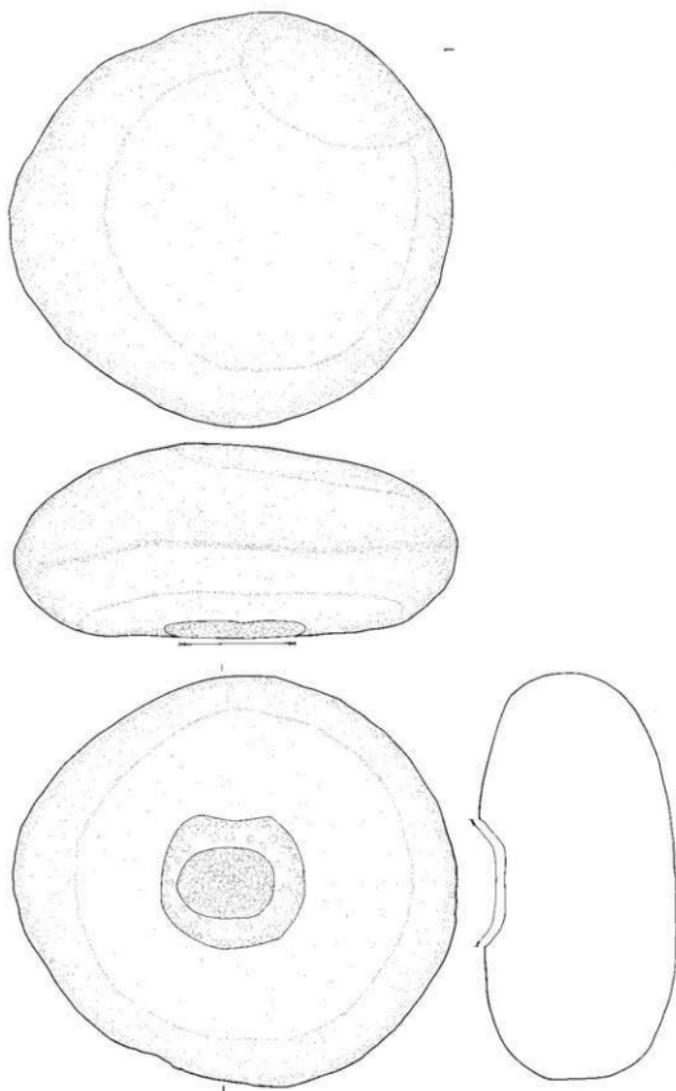
第406図 その他の弥生時代出土遺物(7)

図号	登録番号	出土地点	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真 図版
1	Ka-077	SE1	石器	礮石	-	15.0×9.4×0.7	171.1	流紋岩	円盤	120



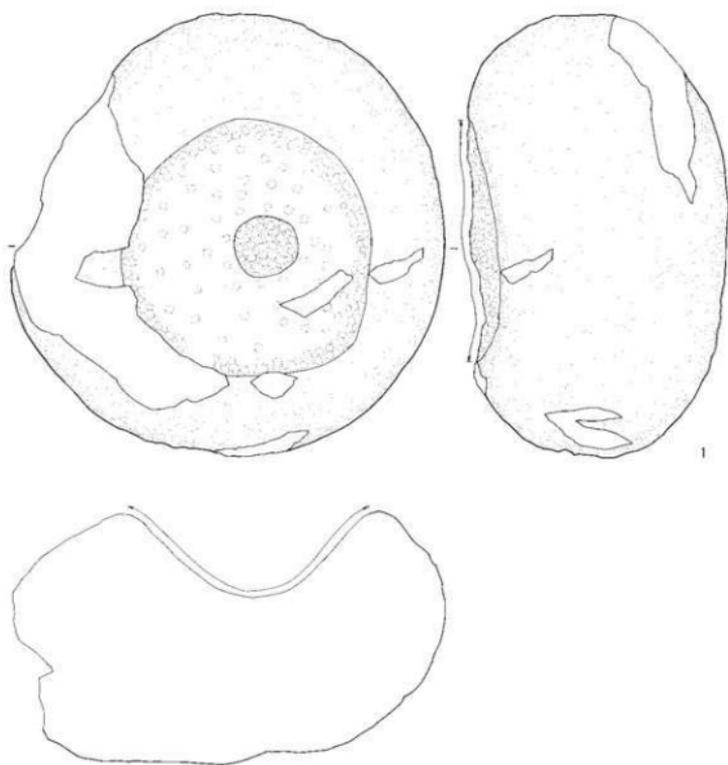
第407図 その他の弥生時代出土遺物(8)

図版番号	登録番号	出土地点	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真掲載
1	Kc-028	SE1	石器	磨石	I	7.5×6.4×3.6	241.4	右夷安山岩	磨二面(凸)	171
2	Kc-029	SE1	石器	磨石	I	7.0×4.8×5.0	244.8	右夷安山岩	磨二面(平+凸)。凹(準)深さ(深)	171
3	Kc-037	SI231	石器	磨石	II	5.9×6.0×4.7	130.0	麻灰岩	凹二面(縦+横+準)深さ(深)。遺状痕あり	171



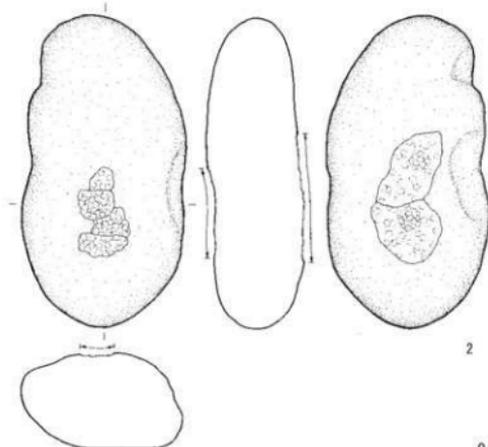
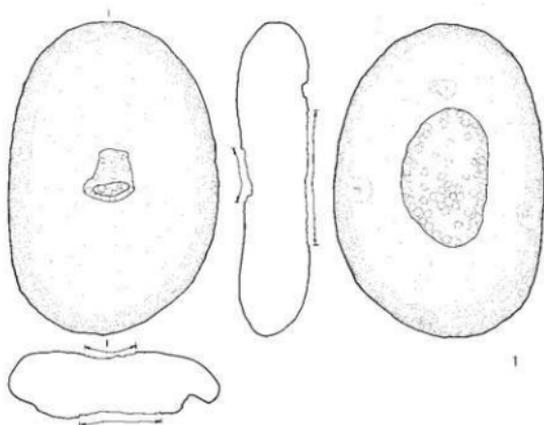
第408図 その他の弥生時代出土遺物(9)

図版番号	登録番号	出土地点	種別	器種	分期	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真図版
1	Kc-032	SE1	石器	四石	Ⅱ	18.1×16.8×0.6	1794.3	凝灰岩	内一画(黒)塗り(塗)	111



第409図 その他の弥生時代出土遺物(10)

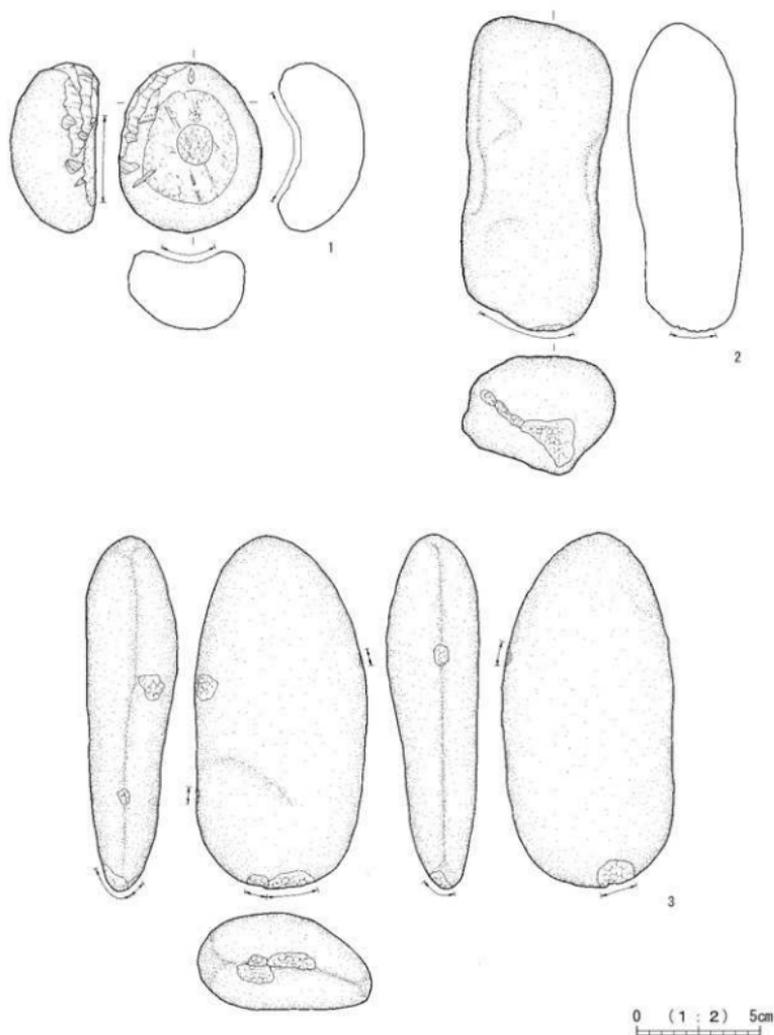
図版番号	登録番号	出土地点	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真 図版
1	Kc-006	SI134	石器	凹石	B	18.1×17.5×10.3	19266	凝灰岩	凹一柄(単)深さ(深)	171



0 (1 : 2) 5cm

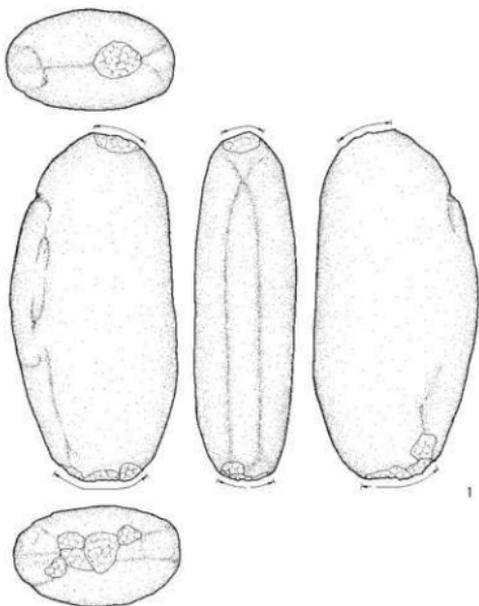
第410図 その他の弥生時代出土遺物(1)

図版番号	登録番号	出土地点	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真掲載
1	Kc-011	SD06	石器	凹石	Ⅱ	12.7×8.4×3.2	276.6	凝灰岩	凹二面(単×単)埋さ(浅)	171
2	Kc-004	SI31	石器	凹石	Ⅱ	12.7×6.7×4.0	325.6	凝灰岩	凹二面(複×複)埋さ(浅)	172



第411図 その他の弥生時代出土遺物¹²⁾

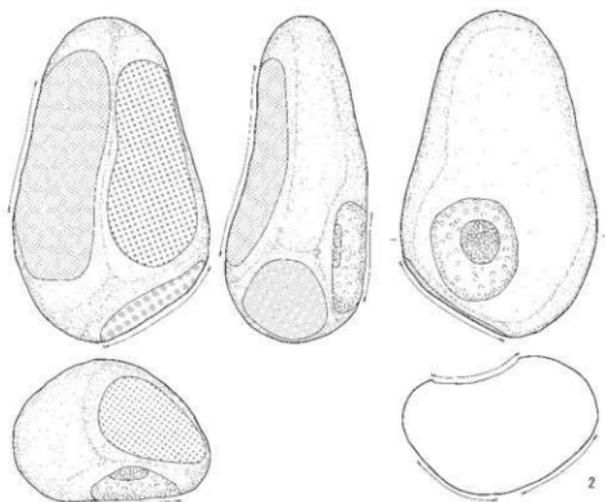
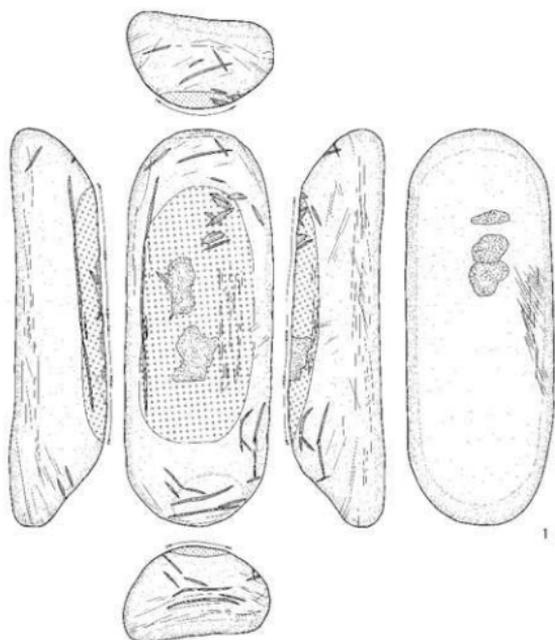
図版番号	登録番号	出土地点	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真掲載
1	Kc-005	SE216A	石器	凹石	Ⅱ	6.9×3.8×3.5	97.8	凝灰岩	凹(単)深さ(深)、遺状痕あり	172
2	Kc-006	SI134	石器	碾石	Ⅱ	12.5×6.5×4.2	467.5	右真安山岩	碾(先2箇所)程度(面)	172
3	Kc-008	SD77	石器	碾石	Ⅱ	14.2×6.9×3.7	532.7	右真安山岩	碾(先2箇所-横3箇所)程度(面)	172



0 (1 : 2) 5cm

第412図 その他の弥生時代出土遺物13

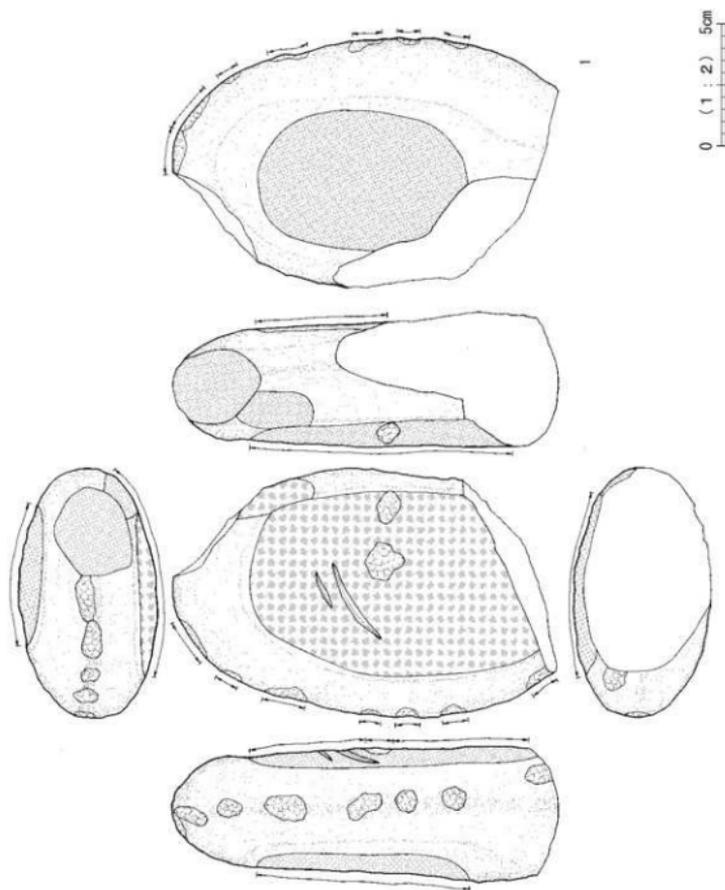
図版番号	発掘番号	出土地点	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真図版
1	Kc-027	SE1	石部	磨石	磨	14.2×6.6×4.2	632.3	右美安山岩	最(先)の磨石程度(推)	172
2	Kc-017	SI328	石部	磨・凹	磨	8.2×11.3×3.3	362.7	磨灰岩	磨四面(平)。凹二面(長×幅)深さ(浅)。縦熟	172



0 (1 : 3) 10cm

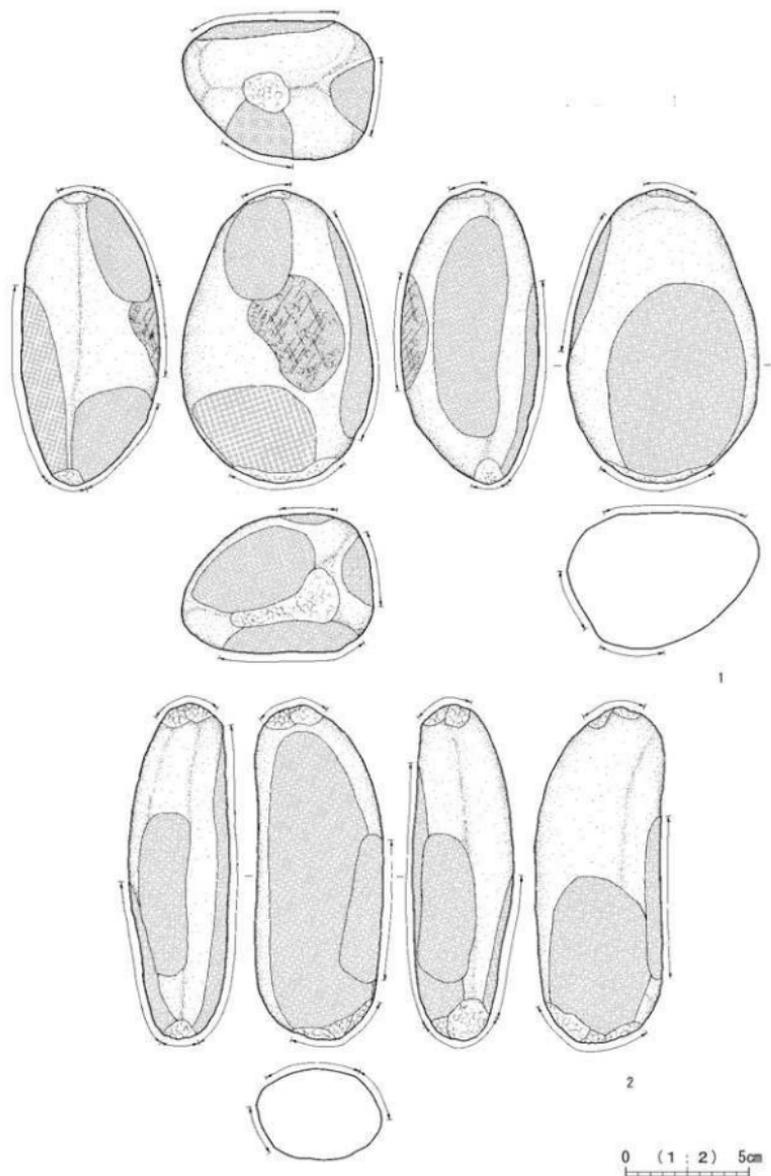
第413図 その他の弥生時代出土遺物14

図版番号	登録番号	出土地点	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ (cm)	重量(g)	石材	備考	写真 図版
1	Kc-033	SI184	石器	磨・凹	IV	24.5×10.2×5.7	12031	凝灰岩	磨一面(凸), 凹二面(寛+縦), 遺状痕あり	172
2	Kc-030	SE1	石器	磨・凹	IV	23.2×12.1×7.8	13853	凝灰岩	磨二面(凹), 凹一面(縦+横)	172



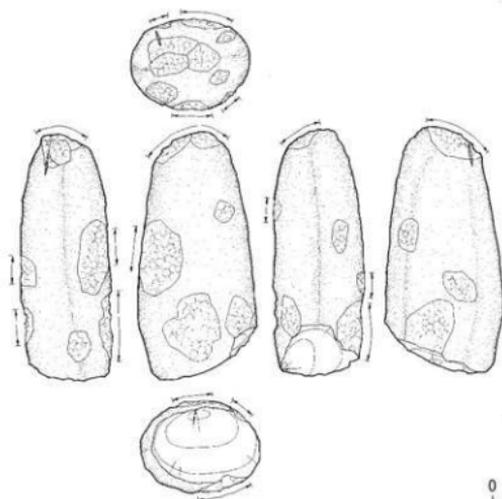
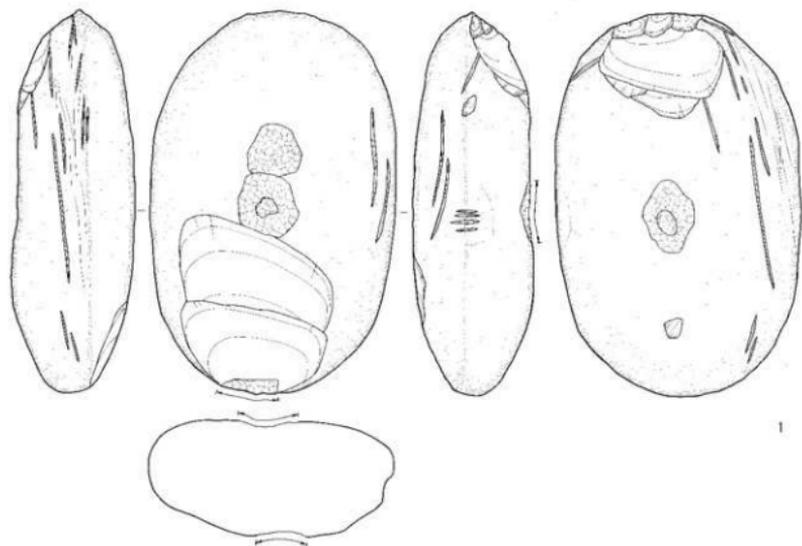
第414図 その他の弥生時代出土遺物⑮

図版番号	登録番号	出土地点	種別	器種	分期	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真図版
I	Ke-031	SE1	石器	磨・皿	V	15.6×10.2×5.6	763.8	凝灰岩	磨二面(平), 皿(先2箇所・穂6箇所・正2箇所)程度(器), 遺状痕あり	172



第415図 その他の弥生時代出土遺物⑩

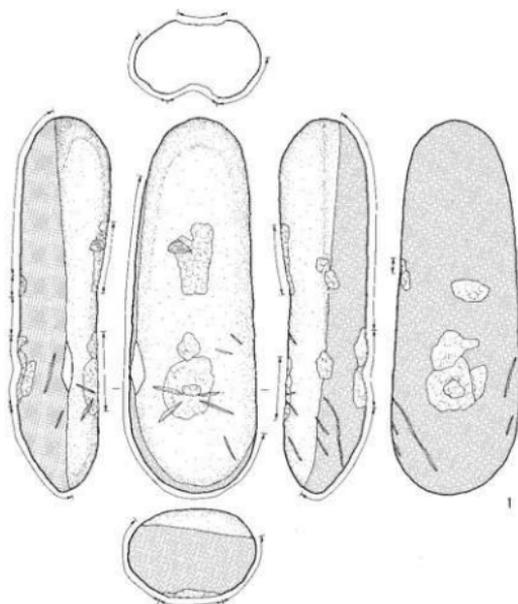
図版番号	登録番号	出土地点	種別	器種	分類	長さ×幅×厚5 (cm)	重量(g)	石材	備考	写真図版
1	Kc-022	SI106	石器	磨・磨	V	11.9×7.8×5.7	7041	右馬安山岩	磨四組(凸), 磨(先2階所・正1階所)程度(前), 成熟	173
2	Kc-018	SI144	石器	磨・磨	V	13.7×3.3×4.1	2750	凝灰岩	磨三組(平), 磨(先0階所)程度(前)	173



0 (1:2) 5cm

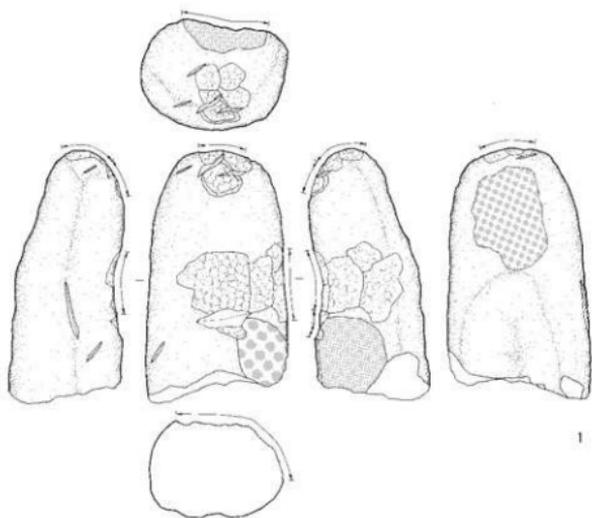
第416図 その他の弥生時代出土遺物(17)

図版番号	登録番号	出土地点	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真掲載
1	Kc-009	SI136	石器	凹・皿	VI	15.7×9.9×4.9	623.4	凝灰岩	凹二面(厚+単)2段5(浅)。皿(先1箇所)程度(面)。溝状痕あり	173
2	Kc-009	SM272	石器	凹・皿	VII	9.7×4.7×3.7	154.9	凝灰岩	凹二面(厚+単+単)。皿(先1箇所-側4箇所)程度(面)	173

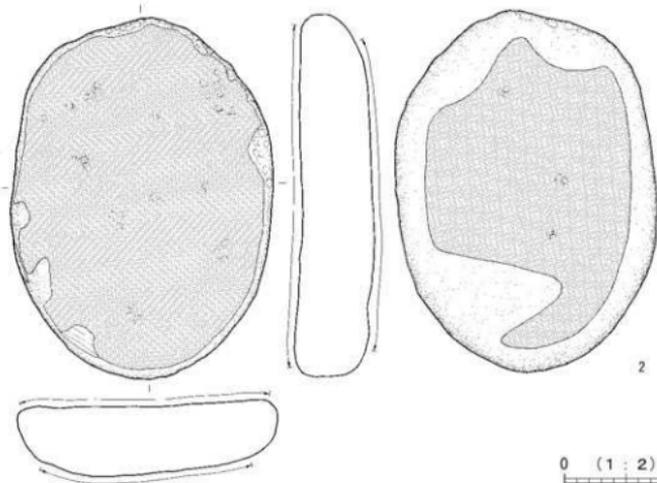


第417図 その他の弥生時代出土遺物⑩

図版番号	登録番号	出土地点	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真掲載
1	Kc-016	SI138	石器	磨・凸・面	鏡	15.2×5.1×3.6	245.1	凝灰岩	磨一面(凸), 凸二面(磨+鏡) 磨三(磨+鏡), 磨(鏡3箇所) 程度(磨)	173
2	Kc-100	SI138	石器	磨・凸・面	鏡	11.0×4.5×2.0	84.9	凝灰岩	磨二面(凸), 凸一面(磨+鏡) 磨三(磨), 磨(先2箇所磨研所) 程度(磨), 磨(磨三)	173



1

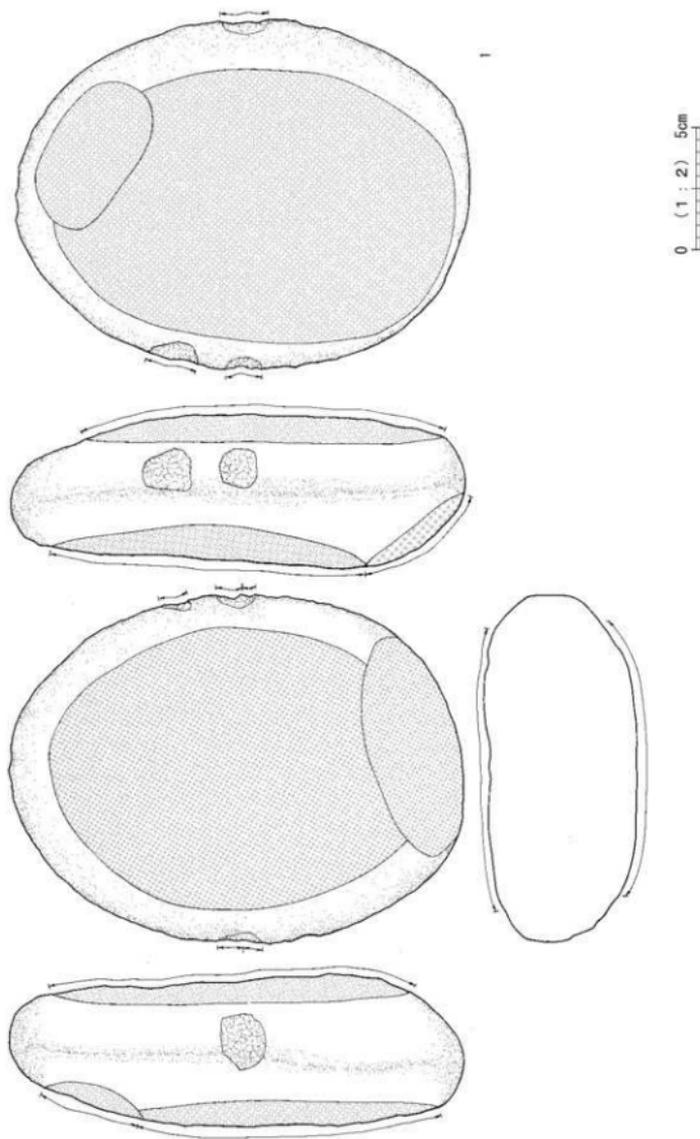


2

0 (1 : 2) 5cm

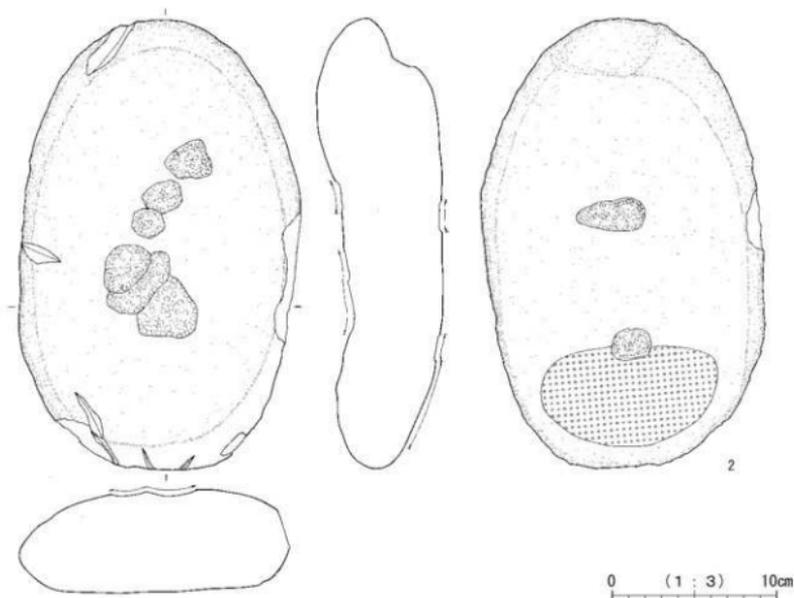
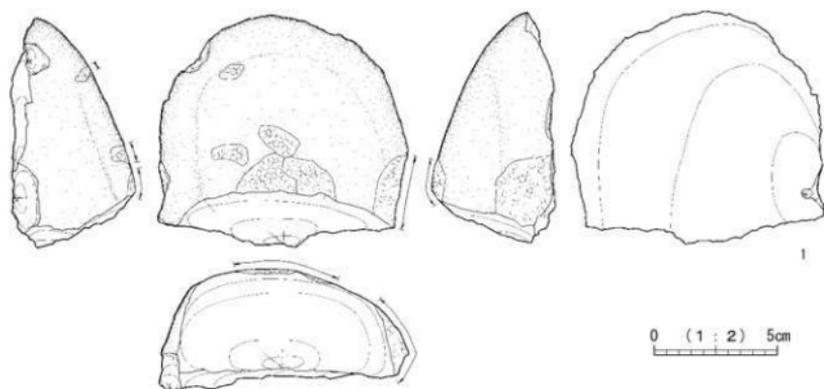
第418図 その他の弥生時代出土物⑨

図版番号	登録番号	出土地点	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真掲載
1	Kc-006	SI34	石部	磨+滑+面	皿	9.8×3.8×4.4	209.4	凝灰岩	磨二面(平)、内二面(単+厚)置き(面)、磨(先4箇所・後2箇所)程度(面)	175
2	Kd-012	SI00	石部	右縁	1	14.7×10.5×3.2	406.8	凝灰岩	円縁、扇縁なし	175



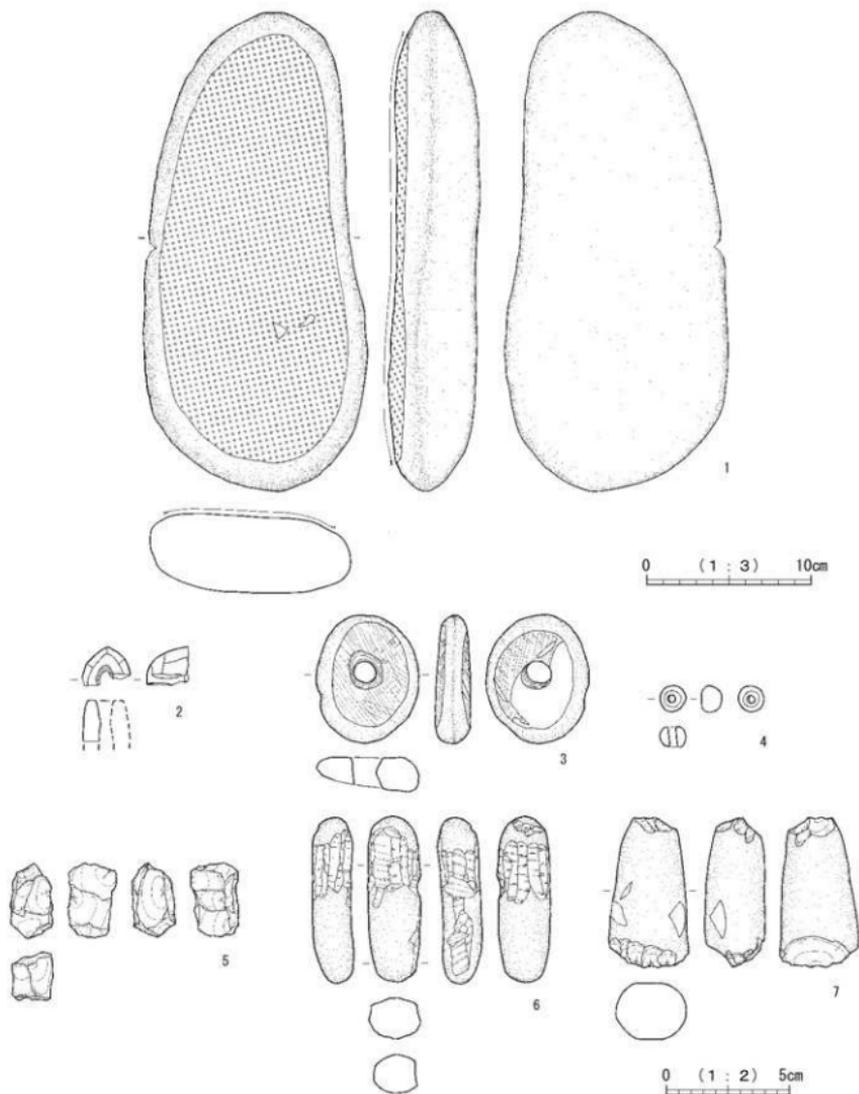
第419図 その他の弥生時代出土遺物20

図版 番号	登録番号	出土地点	種別	器種	分類	長さ×幅×厚(cm)	重量(g)	石材	備考	写真 掲載
1	Kd-009	S146	石器	石甕	I	18.5×14.1×6.2	14062	凝灰岩	内面、刷縁なし。底(数箇所)程度(強)	173



第420図 その他の弥生時代出土遺物②

図版番号	登録番号	出土地点	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真掲載
1	Kc-019	SI141	石器	台石	-	9.3×10.1×4.5	4244	右契安山岩	円盤、凹三面(縦×厚×厚)、底(磨削箇所)程度(強)	171
2	Kd-006	SI131	石器	右石	1	27.8×17.0×7.5	25203	凝灰岩	円盤、扇縁なし、凹三面(縦×厚×厚)1面、溝状痕あり	171



第421図 その他の弥生時代出土遺物22

図版番号	登録番号	出土地点	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真掲載
1	Kd-018	SI45	石器	石網	1	29.7×13.8×4.7	2048.9	凝灰岩	他円環、網線なし	174
2	Kd-104	P1066	石製品	玉	-	1.6×1.9×1.7	3.7	玉髄	破損品	174
3	Kd-001	SD66	石製品	赤石製品	-	5.2×4.1×1.4	23.7	凝灰岩	円環、両面磨削	174
4	Kd-106	SK202	石製品	丸玉	-	直径1.0×0.8	1.4	滑石	断面楕円形	174
5	Kd-007	SI35	石製品	碧玉製品	-	3.1×1.9×2.0	11.6	碧玉	断面楕円	174
6	Kd-011	SD77	石製品	不明	-	6.8×2.1×1.6	22.2	凝灰岩	棒状、隅りあり	174
7	Kd-036	SM280	石製品	不明	-	6.1×3.2×2.3	37.7	凝灰岩	棒状、両面を加工	174

第6章 自然科学分析

—長町駅東遺跡4区におけるプラント・オパール分析—

株式会社古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸(SiO_2)が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 2000)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である(藤原・杉山, 1984)。

長町駅東遺跡4区の発掘調査では、土層断面の観察において水田耕作土とみられる堆積層が複数認められた。そこで、これらについてプラント・オパール分析を行い、稲作の可能性について検討することになった。

2. 試料

調査地点は、4A区東壁、4A区西壁、4B区東壁、4B区中央、4B区西壁、4B区河川跡の6地点である。各地点の分析試料は以下のとおりである。

1) 4A区東壁

上位より暗褐色シルト(IVa層)、黒褐色シルト(IVb層)、にぶい黄褐色シルト(IVc層)、灰黄褐色シルト(IVd層)、褐色シルト(IVe層)、灰黄褐色シルト(IVf層)、褐色シルト(IVg層)、黒褐色シルト(Va層)、暗褐色シルト(Vb層)、褐灰色砂質シルト(VI層)、褐灰色砂質シルト(VII層)、にぶい黄褐色砂(VIII層)より計12点が採取された。

2) 4A区西壁

上位より暗褐色シルト(IV層上)、暗褐色シルト(IV層下)、暗褐色シルト(Vb層)、褐灰色砂質シルト(VI層)、褐灰色砂質シルト(VII層)、にぶい黄褐色砂(VIII層)より計6点が採取された。

3) 4B区東壁

上位より暗褐色シルト(IVa層)、黒褐色シルト(IVb層)、にぶい黄褐色シルト(IVc層)、灰黄褐色シルト(IVd層)、褐色シルト(IVe層)、灰黄褐色シルト(IVf層)、黒褐色シルト(Va層)、暗褐色シルト(Vb層)、褐灰色砂質シルト(VI層)、褐灰色砂質シルト(VII層)、にぶい黄褐色砂(VIII層)より計11点が採取された。

4) 4B区中央

上位より褐色シルト(IVe層)、灰黄褐色シルト(IVf層)、褐色シルト(IVg層)、黒褐色シルト(Va層)、暗褐色シルト(Vb層)、褐灰色砂質シルト(VI層)、褐灰色砂質シルト(VII層)より計7点が採取された。

5) 4B区西壁

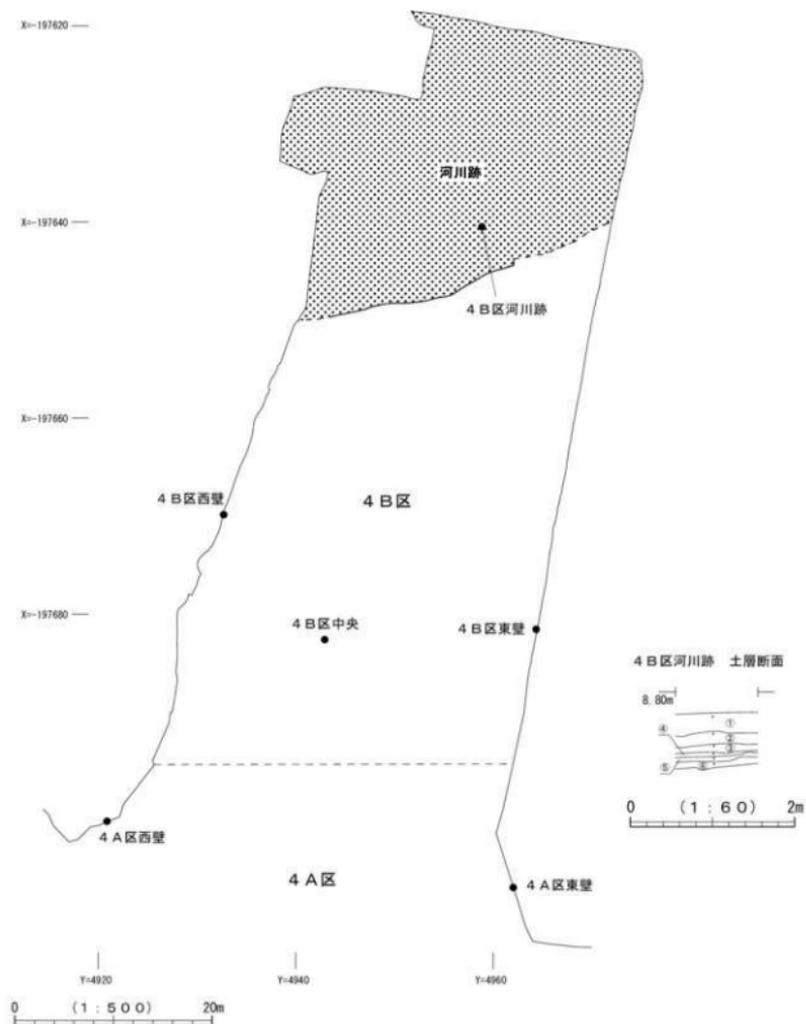
上位より灰黄褐色シルト(IVf層)、褐色シルト(IVg層)、黒褐色シルト(Va層)、暗褐色シルト(Vb層)、褐灰色砂質シルト(VI層)、褐灰色砂質シルト(VII層)、にぶい黄褐色砂(VIII層)より計7点が採取された。

6) 4B区河川跡

上位より灰色シルト(①層)、灰黄褐色シルト(②層)、褐灰色シルト(③層)、黒褐色シルト(④層)、赤灰色シルト(⑤層)、灰赤色粘質シルト(⑥層)より計6点が採取された。

3. 分析方法

プラント・オパールの抽出と定量は、ガラスピース法(藤原, 1976)を用いて、次の手順で行った。



第422図 プラント・オバール分析試料採取地点

4B区河川跡 土層断面表

層位	土色	土性	備考	層位	土色	土性	備考
①	5YR4-1 褐色	シルト	礫化鉄を含む	④	10YR3-4 暗褐色	シルト	濃い赤褐色土層部に、灰色土層をプロット部に含む
②	10YR5-2 灰黄褐色	シルト	礫化鉄を含む	⑤	2.5YR5-1 赤褐色	シルト	濃い赤褐色土ブロック少量含む
③	10YR5-1 褐色	シルト	礫化鉄を含む	⑥	2.5YR4-2 灰赤色	粘土質シルト	暗褐色土含む

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射(300W・42kHz・10分間)による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞(葉身にのみ形成される)に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数(試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める)に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10^{-5} g)を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネの換算係数は2.94(種実重は1.03)、ヨシ属(ヨシ)は6.31、ススキ属(ススキ)は1.24、ネザサ節は0.48、クマザサ属(チシマザサ節・チマキザサ節)は0.75、ミヤコザサ節型は0.30である(杉山, 2000)。

4. 結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科(ネザサ節型、クマザサ属型、ミヤコザサ節型、その他)および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1~4、図1~6に示す。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下、各調査地点におけるプラント・オパールの検出状況を記す。

1) 4 A区東壁

本地点で同定されたプラント・オパールは、ヨシ属、ススキ属型、ネザサ節型、クマザサ属型およびミヤコザサ節型の各分類群である。ヨシ属はIV層~Vb層で、ススキ属型はIV層~Va層、VI層~VII層の各層で、ネザサ節型はVa層を除く各層で、クマザサ属型はすべての層で、ミヤコザサ節型はVII層を除く各層でそれぞれ検出されている。このうち、ヨシ属はIV層で、クマザサ属型はIVa層、IVb層、IVd層でそれぞれ高い密度である。

2) 4 A区西壁

本地点ではヨシ属、ススキ属型、ネザサ節型、クマザサ属型およびミヤコザサ節型の各分類群が同定された。ヨシ属はIV層下、VI層~VII層で、ススキ属型はIV層上、Vb層、VI層、VII層で、ネザサ節型とクマザサ属型はすべての層で、ミヤコザサ節型はVI層を除く各層でそれぞれ検出されている。プラント・オパール密度はいずれもやや低い値である。

3) 4 B区東壁

本地点で同定されたプラント・オパールは、ヨシ属、ススキ属型、ネザサ節型、クマザサ属型およびミヤコザサ節型の各分類群である。ヨシ属はIVa層、IVb層、IVd層、IVe層、IVf層、Vb層、VII層およびVIII層で、ススキ属型はIVa層、IVc層~VI層で、ネザサ節型、クマザサ属型さらにミヤコザサ節型はすべての層で検出されている。プラント・オパール密度は全体にやや低い傾向にある。

4) 4 B区中央

ここではヨシ属、ススキ属型、ネザサ節型、クマザサ属型およびミヤコザサ節型の各分類群が同定された。ヨシ

属、ネザサ節型、クマザサ属型およびミヤコザサ節型はすべての層で、ススキ属型はIV層、Va層、Vb層でそれぞれ検出されている。このうちヨシ属はVa層で、クマザサ属型はⅧ層で高い密度である。

5) 4 B区西壁

本地点ではヨシ属、ススキ属型、ネザサ節型、クマザサ属型およびミヤコザサ節型の各分類群が同定された。ヨシ属はIV層～Vb層とⅧ層で、ススキ属型はⅥ層を除く各層で、ネザサ節型、クマザサ属型さらにミヤコザサ節型はすべての層で検出された。このうち、ヨシ属はVa層とⅧ層で、クマザサ属型はIV層でそれぞれ高い密度である。

6) 4 B区河川跡

ここではイネ、ヨシ属、ススキ属型、ネザサ節型、クマザサ属型およびミヤコザサ節型の各分類群が同定された。イネ、ススキ属型およびミヤコザサ節型は②層を除く各層で、ヨシ属は⑥層で、ネザサ節型とクマザサ属型はすべての層で検出されている。なお、①層ではイネが高い密度で検出されている。

5. 考察

4 A区の東壁と西壁、4 B区の東壁、中央、西壁の5地点では、いずれの層準からもイネのプラント・オパールは検出されなかった。このことから、これらの地点については稲作が行われていた可能性を認めることはできない。

4 B区河川跡では、①層でイネのプラント・オパールが4,400個/gと稲作跡の可能性を判断する際の基準値である3,000個/gを超過する密度で検出されている。こうしたことから、当該層堆積時は調査地もしくは近傍において稲作が営まれていた可能性が考えられる。③層、④層、⑤層、⑥層でも1,000～2,000個/gの密度でイネのプラント・オパールが検出されていることから、これらの層の堆積時にも調査地の周辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

4 A区東壁のIV層とⅣ層、4 A区西壁のⅧ層、4 B区東壁のIV層、4 B区中央のVa層とVb層、4 B区西壁のVa層、Vb層、Ⅷ層の各層ではヨシ属が卓越している。こうしたことから、これらの層の堆積時、各地点は湿地かそれに近い環境であったと推定される。その他の層ではクマザサ属型をはじめとするササ類が優勢であることから、概ね乾いた環境であったと思われる。

6. まとめ

長町駅東道路4区においてプラント・オパール分析を行い稲作の可能性を検討した。その結果、4 B区河川跡の①層からイネのプラント・オパールが高い密度で検出され、調査地あるいは近傍で稲作が営まれていた可能性が認められた。また、同③層、④層、⑤層、⑥層でも調査地の周辺で稲作が行われていた可能性が示唆された。その他の地点ではイネのプラント・オパールは検出されず、稲作が行われていた痕跡は認められなかった。

文献

杉山真二(2000)植物珪酸体(プラント・オパール)。考古学と植物学。同成社、p.189-213。

藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究1)―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―。考古学と自然科学、9、p.15-29。

藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究5)―プラント・オパール分析による水田址の探索―。考古学と自然科学、17、p.73-85。

表2 長町駅東遺跡4区のプラント・オパール分析結果(2)

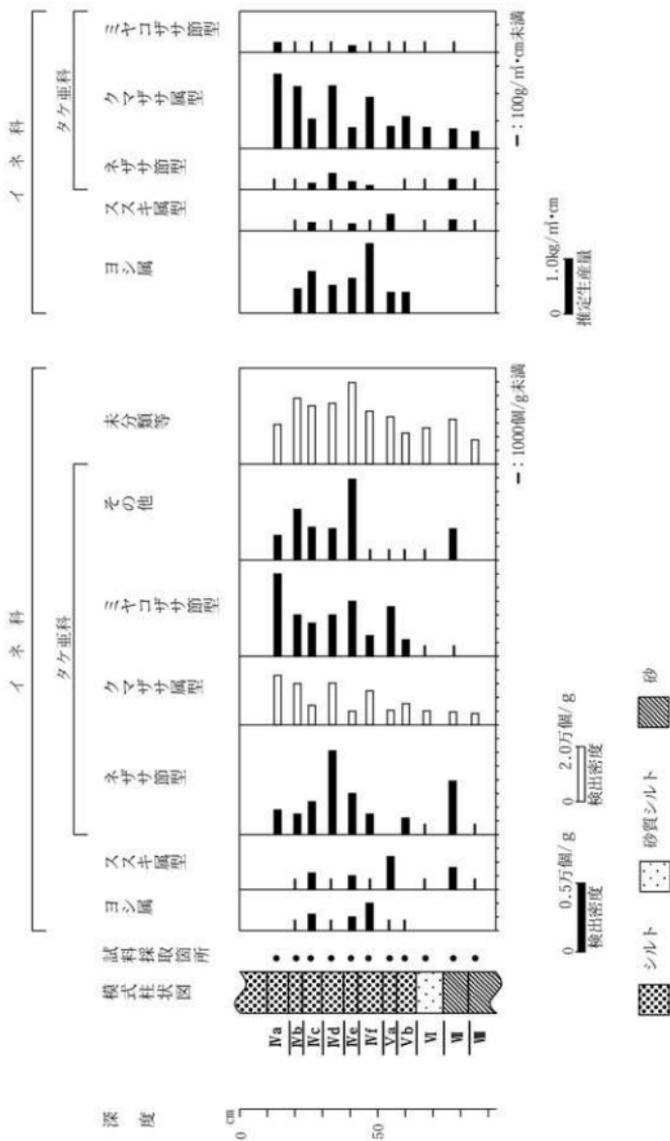
分類群(和名・学名) \ 試料	4B区東壁												4B区中央									
	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱc	Ⅱd	Ⅱe	Ⅱf	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱc	Ⅱd	Ⅱe	Ⅱf	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ	Ⅺ	Ⅻ
イ草科																						
Gramineae (Grasses)																						
イネ																						
<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)																						
ヨシ属	6	18		6	8	22	14		6	8	12	7	7	37	27	15	23					
<i>Phragmites</i> (reed)																						
ススキ属型	6		7	6	15	15	15	7	7									15	15	7		
<i>Mizanthus</i> type																						
タケ亜科																						
Bambusoideae (Bamboo)																						
ネギ竹属型	18	31	14	36	8	45	22	28	7	19	38	18	26	52	22	48	22	45				
<i>Pteridolatus</i> sect. <i>Nezasa</i> type																						
タマ草竹属型	78	80	68	90	53	59	82	99	89	44	106	55	73	60	90	102	45	159				
<i>Sasa</i> (except <i>Miyubozasa</i>) type																						
ミヤコササ属型	18	37	34	36	15	7	7	35	30	12	8	12	7	7	7	20	7	15				
<i>Sasa</i> sect. <i>Miyubozasa</i>																						
その他	18	12	14	18	8	7	7	14	7	6	8	6	7	7	7	14	15					
未分類等	132	129	143	150	121	141	142	127	74	56	113	85	99	135	202	143	67	166				
プラント・オパール総数	275	307	280	341	227	297	277	325	215	144	279	189	218	285	382	362	157	423				
おもな分類群の蓄積生産量 (単位: kg/m ² cm)																						
イネ																						
<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)																						
ヨシ属	0.38	1.16		0.28	0.48	1.41	0.89		0.39	0.48	0.77	0.42	0.47	2.36	1.72	0.94	1.43					
<i>Phragmites</i> (reed)																						
ススキ属型	0.07		0.08	0.07	0.19	0.18	0.19	0.09	0.09					0.19	0.19	0.08						
<i>Mizanthus</i> type																						
ネギ竹属型	0.09	0.15	0.07	0.17	0.04	0.21	0.11	0.14	0.04	0.09	0.18	0.09	0.13	0.25	0.11	0.23	0.11	0.22				
<i>Pteridolatus</i> sect. <i>Nezasa</i> type																						
タマ草竹属型	0.58	0.60	0.51	0.67	0.40	0.45	0.62	0.74	0.67	0.33	0.79	0.41	0.54	0.45	0.67	0.77	0.34	1.19				
<i>Sasa</i> (except <i>Miyubozasa</i>) type																						
ミヤコササ属型	0.05	0.11	0.10	0.11	0.05	0.02	0.02	0.11	0.09	0.04	0.02	0.04	0.02	0.02	0.02	0.06	0.02	0.05				
<i>Sasa</i> sect. <i>Miyubozasa</i>																						

※試料の収比重を1.0と仮定して算出。

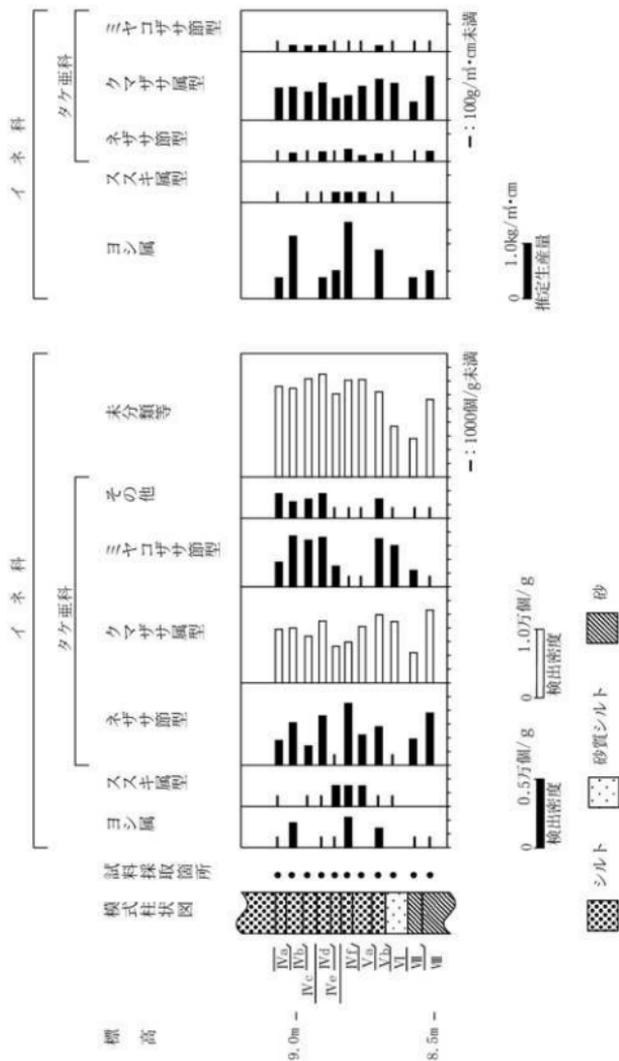
表3 長町駅東遺跡4区のプラント・オパール分析結果(3)

		4 B区西壁										4 B区河川跡				
		Wf	Ng	Va	Vb	V	W	①	②	③	④	⑤	⑥			
イネ科	分類群(和名・学名) \ 試料															
	Gramineae (Grasses)															
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)							44		15	15	20	10			
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	7	15	37	22		39						10			
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	22	7	15	15		20	10	9	15	15	20	10			
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)															
ネギ科型	<i>Piptoblastus</i> sect. <i>Nasara</i> type	15	7	15	45	20	39	69	9	9	60	8	30			
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>) type	148	96	88	82	59	69	79	96	35	45	77	49			
ミヤコザサ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	15	22	15	7	10	10	10	17	8	15	10	20			
その他	Others	15	7	15	7	10	10	10	17	8	8	10	20			
未分類等	Unknown	171	169	147	141	119	176	257	165	105	159	163	247			
プラント・オパール総数		393	324	331	319	218	363	485	357	149	310	302	386			
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg / m ² ・cm)																
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)							1.28		0.44	0.46	0.58	0.30			
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	0.47	0.93	2.32	1.41		2.47						0.64			
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.28	0.09	0.18	0.18		0.24	0.12	0.11	0.19	0.19	0.25	0.25			
ネギ科型	<i>Piptoblastus</i> sect. <i>Nasara</i> type	0.07	0.04	0.07	0.21	0.10	0.19	0.33	0.04	0.04	0.29	0.04	0.14			
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>) type	1.11	0.72	0.66	0.61	0.45	0.51	0.59	0.72	0.26	0.34	0.58	0.37			
ミヤコザサ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	0.04	0.07	0.04	0.02	0.03	0.03	0.03	0.05	0.02	0.05	0.03	0.06			

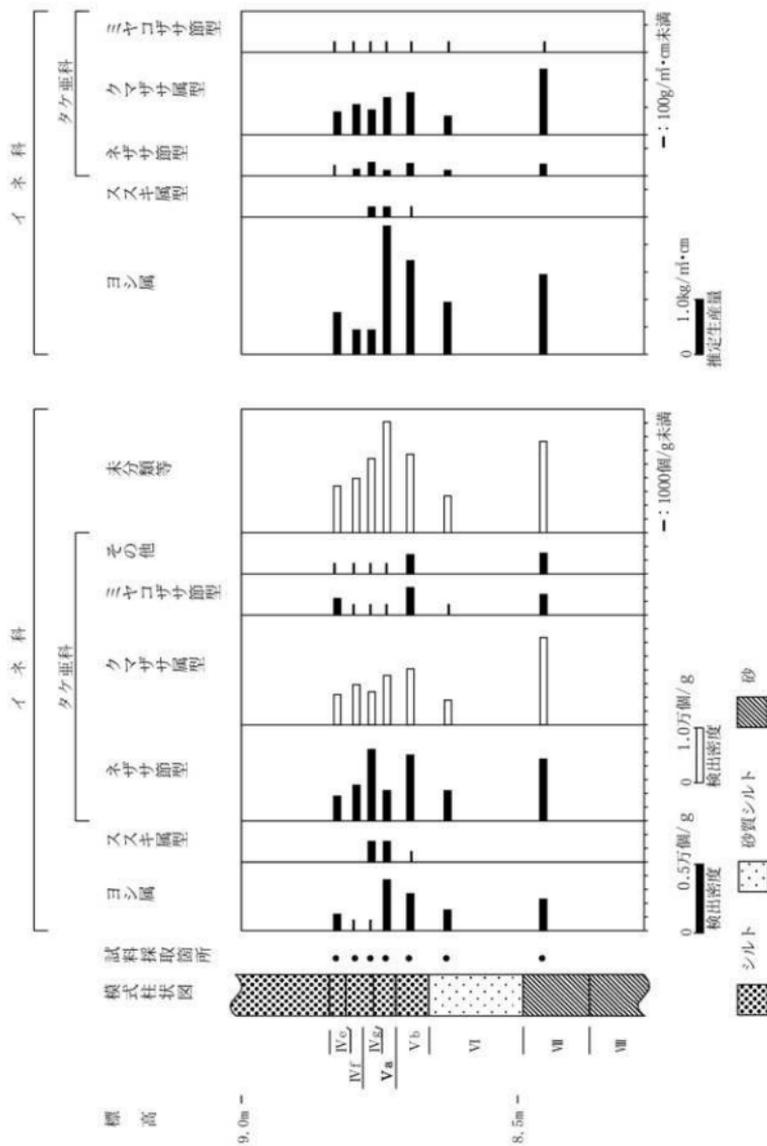
※試料の炭比重量を1.0と仮定して算出。



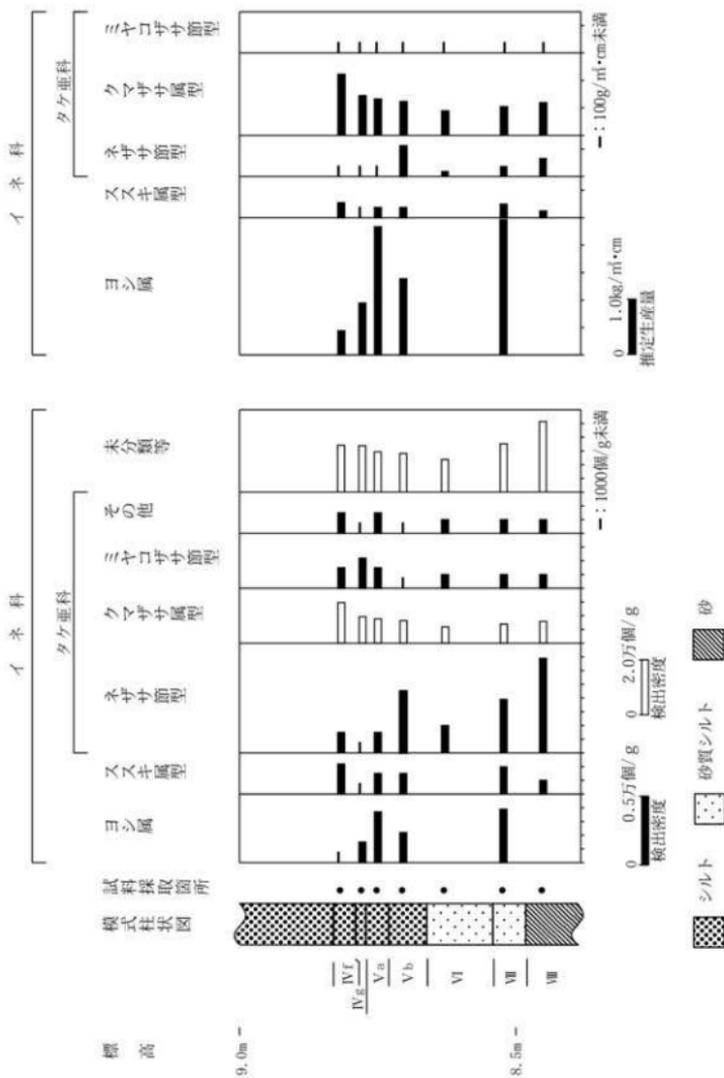
第423図 (図1) 4-A区集塵地点におけるプラント・オパール分析結果



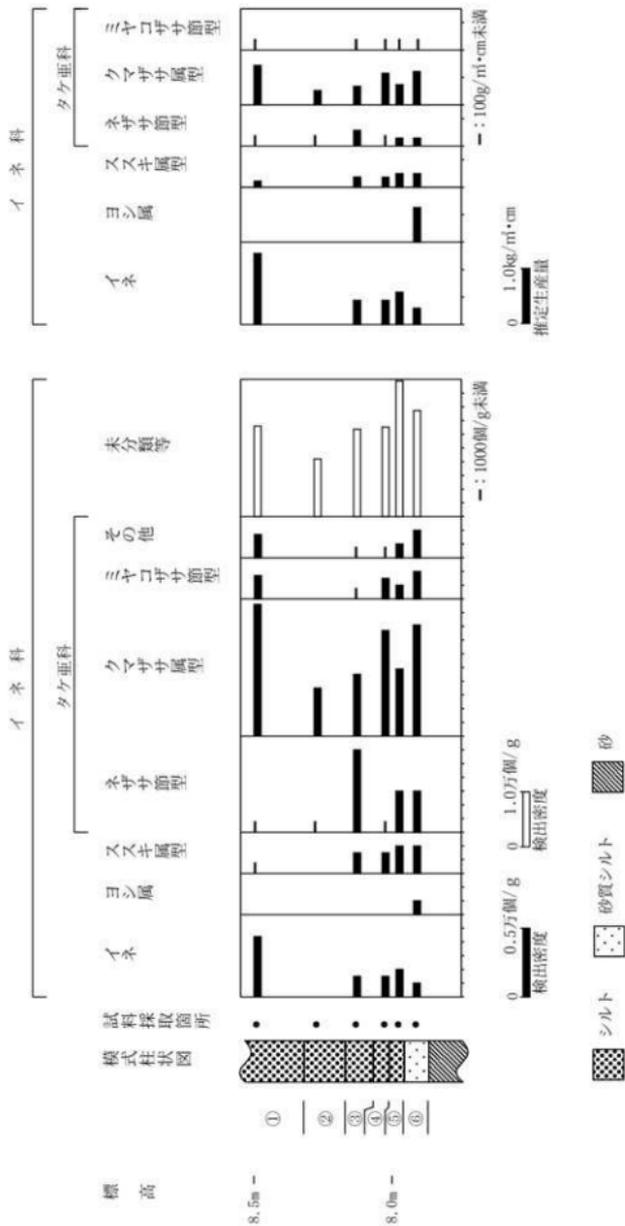
第425図 (図3) 4 B区東端地点におけるグラント・オパール分析結果



第426図 (図4) B区中央地点におけるアブラント・オパール分析結果



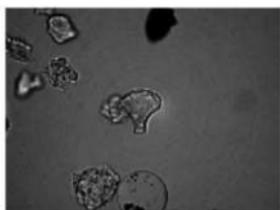
第427図 (図5) 4 B区西壁地点におけるプラント・オパール分析結果



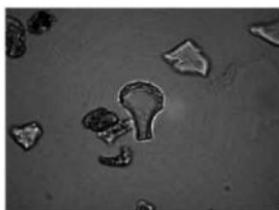
第428図 (図6) 4 B 区河川跡地点におけるプラント・オパール分析結果



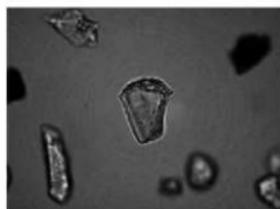
イネ



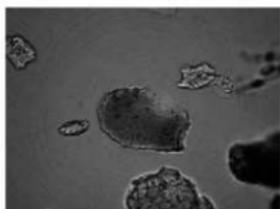
イネ



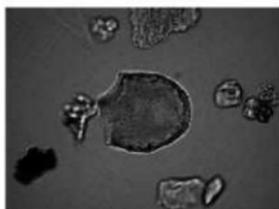
イネ



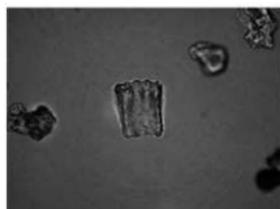
ネザサ節型



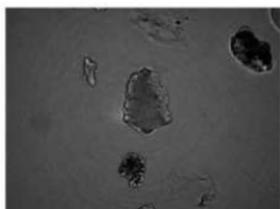
ヨシ属



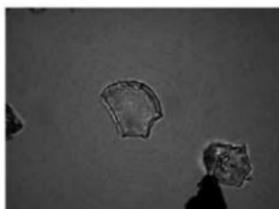
ヨシ属



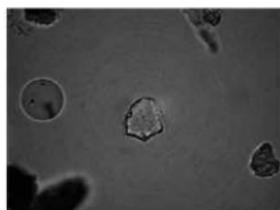
ネザサ節型



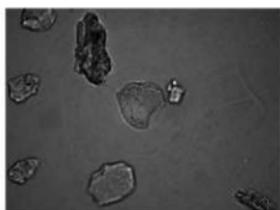
クマザサ属型



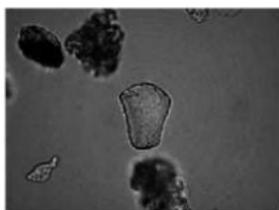
クマザサ属型



ミヤコザサ節型



ススキ属型



ススキ属型

プラント・オバールの顕微鏡写真 —— 50μm

第7章 まとめ

あすと長町土地画整理事業に伴う発掘調査は平成10年から開始し、これまでに西台畑遺跡(平成10～13年・17年)、郡山遺跡(平成13年・16～18年)、長町駅東遺跡(平成13～18年度)の調査が行われている。

西台畑遺跡の調査では、総数100軒程の竪穴住居跡の中で、竪穴住居の配置や構築に一定の規格を持ったブロックが確認されている他、Ⅱ期官衙外郭大溝の更に外側に配置された外溝跡の西辺などが発見されている。

郡山遺跡の調査では、平成13年の調査において、Ⅰ期官衙に関連すると考えられるL字型に延びる溝跡が発見されている。この溝跡は、Ⅰ期官衙西辺の推定ラインから西50mに位置し、南北方向に延びる部分では平行している。Ⅰ期官衙に関連する施設が、官衙周辺の土地割りに伴う施設と考えられる。さらに、平成16年の調査では、外溝跡の北西コーナー部が発見され、国庫補助事業による第166次調査で発見された東辺とともに、これまで南辺と西辺で発見されていた外溝が官衙の全域を囲んでいることが明らかになった。これにより、官衙は内部の建物を遮蔽する材木列と大溝により区画され、更にその外側に外溝を配置する構造であることが確認され、Ⅱ期官衙の年代や性格を考える上で重要な発見となった。

長町駅東遺跡の調査では、総数270軒以上の竪穴住居跡が発見されており、今回報告を行った集落の区画施設と考えられる区画溝跡、材木列1列、一本柱列4列が確認されている。

調査開始から9年が経過し、郡山遺跡の官衙の構造に関わるような溝跡の発見だけでなく、官衙の西側に大規模な集落が形成されていたことが明らかになってきた。この集落の成立と衰退については官衙との関係の中で考えていく必要があるが、今回の報告では集落の構造や遺構、出土遺物についての詳細な分析は行うことができなかった。

長町駅東遺跡については4区調査以降も毎年発掘調査が実施されており、膨大な量の資料が蓄積されてきている。副都心大通り線を対象とした調査であるⅠ区・2区(平成13年調査)、3A区(平成14年)、3B区(平成15年)について、今後順次調査報告を行っていく計画であるが、最終巻となる3B区の調査報告書の中でこれらの課題について検討することにしたい。

そのためここでは、通路状遺構を伴う区画溝と竪穴住居跡の関係と、下層から検出された弥生時代中期の墓域や水田跡の調査成果について整理し、まとめとしたい。

1. 調査成果の基礎整理

a. 遺構の確認

今回の調査では、表土層から遺構検出面までの掘削が顕著であり、遺構上位の観察が充分にできなかった。このため各遺構がどの層位から掘り込まれたかが不明確なまま、個々の遺構の調査を行うこととなった。このことを補完するため、整理作業の段階で調査区壁面の土層断面から、遺構全体の傾向を再検討した。

土層断面の観察から、検出遺構中最も上位からの掘り込み面を持つのは、Ⅱ層上面から掘り込まれる溝跡SD101・103、及びⅡa層上面から掘り込まれる小溝状遺構D群である。SD101を切る溝跡SD102・掘立柱建物跡SB16については、少なくともⅡ層以上からの掘り込みである。また、小溝状遺構D群に切られるA群はⅢ層下面から掘り込まれている。この他Ⅲ層から掘り込まれる主要遺構としては、Ⅲb層上面から掘り込まれる溝跡SD80及び井戸跡SE2、次いでⅢc層上面から掘り込まれる竪穴住居跡SI214、及び溝跡SD77等である。

本遺跡の主要遺構である竪穴住居跡や区画施設については、その殆どがⅣb層上面からの掘り込みと思われ、重複関係上新しい時期の遺構ではⅣa層上面から、また古い時期の遺構ではⅣc層上面から掘り込まれた例も認められた。

c. 竪穴住居跡の整理

竪穴住居跡については、住居構造に関わる諸要素を整理し、一覧表を作成した。この表については、以下に若干の補則を加える。

「位置」は、まず区画溝の西に位置するか東に位置するかで西・東に大別し、SD66「通路状遺構」の想定延長ラインを基軸とし、その南北で細分した。つまり、区画溝の東、通路状遺構の想定延長ラインの北に位置する住居は「北東」と表示される。

「方向」については住居間での比較を容易にするため、カマドや特定の1辺を基準とするのではなく、座標北から西に90度以内の数値で表すことのできる辺の方向角で統一した。つまり数値が0及び90に近いほど北性が強いことを示す。

「規模」は、方形住居の辺長(長短がある場合は平均値)を基に数値分布を検討した結果、ある程度のまとまりがみられた3.6～5.0mを測るものを中型とし、3.6m未満を小型、5.1m以上のものを大型と分類した。

「平面形」は、「長辺長/短辺長」の値が1.15以上になるものを長方形と設定し、それ以外は方形としている。

「カマド位置」は、カマドは住居の壁に垂直に付設されるものと考え、その角度が座標北方向の東西45°以内の場合は「北半」、南方向の東西45°以内の場合を「南半」、これら以外のものをその向きに応じて「西」「東」を標記した。

「燃焼部位置」は、燃焼部から煙道部への立ち上がりが、竪穴プランの内側に位置するか外側に位置するかによって、それぞれ「内」「外」とした。

「煙道部底面」は、外方に向かって高くなっていくものを「上」、低くなっていくものを「下」、水平あるいはどちらともつかないものを「水平」と表記した。

「煙道部先端」「煙道部途中」は、その位置にビット状の明瞭な窪みを有するものについて「○」を記入した。

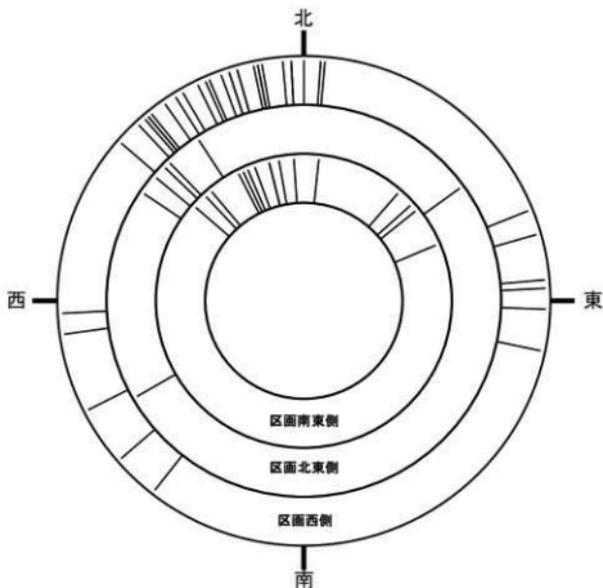
その他、棟持柱構造と考えられるもの、間仕切りを有するもの、張り出しを有するもの、灰溜めビットを有するもの等、それぞれに「○」を付記している。

今次の4区調査区で検出された竪穴住居跡を概観すると、次のような構造的特徴が認められた。

- ① 建物方向については、概ねN-30°-50°-W、N-10°-30°-W、N-80°-(90=0)°-10°-Wの3つのグループに大別できた。
- ② カマド位置を特定できた63軒70例のうち、住居北半に構築するものが54軒58例と、80%を大きく超える。
- ③ カマドを住居南半に構築する例には大型住居がみられない。また、真南に近い方向にカマドを構築する例は、1例も認められない。
- ④ カマド燃焼部が竪穴の外に位置する住居跡は、SI124の1例のみである。
- ⑤ 棟持柱の構造を持つものは小型或いは長方形の住居に限られる。

上記②の傾向については、長町駅東遺跡の南南西約3kmに位置する栗道跡の昭和49・50・56年調査においても、同様の検出結果となっている(『栗道跡』1982)。同報告書では、「強風のときに煙の逆流の可能性もある方向に敢て煙道部を向けているのは、住居の利用計画においてどのような理由によるかは、今後さらに検討されるべき問題と考えられる」との問題提起がなされている。

本調査区においても第431図にみられるように、カマド構築にあたっては住居北側に優位性が認められるが、機能的な面からの理由付けは現状では困難である。しかし、区画溝北東部に位置する住居のあり様から考えると、隣接する住居同士ではカマドのない東西辺が向き合うようにして構築されており、集落の構成計画に対しての住居築造の規制の1つであることが考えられる。



第431図 竪穴住居跡カマド付設方向

2. 区画施設の検討

a. SD66の遺構重複状況

本溝跡によって切られる主な遺構は、竪穴住居跡S1120・136である。S1136の掘り方中からは、住社式期に比定される土師器環が出土しており、本溝跡構築時期の上限は住社式期以降と考えることができる。S1120については、その大半が前年度調査区である3B区に位置しているため、本項においてはその全容を検討することはできなかった。このS1120の帰属時期を検討することにより、本遺構構築の上限を更に詳細にできるものと思われる。

逆に本溝跡を切る遺構として、SD77溝跡を始めとして多くの遺構が挙げられるが、竪穴住居跡との重複関係が認められないことは特記されるものである。このことは、本遺跡において集落が営まれている間は、本溝跡が開口・機能していた可能性を多分に感じさせるものである。

b. SD66の堆積状況と出土遺物

SD66の堆積土は、4A区の分層に従うならば、最も多くの遺物を包含していたのは4層で、全掲載遺物中73%を占めている。この4層は溝のほぼ中位の堆積であり、遺物量も非常に多い。また4層堆積以前には、溝内への遺物廃

棄が行われてはいるものの、依然として溝の掘り込みは深く残っており、区画溝としての本来的な機能を失っていなかったと思われる。

溝埋土5層以下を「下層」、4層を「中層」、3層以上を「上層」として捉えた場合、

下層段階：区画溝構築・機能

中層段階：区画溝の機能低下

上層段階：区画溝の廃絶

という流れを想起できる。但し本調査区の場合、遺構面の上位が大規模に削平されている点や、調査開始面を本来の掘り込み面よりやや下位に設定した点からすると、SD66の埋土上層が遺構廃絶期に直結しない可能性も留意すべきであろう。簡単ではあるが、以下のように各層からの出土土器を概観した。

〔下層〕(第432図)

須恵器E-09は小型の坏身で、その器形から陶邑窯編年では、中村編年のⅡ型式第4段階、田辺編年のTK43型式のもので、年代は6世紀末と考えられる。法量がかなり小型であることから、蓋となる可能性もある。

溝跡底面に近い層からの出土であることから、区画溝の構築時期や構築目的を考える上で重要な遺物であるが、これまでの調査で区画溝と重複しない6世紀末段階の竪穴住居がないことと、住社式期の住居を切って区画溝が造られていることから、これらの住居内の遺物が流入した可能性を考えたい。

〔中層〕(第432図)

出土遺物を概観すると、概ね7世紀中葉～8世紀前半代に該当すると考えられる。開口・機能している区画溝に、ある程度の時間をかけ4層土が堆積したとも考えられる。しかし遺物の出土量の多さからすると、新規竪穴住居の構築にあたり、掘り出された大量の前代遺物が廃棄されたことも想定すべきかと思われる。須恵器E-26は小型円面硯で、近隣における何らかの重要施設、或いは位の高い人物の存在を予想させる。いずれにせよ、中層土の堆積が始まる頃には、構築時の溝本来の目的が薄れつつあった事実是否めない。

〔上層〕(第433図)

須恵器E-27は大形の円面硯脚部破片である。4層出土のE-26とともに、官衙との関係を考える上で重要な遺物である。脚部径が30cmを超える大形の円面硯の出土例としては、広瀬川を挟んで対岸に位置する神欄遺跡のものがある。神欄遺跡からは8世紀中頃～後半の掘立柱建物跡や一本柱扉跡などの遺構が発見されており、遺跡の東側に認められる条里跡との関連から、律令体制のなかで郷に関わる施設があったと考えられている。

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながまちえきひがしいせきだいよじちょうさ							
書名	長町駅東遺跡第4次調査							
副書名	仙台市あすと長町土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書1							
巻次								
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第315集							
編著者名	工藤信一郎 土岐耕司 平田貴正 利屋勉 瀧久森彬							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目七番1号 TEL 022-214-8894							
発行年月	2007年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
ながまちえきひがしいせきだいよじちょうさ 長町駅東遺跡第4次	みやぎけん せんだいし 宮城県仙台市 たうほく ながまちろくじちようめい 太白区長町六丁目	4100	01449	38° 13' 18"	140° 53' 09"	2004/4/15 ～ 2005/2/4	7,000	土地区画整理事業に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長町駅東遺跡第4次	墓域 生産跡 官街関連遺跡・集落跡	弥生時代 古墳時代 飛鳥時代 ～ 平安時代	弥生土器埋設遺構 土壇墓 水田跡 竪穴住居跡 掘立柱建物跡 材木列 区画溝跡 通路状遺構 土坑 井戸跡 溝跡 小溝状遺構群 ピット	弥生土器 石器 土師器 須恵器 瓦 土製品 石製品 金属製品		関東系土師器 須恵器円面硯 集落に伴う区画施設 (大溝・通路状遺構・材木列)		

仙台市文化財調査報告書第315集

長町駅東遺跡第4次調査

—仙台市あすと長町土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書1—

[第2分冊]

2007年3月

発行 仙台市教育委員会

宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7-1

文化財課 022(214)8894

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市青葉区立町24-24
